

# 秘封倶楽部（仮）

青い隕石

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

私はもう、夢を探さない。

もう一度、あなたに会いたいから。

※この小説は「東方Project」の二次創作です。

ざっと計算したら150話超えそう。どうしよう。

# 目次

科学世紀の秘封倶楽部	1
土地の伝記	7
A Secret Adventure	16
(上)	
A Secret Adventure	24
(下)	
遠野物語	35
猫と賢者	42
そして二人は迷い込む	48
彼女の本質	57
問いかけ	65
一時の別れ	76

閑話：東方キャラの戦闘能力をFE方式で表してみた。	85
〜登場人物紹介〜	148
出発前の一時	152
ヒロシゲ36号	160
大罪人	167
取り残された場所	182
快晴の下の星読	190
19路に乗せた夢	200
二人だけの世界	210
夢分析	219
ささぐうた	227
対極の存在	238

お願い	248
その目で見たもの	257
季節跨いで夏の空	270
変わりゆく価値	277
クオリア	287
天体観測	297
二人でなら	307
それは、突然の	315
月見酒	329
Everyday s	lacking
something	341
些細な、大きな違い	348
アドバイス	356

## 科学世紀の秘封倶楽部

「幻想というものは、得てして科学に塗りつぶされるものである」

朗らかな口調で私は持論を展開する。昼というには遅く、夕方というにはまだ早い時間帯。私たちを含め十数人を乗せた列車はゆっくりと目的の場所に向かつて歩みを進めていく。窓から流れる景色には、昨今では希少品となった天然物の米を栽培している田園風景が見られる。

京都はもちろん、遷都し廃れたとされる東京でもお目にかかれない光景である。今時、このような場所が残っていること自体、私自身も半信半疑だった。京都とその周辺にいるだけでは分からないことがある・・・それを学ぶことが出来ただけでも今回の遠征は糧になったといえよう。

先ほどの私の発言に反応したのか、窓の外側をただじつと見ていた彼女がこちらを向く。

「何、蓮子。またお得意の蘊蓄でも始める気？」

特徴的な帽子から流れるように伸びるブロンド色。陶器を思わせる白い肌とは対照的な、見たものを深海に誘うような深い、深い蒼色。男なら間違いなく十人中十人が振

り向くであろう容姿に加え、私よりアルファベット2文字くらいは大きそうな胸囲、もとい脅威の戦闘力をその身体に保有している。

同じ女として嫉妬を覚えずにはいられない彼女、マエリベリー・ハーンことメリーはその端正な顔を若干歪ませ、私の言葉に反応した。言葉の端に若干の棘がついている気がするが、思い過ぎだろう。

隣のスペースに置いていた帽子を持ち、指でクルクルと廻しながら私は先ほどの言葉を繋げた。

「人は古来より、自らの理解の外にあるものにすら理由をつけようとしてきたわ。身近なものはもちろん、人の手には負えない強大な力……雷や地震はそのいい例でしょうね。それと我が相棒のメリーさんや、将来プランクと称される予定の私が考えた考察を蘊蓄の一言で済ませるのはどうかと思うのだけれど？」

「あら、自称プランクトンの頭脳が何かしら宇佐見さん？」

くすくすと笑いをこらえる仕草をしながら彼女はからかってきた。誰の頭がミジンコレベルだこの野郎。メリーはああ言っているが、私の成績は学科内でも上から数えたほうが早いのだ。毎回順位一桁とかふざけたことをやっているメリーがおかしいのであって、決して私の頭が小さい訳ではないことを明記しておく。

「……こほん。自分の力ではどうしようもない災厄に対して、大昔の人類はそ

れを『神の力である』とか考えてたらしいわ」

「明らかに人では起こせない超常現象。明らかに人の理解できない範疇にあるもの。それでも人は意味を求めたってわけね」

「ご名答。意味のわからない恐怖より、意味のわかる恐怖のほうがまだマシよ。貴族の時代、鶴と呼ばれる妖怪が大げさといえるほど恐れられたのは最後まで正体がわからなかったから。地震とは神の怒りによる大地の脈動、雷は天から落ちる神の怒声」

ふう、と息を吐いて飲みかけのペットボトルに口をつける。11月中旬、山間部ではこの時期に稲刈りを行うという。もうすぐ見られなくなる黄金色に染まる一面の景色。その奥にポツリと立っている小さな鳥居を視界に捉えた。

「神の感情がこのような不幸をもたらすなら、神を祭り挙げて怒りを買わないようにしましょう。そうやって人々は空想の存在のために無数の神社を創設し続けたわ」

あほらしい、とは思わない。災害は、疫病は、容易く人の命を奪う。真面目に、必死に生きていてもある日その身に突然降りかかるかもしれない災厄。

今も昔も変わらない生への執念。生き物としての本能。命を落とさないために、それこそあらゆる手段を試したのだろう。鳥居を構え日本各地に数多の社を築いたのも、その執念が生んだ結果なのかもしれない。

「まあ、今の時代を生きる私から見ればやるせなさは感じるけどね。」

はあ、とため息をつく。人々が恐れた現象は、他ならぬ人の手にとって解明された。空想の果てに生まれた幻想も、科学技術という最も信頼できる存在の前では塵芥同然となってしまったのだ。

かつては全世界あらゆる場所で信仰されていたと呼ばれる宗教も、百年ほど前から徐々に規模が縮小していると聞く。それもまた、時代の流れかもしれない。

列車は進む。停車した駅で1、2人ほどの乗客を入れ替えながら、目的地に向かって進んでいく。早朝、日が昇る前に京都を発つたのにもかかわらず、未だ目的地は見えない。東北に来るまではあつという間だったのに、そこから先はずつと時代遅れの列車を乗り継ぐ羽目になった。

仮にこのアンティークを明日から京都の快速と取り替えた場合、さぞ面白い風景が見られるだろうと考えた。働くビジネスマン全員が会社に揃うのが先か、太陽が空の真上に到達するのが先か、予想してみるのも面白い。

窓枠から空を見上げる。未だ太陽が輝く時間帯だ。私の目が時間と場所を把握できるようにするまでには目的地最寄の駅に着けるだろうか、少しだけ不安になる。始めてくる場所だ、真つ暗闇で今日止まる宿を見つけられませんでした、となってしまうては笑えない。

「蓮子」



「何?」

ふと、メリーに名前を呼ばれた。視線を向けると、何かを期待しているような顔をしていた。

「科学で解明された世の中なら、何故今回の冒険を計画したのかしら?」

こちらを試すような、いや、こちらの返答を分かかっていてあえて質問したような口調。そこまで期待されているのなら、私も望み通りの答えを返そう。

胸に手を当て、視線を真つ直ぐ合わせて私は言った。

「現の世界に残る夢をこの手で見つけるためよ!」

幻想が淘汰された。科学が世界を支配した。それは紛れも無い事実だ。

それがどうした。淘汰されたからといって完全に無くなったのか。科学のみで本当に世界の全てを余すことなく説明できるのか。神様なんていない? いったい誰がそう決めたのだ。

科学世紀に成り代わったこの時代だからこそ、夢を、幻想を追い求める。追い求め、この手で掴んでみせる。

私、宇佐見蓮子と彼女、マエリベリー・ハーンの2人が……『秘封倶楽部』が現の夢を見つけてみせる。

「だから、今回もしつかりついて来てね、メリー」  
力強い私の言葉に、メリーは静かに、楽しそうに微笑んだ。

## 土地の伝記

「20時03分……ホームクロスプレーでギリギリセーフっていった所かしら？」

後ろから穏やかな声が聞こえる。

待つて、とりあえず言い分けさせて欲しい。まず、山間部だということがあり平野よりも日没時刻が早いだろうとは予想していたのだ。すっかりとそこまでは考えていたのだ。京都と東北という地域による日没差まで考えが及ばなかったただけなのだ。

結局、最寄り駅に着いたときには既に太陽が沈みかけている時間帯となった。

それでも駅から宿までは徒歩30分ほどでつく。地図を見ながら歩けば大丈夫だと高をくくっていたが、その肝心の道標に記載されていない道が数多くあり、知らない道を知らずに通っていくうちに現在地も分からなくなるというダブルパンチ。一か八か、冴え渡る私の勘で選んだ道のりは、見事に旅館と正反対の方向へメリーを導くファイインプレーとなった。

高校時代、『地図も読めない女』という称号を欲しいままにしてきた私の力は今も健在のようである。

月を見て場所を特定しようにも、夕方付近から急速に広まってきた雲が空一面を覆いつくしてしまった。こうなってしまうては私はただの一般人である。日中スマホを弄り過ぎたため、オーグル先生に聞くだけのバッテリー残量などありもしない。

何が、「今回もしっかりついてきてね、メリー」だ。自信満々に言つた数時間前の自分を張り倒してやりたい。

結局、女子大生二人で夜の田舎町を彷徨う所業は優に2時間を費やした現地探索と相成ってしまったのである。1時間過ぎたあたりで、後ろを歩くお方から受ける圧力がやばい事となっていた。1時間半後には視線が実体となつて私の背中に突き刺さつてきた。

現在はどうかつて？何も圧力を感じなくなつた。後ろを振り返ると、笑顔のメリーとバツチリ目が合つた。

今日が私の命日となるのかもしれない。割とマジで。

慌てて前を向き、旅館の玄関を潜る。ぴったりと寄り添うようにメリーも入つてきた。あかんこれ逃げられないやつだ。せめて遺書を書く時間はもらえないだろうか？

今日この日を生き延びるため必死に頭を巡らせていると、廊下の奥から一人の女性が歩いてきた。

「あらあらようこそこんな所まで。えーと、宇佐見様だったかしら？」

「は、はい。本日は予定時刻より遅れてしまい申し訳ありませんでした」

「いいのよそんな細かいこと！さき、冷えたでしょ？早く部屋に案内するからね。……あなた！宇佐見さんが到着したわよー！」

屈託のない笑みを浮かべた女性は、恐らくこの宿の女将だろう。失礼ながら見た目から50を過ぎていると思われるが、歳のことなど忘れさせてくれるような明るさに思わずこちらもほっこりしてしまう。

玄関を上がったところで、私たち二人の荷物を女将さんが一人で担ぎ上げた。さすがにそこまでしていただくのは悪いと思ったが、

「いいのいいの！長旅で疲れてるでしょ、素直におばさんに頼りなさいーねー！」

と押し切られてしまった。ニコニコしながら軽い動作で荷物を運ぶ動作を見て、静かに小さく頭を下げた。

女将の後を追いなながら目を巡らす。京都はもちろん、東京ですら重要文化財やら何やらで保護されている建物くらいでしかお目にかかれない木造建築。一步一步歩くたびに微かにギシツ、ギシツと床が音を立てる。奥に見える部屋と廊下を分ける仕切り……あれは障子、というものだろうか？

スマホで調べただけでは絶対に味わえない実感。3連休を利用した2泊3日の観光兼サークル活動を計画するに当たって、最後の最後まで迷った宿屋選びだったが、安易

なビジネスホテルにしなかつた判断は間違つていなかったと感じた。

遅めの夕食と入浴を済ませた頃には時計の時刻は10時を回っていた。浴衣を着て充電中のスマホをいじりながら、前もつて大学で印刷しておいたサークル活動の資料を机に広げ、ちら見する。半分以上は観光用であることを気にしてはいけない。

テレビでは明日の天気予報を放映している。午前中は引き続き曇りだが、午後からはずっと快晴とのことだ。

ありがたい、と思つた。デジタル時計を信用していないわけではないが、時間を確かめるには自分の目以上に頼るものはない。星を常時確認できるのは非常に大きい。

「蓮子〜明日はどこ行く〜?」

耳元で声が聞こえた。

彼女、マエリベリー・ハーンは同じ浴衣に着替えた私の背中に回つて、ぎゅーつと抱きついている。

「とりあえず、2時間散歩に付き合わされたことについてはこれで許してあげる」  
自分の肩にあごを乗せながら頬ずりしてくるメリーから仄かにシャンプーの匂いが漂ってくる。

半分くらい真面目に死を覚悟していた私にとって、それだけの罰で済んだのは僥倖である。メリーより先にお風呂から上がったこつそりと書き溜めた遺書の出番はまだ先のようなのだ。

あと、先に言っておく。私はノーマルだ。今まで好きになつた異性はいないがれつきとした女だ。

「れーん♪」

とか言いながらさらに体重を乗つけて抱きついてくるメリーに対しておかしな感情を持つたりはしていない。メリーが格別に美人でかつ親しき仲のためか、このような体勢でも不快感はまったく感じないだけだ。恋愛感情とかそんなものはない。断じて。

え、メリーはどうかって？

以前こんな感じでスキンシップをとられた時に質問してみたの。「ちよつと、これじゃあまるで恋人同士じゃない」って。そしたらメリーは真顔で

「大丈夫よ蓮子。今の日本は同性愛にも寛容だから」

……私にはノーマルだ。事あるごとにメリーに言っているし、今この場でも断言する。とりあえず必要以上に引つ付くのはやめて欲しい。背中に大きな二つの感触を感じるたび、言いようのない敗北感に陥る羽目になる。

こほん、と一つ息を吐き、資料の一つを手取る。

『『デンデラ野』。岩手県遠野郷に存在すると言われている。姥捨て山という別名もある』

私の声を聞き、メリーも顔をずらし、目線を資料に向ける。そこに載っている山こそが今回、京都からはるばる岩手まで足を運んだ最大の理由である。

「デンデラ野の歴史は飢饉と共にあり……。地質的にも豊かとは言えない土地柄、昔は自分たちの食料を確保することすら至難の業だった。不作の年ともなれば、里の間総出で食料を探しに行かなければいけないほどに」

「一家全員食べていけないだけの食料はない。しかし働き手となるとなる成人、里の未来を担う子供を死なせるわけには行かない。だからこそ、悲しい風習が生まれたのね。」私の言葉を引き継いだメリー。資料を見つめる表情は先ほどと打って変わって憂うようなものとなっていた。遠征すると決めてからの1週間、私たちは可能な限り調査した。

この山に関する歴史、風習、伝記、噂……。その悲しい記録を。

「齢60を超えた老人……。彼らは息子に背負われ、デンデラ野まで運ばれた。里に戻ることは許されず、極限状態の中で老人同士、協力して余生を過ごしたのね。山で摂れるわずかな食料を頼りに……」

ふう、とメリーが息を吐いた。もの悲しげな表情を見せている。飢饉の多い土地で生



きていくための、苦渋の決断だったのだろう。良いか、悪いかの問題ではない。そうしなければ、子孫を残せない。自らの種を存続させるという、全ての生物のDNAに刻まれた本能に従っただけ……ただそれだけのことだ。

「寿命を迎えた老人については家族に連絡が入って、息子たちの手で埋葬されていたらしいけどね。……メリー、風習については一旦置いておきましょう」

慰めるように言葉を紡いだ後、彼女の顔を見ようとして、超至近距離でバッチリ目が合っつてしまい、慌てて資料に目を戻した。いつもくっついてくるために耐性はできたが、今みたいな不意の事故にはまだ慣れていない。

大丈夫、顔を赤くなっていないはずだ、私はノーマルだ。とかなんとか言い聞かせていると、嬉しそうな表情になったメリーがさらになだれかかってきた。これ、帰るまでに私の純情守られたままなのかな……。と不安になったのは秘密だ。

これ以上変な雰囲気になる前に空気を変えようと、口を開いた。

「メリー、デンデラ野に」

「蓮子く明日のデートどこから行く？」

「おいちよつと待て」

さつき見せた儂げな雰囲気どうした、と突っ込みたくなるような変貌である。女心と秋の空とかそんなレベルじゃない。というか、デートって何だ、デートって。デンデラ

野以外はただ2人で観光するだけであり、間違つても恋人同士が行うようなあんなことやこんなことはしない。

「ふふ、冗談よ蓮子。私としては本気で捉えてもらつてもいいけど」

「遠慮しときます。メリー、あまり夜更かしすると明日に影響するから、早いうちにまとめるわよ」

「は〜い……『噂』について、ね」

メリーはくすくす笑いながらも噂という単語に力を込めた。その表情は、あの出来事を思い出しているようにも見えた。

「今まで暮らしていた村に、子供達の元に、帰りたくても帰れない」老人たち」

男が死ねば鈴の音（金属音）、女が死ねば泣き声が、デンドラ野から風にのつて聞えてくる……現在には心霊スポットとしても有名なデンドラ野そして……」

「この世とあの世の境界。それががあると言われてる」

静かに資料を捲る。デンドラ野についてまとめられていた資料だが、最後のページには違う土地の情報が載っていた。

## 『蓮台野』

京都にある上品蓮台寺という名前の寺を指す言葉であり。

1週間前、私たち秘封倶楽部が、この世とあの世の境界を垣間見た場所だった。

## A Secret Adventure (上)

真夜中二時を過ぎ 誰もが眠りにつく宵に 二人は連れ立って 今町を抜け出す

11月初頭。赤、黄色に色を変えた舞い散る木の葉が、もうすぐ訪れる季節の変わり目を感じさせる。夏なら一日中薄手の半袖で事足りた気象も、今同じことをすれば『風邪引きたいの?』と聞きたくなる程度には寒風吹きすさぶ時期となった。ましてや、今のような時間帯であれば尚更である。

ふう、と吐いた息が微かに白く曇った気がした。天高くから見下ろす月明かりの光がありがたく思える程度には人工的な光源がない場所を歩いていく。遷都してからさらに発展を遂げた京都の中では珍しい場所といえる。

科学世紀という『答えがない事柄がない』時代。良く言えば便利で、発展した世の中。

逆を言うなら、夢の無い世界。一見完成された世の中において不完全を求める私たちは正常なのか、異端なのか。

そこまで考えて首を振る。

異端だつていいじゃないか。おかしくたつていいじゃないか。

自分たち、秘封倶楽部以外にも世界の不思議を求めるオカルトサークルじみたものはそれこそ数え切れないほどある。私たちが活動する前から怪奇を、神秘を求めてきた人がたくさんいた。

男性も、女性もいた。私より若い少女も、私より遥かに年配の好々爺もいた。

何より、この気持ちには嘘をつけない。活動という冒険を通じて芽生えた感情。未知を追求する際に感じる想い。苦しいほどに胸を締め付けられる興奮……。しがらみが多くなつてきた大学生活だからこそ、より一層追い求めたくなる非日常。

遠慮も、躊躇いもいらぬ。今この瞬間だけは自由に生きれる。だから思ったままの行動を取ろう。思ったままの言葉を口にしよう。

真夜中2時過ぎ、私は確かな足取りと共に顔を上げたまま……。目の前の黒髪の少女に目を向けた。

「ああああああ！何でこんなに寒いのおおおお！」

「風邪引きたいの蓮子？」

切欠は些細なものだった。いつも通り部室（蓮子の部屋とも言う）で次の活動打ち合わせのため、二人で過去の資料を調査していた時のことだった。

「メリー」

パソコンの画面を見ながらぼんやりとしていた時、不意に蓮子が尋ねてきた。見ると、彼女は私には視線を向けず、手に持った二枚の写真をしつと見つめていた。

身乗り出し、写真を覗き込む。それは何というか、不気味な写真だった。

一枚目の写真は、古ぼけた寺院が写っていた。一目で夜に撮影されたものだと分かる、見切れ気味に写る月。場所が場所だけに、得体の知れない雰囲気伝わってくる。

もう一枚は一見するとただの草原の写真だが、明らかにおかしい部分があった。長い草が生い茂る中にぽつんと一つだけ墓石が立っているのだ。おまけに、墓石の周りに奇妙なもやがかかっている。このもやは……

「メリー、このもやに見覚えはない？」

楽しそうな、わくわくとした声に思考を遮られた。再び彼女に目を向けると、今度はしっかりと目があつた。先ほどの声にも増して期待するような、興奮した表情。好きなケーキを食べる時より何倍も輝いている顔を見て、思わず微笑んでしまった。

「当たり前よ、蓮子」

「よしっ!!! メリー、休日空けておいてね! 久しぶりの冒険よ!」

思い立ったが吉日、とばかりに蓮子が計画を即効で組み立てたのが3日前。行き先が府内だったということもあり、準備が完了したのも3日前。冒険を今か今かと待ちわびすぎ、講義中も舞い上がっていた彼女の頭に教授の拳骨が落ちたのが2日前。昨日なんかは既に心が一足早く冒険に旅立っていたようで、どんな言葉をかけても「そうねー」「うんうん」という言葉しか返ってこなかった。

試しに「蓮子、私のこと愛している?」とそれなりに大きな声で聞いてみた。そんな質問にも彼女は「そうねー」と返答してくれた。大学のキャンパス内で。結構周りに人がいる状況で。

数瞬間まった空気の間を抜けるように私と蓮子は通り過ぎていった。大学卒業までには仕留めることができそうだ。何がとは言わないが。

さて、普段からちよつとおかしな言動や行動が目立つ蓮子（そこがまた愛おしいのだが）がいつにも増して奇行に走っているのは、件の写真が原因である。

草原の中に佇む墓石とそれを覆う奇妙なもや。一見すると心霊写真の類なのではないかと判断する人が多いのだが、これは心霊現象でもなければ、人の手が加えられたものでもない。この写真は、ありのままの世界を映し出している。

### 『結界』

世界の至る所にあるとされる、謎の障壁。この世とあの世との境目とも、パラレルワールドへの入り口とも言われている。人類がいつその存在を認識したのかは詳しく記録されていないが、だいたい100年前程から一般人も結界についての知識を持つようになったといわれる。

まあ知識といっても普通の人は、何か世界を覆っているものくらいにしか思っていない。昔、政府が『結界に干渉を与える行為全般を禁止する』と大々的に報道したことで当初は話題となったが、時間の経過と共に人々の関心も薄れていった。

理由は様々なれど一番大きな原因は、人の目で見る事ができないためだ。「自分の目で見たものしか信用できない」という頑固な人間は結構いるが、実際結界は人間の目には映らない。単純に人の可視領域外にあるのか、はたまた他の要因があるのか……真偽の程はともかく、自分で確認の仕様が無いものに関心を持ち続けられるほど人は根



気強くない。

とはいえ、非科学的ともいえる結界を追い求めるオカルトサークルは多い。その人たちがどうやって結界の場所を知るのか？そこで登場するのが映像記録や写真である。レンズ越しに撮られた景色。そこに、ごくごく稀にはあるが結界のもやが映し出されることがあるのだ。

現状、結界を見つける方法はそれしかないということもあり、オカルト界限では件の写真がそれなりの値段で取引されているとのことである。写真加工が容易になったご時世、悪意を持った人間がお金儲けの手段として贋作を売却しているとも聞かすが、それに関しては個人で対処していくしかない。

当の蓮子も裏ルートで結界に関する写真を数枚購入しているが、今の所は偽物を掴まされたことはない。オカルト関連では謎の運の良さを発揮する蓮子ではあるが、先ほども言ったとおりこの手の写真は一枚購入するだけでも大学生の懐に響いてくるため、事前に相談してから買ってほしいものだ。

やはり将来は私が彼女の手綱をしつかり握らなければいけない、などと思いつつも今は今夜の冒険のため、最終チェックをする必要がある。

スマホと携帯バッテリー、お金と万が一の時のために数点の防犯グッズを確認する。なんせ今回は深夜が活動時間となる。幸いなことに今まで防犯グッズを使う機会は無

かったが、用心に越したことは無い。

そして行き先の資料。数日前蓮子から渡された紙には、オブラートに包んだ表現をするなら年季が入った寺院が写真つきで掲載されていた。

「上品蓮台寺。宗派は真言宗系統。かの聖徳太子が母の菩提寺として建立したお寺。応仁の乱が起こったことで焼失したけれど、戦国時代末期に豊臣秀吉の計らいで再建されたみたいね。」

声を出して資料の内容を反芻する。場所は京都府内にあり、住んでいる場所からあまり離れていない。行こうと思えばいつでもいけた所だ。それにも関わらず私たちの活動場所になったことは今まで無かつたし、オカルト仲間との雑談で話題に上がったこともない。そもそも、この寺の存在自体、今まで知らなかつたくらいだ。

完全にまつさら、穴場どころのレベルではなく、まだ誰もこの場所に秘密があることを知らない。

そう考えるだけで、歓喜が胸の奥からこみ上げてくる。私たち二人が、秘封倶楽部が誰よりも先に、世界に隠された秘密を暴く。こんなに心躍ることがあるだろうか。

無意識に胸を押さえ、苦笑した。自分も蓮子のことを言えた口ではないが仕方がな

い。彼女ほどではないが、私も同類だ。まだ見ぬ神秘を考えるだけで、こんなにときめ  
いてしまうのだから。

「何にせよ、行けば分かるわ。結界の先にどんな秘密があるのか……ね」  
待ってなさい、という言葉を飲み込み、静かに資料をめぐった。

## A Secret Adventure (下)

待ちに待った冒険当日深夜。大学での講義終了後に私の家に集合し、仮眠と夕食（夜食）？

）を摂ってからいざ、真夜中の世界に足を踏み出した。

家を出るときはテンションMAXで飛び出したのだけれど、しばらくして興奮に体が慣れてきたのか、だんだんと夜の気温を肌で感じられるようになってきた。うん、寒い。誰よこんな薄着で大丈夫だと思った馬鹿は。頭がイカれているんじゃないかしら？

家にあるジャケットを取りに行くには少々離れすぎたため、今回はそのまま強行することに決めた。風邪を引いてしまったら……まあその時はその時だ。命に関わらないのであれば迷わず前進がモットーである。

体を温めるために腕を回したりしながら歩いている最中に先ほどのメリーの言葉が聞こえたわけだ。

後ろを歩く当のメリーはジャケットに薄いマフラーという万全の装備できている。なんだろう、ズルイ。ダメ元でマフラーを借りようかと迷ったけど、「寒いのならこうして歩きましょう」と言っただけだったりくっついてきそうなので、止めておいた。

最近、指数関数的な速度でスキんシップが激しくなってる気がするし、これ以上進むと本当に後戻り出来なくなる予感がある。それだけは何としてでも阻止しなければならぬ。主に私の将来のために。

「メリーって、オカルトに興味ある割には割りとは現実主義よね」

「あら、そうかしら？」

「そうよ。さつきみたいなこと言うし、計画をしつかり立ててから行動する方だし、今みたいに装備は完璧だし」

「蓮子、最後の現実主義全く関係ないからね。あなたが無計画すぎるだけよ」

失敬な、思い立ったが吉日を実行しているだけだ。・・・という言葉は、ひときわ強く吹いた寒風によって遮られた。

おかしい、いつもはこんなに寒くなかったはず、と思いスマホで現在の気象情報を検索した。低気圧接近により、昨日より5度近く気温が低くなっていた。ろくに確認しなかった奴誰だよ私だよ。

震える体の中で喝をいれ、坂道をひたすら歩く。ここを超えれば目的地はもうすぐである。この程度でへこたれるわけには行かない。今年の夏に京都市内で決行した地獄のオカルトスポット巡り10番勝負(日帰り)に比べればこの程度、屁でもない。

「蓮子、今日の探索予定は？」

「一つだけよ。草木も眠る丑三つ時……午前二時半にメリーの目で見て欲しいの。結界がどんな反応を示すのかをね」

後ろから聞こえてくるメリーの声に、振り返らず返答する。

目的の場所まではあと10分足らず。空一面に広がる星空が、現在の時刻がちょうど午前2時であることを知らせてくれた。

私とメリーはあらゆる点で対照的（？）である。日本人と外国人、黒髪と金髪、短髪と長髪。ずぼらとしつかり者。ノーマルとレズ。私は何かしらの基準を礎にした学問である物理学を専攻しているのに対し、彼女は人の心という基準が曖昧な学問、相対性精神学を専攻している。

あ、ちなみにとある一部分も対照的だとか思った奴ぶん殴るから覚悟しててね。

……まあ、こんな感じの私たちがオカルト好き以外にも一つ共通点がある。『目』に異能を宿していることだ。

私は夜空に浮かぶ月と星を見ることで、現在の場所と時間を把握することが出来る。

メリーは人でありながら結界の裂け目、綻びを見る事が出来るのだ。

何故見えるのか、理由は分からない。生まれつき備わっていたこの異能のおかげか、人と違うものが見えるということを理解するまで時間がかかった。異常なのが他人ではなく自分だと分かったときは、言葉ではうまく表せないショックを受けた。

私以外にも同じような異常者がいるかもしれない。そんな希望を胸に中学、高校を過ぎしたが見つからない。いつしか私の目はさして特別なものではないと考えるようになった。例を挙げるなら、絶対音感のようなものだろうか。人類全員が持っているわけではないが、

さして騒ぎ立てるようなものでもない。そんな考えだ。

だからこそ、大学でメリーと出会えたときの嬉しさは今でも覚えている。見えるものは違えど、やっと会えたこっち側の人物。メリーが私のことをどう思ったかは分からないが、勝手ながらあの時は本当に救われた気がした。

まあ、今考えれば見えるものまでも対照的な気がするが……。私は時間と場所を把握できる目、つまりは『今いる事象を絶対的に把握』できる。対する彼女は結界の裂け目が見える目、つまりは『今いる事象が曖昧なことを把握』できる。

結界の先は平行世界か違う宇宙かはたまた他の何かか。場所も違えば当然時間軸も違う。その入り口が見える目だなんてまさに私とは真逆の目だ。

ちなみに現在の秘封倶楽部活動は結界暴きに比較的重点を置いていたためメリーの能力は必須になる。今回のように情報収集で結界の綻びを見つけた場合は彼女と共にその場所に赴かなければ、私は結界を把握できない。

どうせ異能を宿すならメリーのものが欲しかったなあ、と思つてしまう。オカルトマニアであれば垂涎の、それこそ買えるのであれば大金を積んででも買いたいであろうその能力。ただ、メリー自身は「どうせなら蓮子の異能が欲しかった」つて言っているのだから何とも難しい。

彼女も人に見えないものが見えるせいで今まで結構な苦勞をしてきただろうし、そんな言葉が漏れたのかなと考えている。

ちなみに、メリーは自分の目のことはほとんど誰にも言っていない。悪意を持ったオカルトマニアはもちろん、下手をすれば政府にも目をつけられかねない能力であることを踏まえれば妥当な判断といえよう。

そんな中で何故私には教えてくれたのか？と以前聞いたことがあるが、

「今後のために、お互いの秘密は包み隠さず話しておいたほうがいいでしょ？」

との言葉が返ってきた。よくよく考えればメリーにとつても私は初めて会えた異能仲間だろうし、初めて秘密を共有できる人物だったのかもしれない。その気持ちだが、先ほどの言葉となつて出たのだろう。



今後……これからの活動においてもメリーの能力は無くてもならないものになる。もちろん、能力抜きにしてもメリーによつて私は救われた。高校時代までのような、一人きりでの秘封倶楽部活動。結界暴きに限らず様々なことをしたが、その過程で得られた驚き、喜びを共有できる仲間がない。気楽であることを差し引いて余りある孤独感。もうあの頃に戻るのはこりごりだ。

依存、なのかもしれない。少なくとも今は、メリーのいない生活は考えられない。大卒卒業すれば離れ離れになるだろう。恐らく、二人の秘封倶楽部活動はそこで終わる。それでも、今だけは、あなたと共に駆け抜けたい。メリーと一緒に世界の秘密を暴きたい。心のそこから、そう願う。

「……見えたわ、メリー」

前方に視線を固定したまま、静かに呟く。さあ、活動を、冒険を始めよう。

一歩一歩進むごとに違和感を感じる。

空気が重い。真夜中、お寺に訪れることに対する恐れ、ではない。肌が刺されるような、得体の知れない感覚である。石畳による舗装を受けた境内を二人で静かに進む。隠れた桜の名所らしいこの寺だが、11月現在はその趣を見せない。

いいよりの無い不安が体を包み込む。もしかしたら、これから取り返しをつかないことが起こるのではないかという恐怖を感じた。

「メリー」

「ええ．．．．当たりよ、蓮子。結界の裂け目が見えているわ。今まで見てきた中で最大の裂け目が」

ごくりと唾を飲み込む。

境界の乱れは事象の乱れ。近くにいるだけでその余波を受ける恐れがある。裂け目が大きければなおさらだ。その乱れの原因が、目の前にある。

メリーと手を繋ぎ、空を見て息を呑んだ。記憶を呼び起こすまでも無い、彼女の言うとおり、過去に発見したどの裂け目よりも巨大な綻びがそこにあった。全色の絵の具をぐちゃぐちゃに混ぜたかのような、不気味な色をしたそれを見ると無意識のうちに後ず

さりそうになる。

事象がずれているのだ、万が一裂け目の影響が急激に広まりでもしたら二人とも無事でいられるかどうか分からない。

道中に感じた楽観的な気持ちは鳴りを潜めた。私たちが行っている結界暴きがいかに危険と隣りあわせであるか・・・それを再認識した。

「蓮子、今何時？」

不意に、メリーに呼ばれた。後ずさりそうになる気持ちを抱えながら彼女を見ると、冷や汗が流れているのが見えた。良く見ると、暗いながらも顔がいつもより青白くなっているのが分かる。

それでも、彼女の目は結界を捉えていた。

「ここまで来て、帰るわけには行かないわ。それに、」

「こんなに興奮するのは初めて、だからね」

心に秘めた彼女の言葉を引き継いだ。どうやら凶星だったらしく、目を見開き、こちらを見てくる。

「蓮子、私が言うのもあれだけど、怖くないの？」

「怖いわ。・・・丑三つ時まで後一分。結界がどんな動きを見せるのか、私たち

はどんな影響を受けるのか。今この瞬間走つて境内から外に出れば何事も無く朝を迎えられるでしょうね」

——それでも、これから起こる『何か』を体験したい。

「絶対に何かが起こる。それを見過ごさせるほど私は、私たちは普通じゃないから、ね。危険を冒してでも、それを追い求めたい。この気持ちに、嘘はつけないわ」

恐怖がある。不安もある。それ以上に感じる、期待、興奮がある。秘封倶楽部の一員として、オカルトを追い求める一人として、どうしても抑えられない気持ちがある。その気持ちが、私の足をその場に繋ぎとめた。

私の言葉を聞いたメリーは静かに笑い、共に前を見た。やつぱり彼女も同類だ。

さあ、鬼が出るか、蛇が出るか。星空を見た。残り10秒。

「.....5、4、3、2、1.....！」

カウントダウンが0になった瞬間、

桜が舞った。

思わず空を見上げた。時刻も場所も分からない。頭上で輝く太陽が穏やかな暖かさを私たちに届けていた。

桜が舞った。

境内一面、視界いっぱい咲き誇る桜の木が、私の、私たちの目を奪った。その桜は、今まで見て来たどんな桜よりも美しく感じた。

桜が舞い散った。

幻想的な光景。ここはどこか、そんな当たり前の疑問さえ忘れかけるほど見惚れる光景。もっと目に焼き付けようと、初めて後ろを振り返った。

大きな桜の下に女性が横たわっていた。

桃色の髪をした彼女の胸には、短刀が刺さっていた。

彼女は、血に染まりながら、微笑んだまま、事切れていた。

瞬きした瞬間、私の意識は真夜中の境内に戻されていた。  
星空は、現在の時刻が午前2時35分であることを知らせてくれた。

## 遠野物語

ゆっくりと意識が覚醒した。

ぼんやりとした視界に映る、見慣れない天井。一瞬、まだ夢の中にいるのかと錯覚したが、身に刺さる無視できない程度の寒さによりぼーっとしていた頭が徐々に働いてくる。

上半身を起こして、大きく背伸びをする。大学に入ってからにはベッド生活になり一度も使っていないかった布団。自分の部屋とは似ても似つかぬ落ち着いた雰囲気の和室。窓から差し込む太陽の光が部屋を照らす、残念ながらこんな時間では暖かさまで届けてはくれないようだ、と掛け時計を見ながら感じた。

仄かに感じる畳の匂いを思い切り吸い込む。フローリングの床とはまったく違う、どこかなく安心できる不思議な香り。板と比べると製造にかかる手間が比較にならないほどかかると聞いているが、それでもこのご時勢で一定の需要がある理由が分かった気がした。

布団から体を出して立ち上がると同時に、先ほど感じた以上の寒さが体を包み込む。

一瞬、蓮子に抱きついて暖をとろうとも考えたが、今抱きしめたら最低でも昼過ぎまでは離れられなくなると思い大人しくストーブの前に陣取ることにした。

両手を翳すと、じんわりと手の平に暖かさが伝わってくる。エアコンとはまったく違う、直接的な暖かさに思わずほう・・・と息が漏れた。このままストーブを体で抱え込みたいと思ったが、それをしたら本日目的地がもれなく病院に変更されるため、大人しく近づきすぎない位置でその恩恵を受け取ることにした。

これで炬燵があれば完璧なんだけどなあと思ひ、苦笑して首を振る。今の状態でも十分暖かいのに、これ以上を求める自分はかなり欲深い人間だろう。より楽に、より快適に。人類が進化を止めない限り続くであろう終わりの無い欲望。終着点となるのは、人類が歩みを、進化を止めたときだろうか？それとも・・・

逸れていた思考を強引に引き戻す。テーブルの上に広げていた資料やスマホを手に取りながら今晚の、正確には明日の深夜に行うメインイベントに思いを馳せた。

「ゲンデラ野での結界暴き・・・やるとするならやっぱり深夜2時30分ね。蓮台寺の時可能な限り条件を合わせたほうがいいわ。」

それまでは蓮子とのデートに充てて、と一人で妄想を膨らませる。

1週間前にこの身に起きた、夢のように朧げな現の出来事。それは文字通り夢い夢



だったのか、翌日、その次の日にも夜中に訪れたが、再び体験することは出来なかった。ひどく浮世離れた場所。

この世のものとは思えない舞い散る桜。

そしてその桜のように、いや、桜以上に儂げに舞い散ってしまった女性。

全てはわずかな時間の邂逅。数瞬のみでしか瞳の奥に焼き付けられなかった光景だが、時間が経った今でも鮮明に思い出すことが出来る。

あの女性は桜の下に横たわっていた。私たちとそんなに変わらない年齢だろうか？ そんな彼女が、静かに事切れていた。胸に刺さっていた短刀から溢れ出た血は、その純白の衣装を紅く彩っていた。

こんな感想を抱くのは間違っているし、不謹慎とかそういうレベルではないが、それでも思ってしまった。

その最期はどうしようもないくらいに美しかった。優雅に咲き散った桜のように。

もう一度会いたい。死人に会いたいと感じるのもおかしい話だが、純粹にそう思った。活動開始以来、初めての太当たりといえる結界暴き成功の場所をもっと詳細に調べたい、という全うな理由と同列に語りたいほどに。

そして先ほども言ったとおり、もう一度夢のような出来事に浸ることは叶わなかった。二日間の緊急追加調査で得たものは、寒さによる軽い微熱（私限定）と、寝不足か

ら来る授業中の爆睡により教授から頂いた愛の拳骨（蓮子限定）くらいだった。授業後蓮子は「あの鬼じい教授絶対許さん」とか言っていたが、どこをどう考えても蓮子を擁護できる要素が無かったため適当に相槌をうっておいた。

このまま続けても埒が明かないと考え始めた数日前、上品蓮台寺と関わりがありそうな土地を突き止めた。そこが今私たちがいる場所、岩手県遠野市だ。

手がかりと言っても「両土地とも『デンデラ野』という言葉と深い関わりがある」というこじつけにちかい物ではあるが、藁にもすがる思いで急遽遠征を取り決めたのだ。

決して安くは無ない旅行費や貴重な連休を潰してでも行くべきかどうか。私たち二人の答えは、即決でのYESだった。

私だけじゃない、蓮子もあの光景を見て、それで終わらせるはずが無い。一夜の幻想と片付けて日常生活に戻るなど秘封倶楽部ではない。

「あの日の夢を、もう一度現の出来事にしてみせるわ」

知らないうちに口端が上がっているのを意識しながら、資料をテーブルに戻した。

「・・・ま、それはそれとして夜まではデートと洒落込みましょう、蓮子♪」

## 「遠野物語発祥の地ねえ」

ぐるつと辺りを見回しながら呟く。のどかな田園風景の先に広がる森林地帯や遙か遠くに見える山々。電車での移動中はもちろん、到着後は既に夕方だったこともありじっくり見れなかった景色を視野一杯に納める。

微かに聞こえてくる川のせせらぎや、複数の種類が混じった鳥の鳴き声。ゆつたりと流れる時間は、無駄の無い都会での生活と対極にあることを伺わせる。懐古主義でも第一次産業就職希望者でもないが、このような場所で静かに暮らしてみるのもいいかもしれない。

私の場合はこちらからの解放によるメリツトよりも、都会の利便性を失うデメリットの方が大きすぎるように感じるため今の所は却下だが。

「ということは、ここから数多くの逸話が生まれたのね」

「そうよメリー。元々遠野地方に古くから伝わる、百を超える伝承をかの偉大なる柳田先生が纏め上げた物語。佐々木先生との共同作業の末生まれた、日本に誇る民謡学作品と言っても過言ではないわ」

へえ、と私と同じように辺りを見るメリー。輝いているその目からは、純粹に今の時を楽しんでいることが伺える。

遠野物語が世に出たことで有名になった伝承は数知れず。座敷童、河童、神隠し、ハヤリ神などは、この本がでなければマイナーのままだったかもしれないと考えれば、その影響力の大きさを知ることが出来るだろう。

そんな中、一番有名になったといえる伝承がある。

『迷い家（マヨヒガ）』

山奥に存在すると噂される、大きな屋敷。訪れたものに富貴を授ける摩訶不思議というべき家であり、オカルト仲間の話題にも上がりやすい、メジャーな怪奇だ。当然のことながら、そのような屋敷はあるはずもない。よって、結界の綻びによりごく稀に具現化するのではないかと考えたオカルトマニアが遠野の地を訪れると聞いているが、その成果が上がった話は未だ耳に入っていない。

いつかは訪れたいと思っていたが、こんな形でその機会が巡ってくるのは予想外であった。

もちろんメインはデンテラ野だが、今日か明日の空いた時間にでも、迷い家について調べてみるのもいいかもしれない。

「蓮子、デートは遠野の町探索でいいかしら？」

「デートじゃないからねメリー。．．．でも、遠野探索は賛成！」

おそよデートには向いていない場所だといいいそうになったが、私たち二人の場合、仕方ないかもしれない。

昨日メリーに迷惑をかけた件もあるし、今日く一日はメリーの提案を聞いてみるのもいいかもしれない。

執拗に腕を絡めてこようとするメリーをなんとか避けながら、そんなことを考えた。

## 猫と賢者

人間が昼行性の生き物だとすれば、妖怪は総じて夜行性の特色を持っている。

今より遙か昔、地球を照らす光が太陽と月のみだった時代。夜という時間帯は人々に得体のしれない恐怖、不安を抱かせた。

目に見えない場所から聞こえてくる正体不明の音や鳴き声。時には一夜にして忽然と姿を消した者もいれば、昨日までピンピンしていた店の主人が翌朝、往來の通りにて血まみれで事切れていた事件もあった。

事實は、メタ視点から読み解くなら簡単に分かる。

それは、斜向かいの屋敷が玄関前に立て掛けていた板が倒れただけのことである。

それは、隠れて借金をしていた者がとうとう回らなくなりこつそりと夜逃げしただけである。

それは、商売の成り行きで店の主人を逆恨みした人物が、夜中一人になった主人を手にかけてことが真相である。

上記の事柄が白日の下で起きたならば、すぐに解決したであろう事例はいずれも真相

ごと闇の中に葬られるという終わりを見せた。

誰がやったのか、どうして起こったのか分からない出来事。人々が導き出した解答は、人ならざるもの……神や妖の仕業だと推測した。

仮に、人々の感情が妖怪を生み出したとするならば、暗闇の中で暗躍する妖怪が夜行性

であることは別段おかしいことではないだろう。

ただしそれは下級妖怪、つまりは非人間形態の妖怪のみという注釈が付くが。

それは、巨大な屋敷だった。成人男性の背丈を遙かに超える立派な門構えが、敷地の内と外を明確に遮断している。門を潜った者の目に飛び込んでくるのは、砂利が敷き詰められた正面の庭に見上げるほど大きな大木である。それらの木は、時期が来れば色とりどりに華やかさを見せしめ、訪れた人々を虜にするであろう。

それらの奥に見えるのは、一軒の和風な屋敷である。その規模を説明する際に一軒という言葉はいささか不適切かもしれないが、その大きな屋敷は荘厳さと共に見たものの心を落ち着ける不思議な雰囲気があった。

建物の側面に回ると、そこには趣を感じさせる廻遊式庭園が広がっている。小さな池

や天然石、植栽が屋敷外周通路の脇に広がる庭を鮮やかに飾っている。地や石に生えている苔は緑の美しさと静かな生命力を提供し、若干不規則な間隔で埋められている飛び石が格式張った風景に一石を投じるアクセントとなっている。

裏庭には日本庭園の定番、ししおどしが置かれている。漢字では『鹿威し』と書かれるこの道具、本来は農業などに被害を与える鳥獣を威嚇し、追い払うために制作されたものである。竹筒に水が入り、一定間隔で水の重みから筒が傾いて石を叩くのだが、この音が風流を感じさせると気に入られ、広まった歴史がある。

そのような過去を持つししおどしが、この屋敷に定期的にて音色を響かせている。そしてその音を聴きながら、追い払われるどころか満喫している妖獣が存在した。

「~~~~~♪」

その人、いや、人型の妖は小さな背丈をいっぱい伸ばして畳の上に寝転がっていた。もし人間としてみるなら、その容姿から10代前半と判断する者が多いだろう。そんな彼女の頭には、茶色のショートヘアを押し分けるように立派な猫耳が生えている。

赤と白の二色を基調とした長袖のワンピースを纏い、服の隙間からは耳と同じ黒色の二股に分かれた尻尾が生えていた。

少女を照らす太陽は、秋ということもあり日向ぼっこに適する程度の熱量を地上に授けている。その恩恵を全身で継受するかのようには、妖獣は仰向けのまま目を閉じてい



る。その可愛らしい顔からは警戒心というものが抜けきっているのが一目で分かる。

そんな彼女の周りには両手で数えきれないほどの猫が同じように寝転がっており、思っている体勢で温光をその身で受けている。時々聞こえるししおどしの音に気にする様子を微塵も見せない。遙か昔、ししおどしを発明した人物も草葉の陰で号泣しているかもしれない。

彼女……橙という名を持つ妖怪は、この地域で生まれて育ったわけではない。化け猫だった時代にとある人物と出会って力を授かり、以来は屋敷を拠点にして生活を始めた。元々一体の地域で一番強い妖力を持っており化け猫、普通の猫達のリーダーだったためか彼女に付いて移住するものが多く、屋敷一帯が猫屋敷となった。そのためか毎日のようにひっかき傷が生成され、貼られている障子に見事な穴が空くのだが、誰かが手を加えた訳ではないのに翌日には綺麗さっぱり直っている。

摩訶不思議な現象、しかし少女は特に気にしたことがない。『この程度のこと、幻想郷ではよくあること』なので、気にする必要すらないからだ。自分の不利益になるようなことなら対処も考えるが、役に立つオカルトであれば進んで解決する必要もない。

移住前はボロ小屋+痩せた土地での生活をしてきたのだ。天と地、月とスッポンほどの差がある現在の建物を満喫する気こそあれ、立ち去るといふ感情が出てくるはずもなく、現在進行形で猫の楽園を築いていた。

特に用事のない日はこのように一日中だらけており、本日の彼女もその予定でいたのだが、生憎その計画は崩された。

頭から生えていた猫耳がびくびくと動いた。閉じられていた目を開けて上体を起こし、前方……正門の方向を見つめた。門が開く音がしたので。

「……………」

はて、と少女は首を傾げた。特殊な結界が張られているこの建物に入ってこれるものは自分を含めて数名しかいない。頻繁に繰る人物、もと九尾の妖獣が一人いるが、前回の訪問時に「しばらくは来ることができない」と涙ながらに嘆いていたので彼女ではないはずだ。

他の猫を起こさないように起き上がり、正面の門に向かうため障子を開け……………驚愕した。

目の前に、見知った人物が立っていたからだ。

「久しぶりね、橙。いい子にしてたかしら？」

「え？……………うええええ!? どうして突然、あ、いやお久しぶりですっ!」

お茶を用意しないと、と慌てる橙を微笑みながら制して優雅に腰を下ろした。

「いいわよそんなに畏まらなくて。私と橙の仲じゃない♪」

白い扇子で口を隠しながら笑みを見せる。口調は明るく穏やかだが、その眼には強者特有の、無形の力が垣間見えた。彼女に威圧する気はないとは分かっているが、時折無意識のうちに漏れるそのオーラを橙は苦手としていた。

自分より一回り以上大きな背丈。金色に輝く長髪をもつ女性は笑みを崩さない。立場上今までそれなりに多くの時間を共に過ごしているが、そのほとんどの記憶においてその女性は笑みを浮かべていた。

相手を安心させる笑み、ではない。怒りに通じる笑み、でもない。こちらを見透かされているような、何も分からせてくれない笑み。身内と違っていい関係ながら、橙が彼女に心を預けきれない原因は、妖怪としての格の違い以外にも存在していた。

「それで……紫様。『マヨヒガ』に何かご用事でしようか？」

「あらあら、いいじゃない。用事がなくても来たって♪……まあ今回はちよつとしたことがあるから来たのだけどね」

橙の問いに彼女、紫と呼ばれた人物はすつと目を細めた。

「とある二人に伝えたいことがあるのよ」

## そして二人は迷い込む

空を見上げる。月と星が、果てしない黒色を彩るように輝いているのが見えた。雲の存在が皆無な真夜中の空は、私の能力を申し分なく発揮できる時間帯である。

だからこそ、自分の目が信じられない。今まで絶対の信頼を置いてきた、私の特異性。月と星が今の時間と場所を知らせてくれるその力を始めて少し疑った。自分で自分を信じられなくなるなどお終いなのだが、それでも今回に関しては全肯定出来ないことを許してほしい。

遠征2日目日中は近場にある遠野物語の伝承地巡り＋軽い観光に費やした。科学世紀だからこそ密かなオカルトブームは続いているためか、そこそこの知られたオカルトスポットならば、その手の観光客をターゲットにした店などがある。

その視点から見れば遠野物語は「軍レギュラー安泰と言つていい。町の規模を鑑みると有名な伝承地ごとに休憩所を謳つた売店があるのは異常であるが、何とか採算が取れていると笑いながら売店の青年は言つていた。

昨日は見る事のなかつた田舎町人間の遅しき（抜け目のなさ？）に懐かしさを覚えつつ、物語の一端に触れながら穏やかに過ごした。この手の売店には必ずあるソフトクリームや観光地特有のグッズも少しだけ購入した。前者はともかく後者は帰つてから「何で買ったんだろう」と後悔することになりそうだが、それもまた旅の思い出だ。

夕方前には宿に帰り、入浴と少し早めの夕食を済ませた。昨日宿に着いた時間帯には夢の中におり、日付が変わる頃にセツトしておいたアラームで起床し、こつそりと2人で旅館を抜け出した。料金は前払い制だったし、部屋には「朝までには戻ります」というメモを書き残しているため変なトラブルにはならないだろう。・・・ならないよね？

前回の冒険と同じように、真夜中の誰もいない時間帯を2人で駆け抜ける。この旅の本命となる、デンドラ野。抑えきれない気持ち私たちの足を速くし、歩幅を大きくする。出発当初はゆっくりだった歩みが段々と早歩きに、目的地に近づく頃には駆け足になつていた。

「はあ・・・はあ・・・蓮子、急ぎすぎよ」

デンドラ野に着いた時には後ろの相方が息を切らしながら膝を笑わせていた。メ

リーより唯一上回っていると断言できる体力の多さにモノを言わせた強行軍は、彼女には少しきつかったみたいだ。

息が整った後、謝罪の意味を込めて持つてきた水筒を渡した。飲みかけで申し訳ないけど、と断った瞬間メリーはすぐに水筒を奪うように抱え、すぐに飲み干した。そこまで喉が渇くまで無理させてしまったのは反省点である。

一呼吸置いて、辺りを見渡した。持参してきた懐中電灯が無ければ、月の光だけしか頼るものが無い平野。電灯一つすらない暗闇の中から得体の知れない何かが出てくるのではないかと考えると、不意に興奮してしまう。

「さて、メリーさんや。今回、万が一『あの場所』につながった場合、どう行動するかは覚えているわね」

「ええ。まずは倒れていた女の人が居るかどうか。次に周りに何かがあるのか。大まかにはこの2つね」

メリーは淀むことなく私の質問に答えた。遠征の計画を立てたときから毎日のように確認し合った事項なので、当然といえば当然だが。

率直に言えば、前回と同じような体験を出来る可能性は低いと思っている。そもそも何故異界に意識が繋がったのかすら未だに分からないのだ（結界の綻びが原因ということだけはハッキリしているが）。もし容易に異界へいけるのなら、あの日の翌日、翌々日

も行けていたはずだ。

さらには場所も時間も前回と違う。もし、同じように結界の綻びが生まれたとしても、同じ場所に繋がっている保障はどこにもない。

分の悪い賭けではあるが今更だ。オカルトを追い求める以上、確実なものなんてないし、あつてはいけない。確実なものなんて科学だけで十分だ。

それでも、計画を立てておくことは必須である。奇跡的に同じ場所に繋がったのに右往左往するばかりで何も得られませんでしたとなるなんて笑えない。

まずすることは、あの女性がいるかどうかの確認である。大きな桜の下で横たわっていた女性。医学を齧っていない私が悟ってしまうほどに、彼女からは生の気配が感じられなかった。

いや、違う。そもそもあの場所に生というものが存在しなかった。

今だから分かる。雲一つ無いあの空には鳥が羽ばたいてなかった。暖かい陽気を運ぶはずの風は、ただただ冷たかった。咲いて散る桜は、どこまでも儚かった。

今だから分かる。その全ての原因はあの女性だ。根拠も何も無い直感だが、あの女性がああ場で一番生を拒絶していた。あの人『死』を発していた。一目見た彼女はどこまでも美しく、そしてそれ以上に……

……いや、今これ以上彼女の考察はよそう。あれから1週間程度経っている

現状、同じ状況であるはずが無い。彼女の存在を確認したら、次は周辺の状況確認だ。前回、幻想に招かれた時間はどれくらいだったろうか？はつきりとは覚えては居ないが、

10分20分ということはない。下手をすれば1分足らずだったかもしれない。

そんなわずかな時間の間、私はただ呆然としていて場所や時間帯の特定すら忘れていた。確かに境界の向こう側は昼だったが、昼でもうっすら月が見えることがあるのにある。メリーは笑って許してくれたが（許すも何も怒ってもいけないようだったが）、同じ失敗は繰り返さない。

メリーがいなければ、私は境界を視ることすら出来ない。彼女と志を共にする者としてせめて、最低限の仕事はしたい。

それに「蓮子!!」

思考を遮る様に、メリーが叫んだ。同時に、右手を力強く握られる。

メリーを見た。メリーはどこまでも暗い空を見ていた。

違う。視ていた。手を繋いだことで私にも視えた。

真夜中の空に浮かぶ、不気味な色。前回と同じような、得体の知れない形状。間違いない。『入り口』だ。

知らず知らずの内に、右手に力を込めた。2週連続での大当たりである。確率で考え



れば、奇跡と言つていい、出来すぎといえる結果だ。

「メリー、来たときからあんな感じだった？」

「・・・いいえ、まさに今、この瞬間結界が綻ぶのが見えたわ。結界の穴を見つけるのはともかく、開く瞬間を見たのは今回が初めてよ。そもそも綻びがうまれてからこんな短時間でここまで裂けるなんて有り得ないわ」

「・・・へえ」

じつと空を見上げた。メリーの経験から来た言葉を読み取るなら、一つの仮説に辿り着く。

招かれている。

時間を確認する。日本時刻で午前2時29分36秒。この場所についてからそれなりに考え込んでいたみたいだ。

いいだろう。これでも人付き合いはいい方だ。神秘的な招待を受けたのならば断る道理が無い。

「メリー、いくわよ！」

「ええ、蓮子！」

改めて手を強く握りなおし、二人で空を、結界の裂け目を見つめた。

裂け目は今なおどんどんと広がっていく。どんどん、どんどん広がっていき、

私たちを飲み込んだ。

真っ白な視界。光あふれる情景が徐々に収まり、形となっていく。

それが形となって、私たちの目に映りこんでくる。その形を全て認識する前に、素早く空を見上げた。

「・・・へえ」

同じ言葉が口から漏れた。私の能力は、問題なく発動した。前回は昼に飛ばされたが、今見上げている上空にはどこまでも星空が広がっていた。

三日月と星々を見つめて、極めて正確な場所と時間を知ることができる。

時間は午前0時17分12秒。場所は長野県北安曇郡白馬村。

年号は見事に今の時代。つまり現代だ。私たちの居る場所は、間違いなく科学世紀の日本国内だ。

だったら、これは一体なんだ。

目線を戻す。空を見上げる前に、微かに見えた景色は完全な形となつて私の目に入ってきた。山奥にある平地だろうか。周りの森林が風に乗つて妖しく揺れ動く。

その木々が全く無い空間があつた。山の中に隠れるように、1件の大きな屋敷が建つていたのだ。屋敷を覆う門構えは開いており、奥に見える和風の屋敷は敷地外のここからみても実感できるほどに大きい。

科学世紀の今、このような屋敷があるかと聞かれれば無いとはいえないと答えられる。私も日本を全部余すことなく見回つたわけではないので自信は無いが、このような大きな屋敷の一つや二つ、まだ残っているだろう。

私の疑念はそこではない。

目を凝らして、屋敷を見る。空いている左手を無意識に胸に持つていく。

重い。苦しい。屋敷を見ているだけで、気味の悪い感情が心から、体の奥から競りあがつてくる。今居る場所から拒絶されているような感覚が消えない。

こんな気持ちになる場所が、果たして本当に日本なのか？ 私たちの住む土地がこのようなものだとは思いたくなかった。

「前に来た場所とは違うみたい・・・神秘さや儚さの欠片も無いわ」

「そうね。ここが日本だなんて信じたくないわ」

「え、本当に？」

少しだけメリーは目を見開いた。彼女も、ここが日本だとは思っていないかったようだ。特殊な目で確認した私でも未だに信じ切れていないのだから無理もない。

再び、屋敷に目を向ける。飛ばされた先にこのような建物があるなど、どう考えても誘われているとしか思えない。急に裂けた結界といい、どう考えても出来すぎの結果だ。誰かが結界を破り、私たち二人を呼び込んだのか。それともただの偶然か。

前者であれば、この屋敷に住む人物が私たちを呼び込んだ、という推理が出来そうだ。結界を破くだけの力がある人なんて聞いたこと無いが、『可能性は0ではない』。どんなふざけたことだろうと、証明されない限りは真理、真相に繋がるかもしれないのだ。私たち人間が想像出来ることは、全て現実で起こり得ることだ。

結界に影響を与えるほどの人物が本当に屋敷に居たとすれば、下手すれば自分たちの身も危ないがそれこそ今更だ。ここまで来て引き下がるわけが無い。それに、こちらに入る時間は有限だ。

鬼が出るか、蛇が出るか。私は気持ち悪さを飲み込んで一步一步確かめるように、屋敷に近づいていった。

## 彼女の本质

マヨイガにある一室で彼女・・・紫様は寛いでいた。

普段は結界の管理はもちろん、人里や妖怪の山などで異変が無いかの監視など多忙な日々を送っている。一日に10時間以上睡眠時間を取ってはいるが、それ以外で休息する姿を見たことはあまり無いため、今のようにゆったりとしている光景は久しぶりに見た。

寛いであるといっても座布団の上に座る姿一つをとっても様になっている。正座している背筋は真つ直ぐに伸びており、お茶を飲む行為にも気品さがある。未だに猫背が直らない自分とはえらい違いだ。

ただ、表情は穏やかだが先ほどからちらちらと障子を気にしている。障子には穴が空いているなどの不良は見受けられないため、恐らくはその向こう側、はつきり言えばだんだんと近づいてくる足音にである。

紫様が来てからすぐに感じた、二つの気配。開いた門からマヨイガの敷地内に侵入した者達は、ゆっくりとした速度で歩いているようでやつと建物に上がるみたいだ。

自分には人間はもちろん、一般的な妖怪よりも遥かに発達していると自負する聴力が

ある。その耳は、離れている二人の声も断片的ながら聞こえるほどだ。

耳をすまして聞いた二人の会話からは、この場所を侵略にきた、という敵意は感じない。

聞こえてくるその足取りは覚束ないようにも感じるため、純粹に迷い込んできたのだろう。そもそも紫様が普段来ないこの場所に来た目的が、件の人達である可能性が極めて高い。二人組みに話があると言っていたし、そもそも許可が無ければ結界内に入つてこれない。

「橙、お代わりをお願い出来るかしら？」

「はいっ、ただ今！」

急いで『ぼつと』という機械から急須にお湯を居れ、気持ち軽く廻すように動かしてから茶碗に注ぐ。紫様にお出しするものなので本当は一回ごとに茶葉を取り替えたところだが、「そんなことしたらもったいないじゃない」と言われてしまつてはそうはいかない。

未だにお茶請けにも手をつけていない所から、二人組（恐らくは外界の人間）が来るまで待っているつもりなのだろう。

しかし・・・この方は外の世界の人と何を話しに来たのだろう、と感じた。自分とはかく、彼女であれば境界を越えて直接乗り込むことなど造作も無いはずだ。境界を

張ったのは紫様だし。

そもそも、人間相手に何を話すつもりなのか？紫様は基本的に過度な干渉はしない。異変が起こったときは表舞台に立つことはあるのだが、それ以外の平時はどこかにある屋敷でひっそりと幻想郷の監視をしている。それ以外では博麗神社、香霖堂、白玉楼に行くくらいか。行動全般を見てはいないので確信は持てないが、よほどのことが無い限りは、先に挙げた場所以外に赴いた所を見たことがない。

もちろん、半ば私の住居となったマヨヒガも例外ではない。前に来たのはいつだったか？少なくともここ10〜20年の話ではないはずだ。

用事がある場合は私が紫様の住居に呼ばれることが多く、この屋敷は気楽な場所となっている。そのためか来客用の道具はあまり揃っておらず、つい先ほど準備が終わるという体たらくだった。叱られるかも、と思ったが上司の上司はただ微笑むだけで特に何も言っていない。

・・・やっぱり怖いなあ、と思う。あの日、拾っていただいた恩はこの先も決して忘れない。紫様のために死ぬるか？と聞かれれば、即座に首を縦に振るだろう。

それでも、心の奥底では恐れている。目の前の存在を。決して本心を見せてくれない妖怪のことを。

「橙」

びくつ、と背中が震えた。慌てて目を向けるが、主は先ほどと変わらぬ雰囲気を纏わせたまま、座っているだけだった。

考えを見透かされたのか？目を合わせるが、いつも通りそこからは何も読み取れない。紫様が何を考えているのか、どんな感情を抱いているのか、少しも分からない。化け猫として生を受け、気配や相手の感情には人一倍、いや妖怪一倍敏感に察することが出来る自分ですら本質に触れることが出来ない。

一体この方は何を『視て』いるのだろうか？

自分よりも遥かに長い時間、紫様に仕えている上司に聞いたことがある。私はダメでも、彼女なら少しは分かるのではないか。期待と僅かばかりの好奇心を込めて、以前マヨヒガに訪れて来た時に問いかけてみた。

ほとんど分からない。

それが彼女、八雲藍様が発した言葉だった。羊羹を口にしながら苦笑いを浮かべる姿を見て、思わずマジマジと見返してしまった。誰よりも付き合いが長い藍様でも分からないのか。驚いている私が可笑しかったのか、藍様はひとしきり笑ってから言葉を続けた。



「橙。確かに私は紫様に仕えた時間は長いが、一番ではない。」

「え、藍様よりも昔から使役されている人がいたんですか!？」

「いや、そういう意味ではない。私よりも長い時間、紫様と知り合っていた者がいるんだ・・・あ、言っておくが幽々子様もその一人だぞ」

事も無げに話しながらお茶を啜る藍様だったが、最後の発言にまた驚愕した。そういう意味ではない、との言葉を聞いた時点で白玉楼の主が頭に浮かび、実際に彼女も幽々子様について触れた。

だが、一人だけだと思っていた私にとつて、何人も藍様以上に長い付き合いを持つ知人がいたという情報は初耳だ。まあ、考えてみれば妖怪の賢者と呼ばれるほどの実績、経歴を持つているのだから数千年以上前からの知人がいてもなんらおかしくはない。それにしても見かけたことが無いが・・・。

「おっと、話がそれたな。ともかく、私でも紫様のことはほとんど分からないんだ。分かっているのは、あの人は幻想郷を心から愛していること。そして私が命を懸けて仕えるに足る主ということだけだ」

ふふ、と笑う藍様の表情には一切の影が無かった。ああ、この方は心から主に信頼を寄せているんだなど、自然に感じてしまう。

羨ましいな、と思う。分からないからこそ信じきれない自分と、分からないことを承

知の上で信じきれぬ藍様。それでいて盲目的な信仰ではないことが、その真つ直ぐな目から読み取れた。

目を合わせられず、俯く様に視線を下に向けるとスカートの裾を握る手が震えているのが見えた。自分でも気づかない内に手に力を込めすぎていた。ぱっと手を離すと、握っていた部分が皺になっていた。

そんな私の状態を察したのか、藍様は気にすることは無いというように頭を撫でてくれた。優しいその感触に目を細めながら、強張っていた体から力が抜けていくのを感じる。

「そう思い悩むな、橙。私も信じきれない時期があつた。時間をかけてあの方と行動を共に生活し、共に戦い、ようやく少しだけ理解できたんだ。橙はまだまだ触れ合った時間が少ないだけさ」

「そう・・・ですかね・・・?」

「ああ。この私が、自信を持って断言しよう。なあに、我々妖怪に時間は有り余っているのだから、少しずつ歩んでいけばいい」

焦る必要など無いさ、と言ってくれた藍様。あの日以来初めてとなる紫様との対話はあまり上手くは進んでいなかった。

善は急げとこちらから紫様の屋敷に伺えれば一番良かったのだが、スキマ經由でしか行けない場所に対して私の足と勘を頼りに向かおうなど自殺行為に等しい。

その為、今回の訪問は紫様を知ることが出来る絶好の機会だったわけだが、どうも迂闊に聞けない状況である。

紫様の目的は私との会話ではなく、間もなくこの部屋に来るであろう訪問者2人との対話だ。今から自身の希望を優先させて時間を頂くことなど従者失格である。決して紫様が怖くて話し出せなかったとかではない。決して紫様が怖くて話し出せなかったとかではない。

襖を開ける音を挟みながら、どんとどんと足音が近づいてくる。『その時』までもう少し……そんなタイミングだからか、反応が遅れた。

「橙、最近不自由は無いかしら？」

「………へ？あつ、はい！」

外の気配に気を取られすぎていたため、紫様の問いかけに対し即座に返答できなかつた。慌てて出した声は変に上ずってしまい、それを聞いた紫様はくすつと笑った。うう、恥ずかしい。

「え、えつと……ここは危険も少ない場所ですし、毎日穏やかに過ごせます。ずつと笑っていられるほど、素晴らしい所です」

「そう、なら心配なさそうね」

「はい！紫様、藍様と一緒にここで毎日過ごしたいくらいです！」

「ふふっ……それも楽しそうね。橙、その笑顔を忘れずにね？」

近づいてきた足音が止まる。2人は、この部屋の外に立っているようだ。襖の取っ手に手がかかる音が聞こえた瞬間、紫様は笑顔のまま私に言った。

「私はもう、笑い方を忘れてしまいましたから……」

音を立てて襖が開かれ……。そこにいた人物の片方を見て、私は目を見開いた。

「……………え？……紫……様？」

## 問いかけ

コポコポ、とお茶が注がれる音がする。

丁寧な手つきでその行為を行っているのは、見た目が10歳ほどの少女だ。特徴的な帽子を被り、赤と白の2色を基本とした服を身にまとっているその姿からは、普通なら明るく活発な子、という印象を受けるだろう。・・頭に生える猫耳と特徴的な大きな尻尾に目をつぶれば、の話だが。

細かい動作にも対応しているかのように、つぶさに揺れる耳と尾。機械工学方面は専門外ながら、その動きは一目で人工物ではないと察することが出来る。

「粗茶ですが」

少女が静かにお茶とお茶請けを差し出してくる。小さくピコピコと動く耳を懸命に意識外に押しやりつつ、礼を言った。

隣にいるメリーにも同じように差し出される。メリーはすぐに礼を返したが、その視線は猫耳の少女を捕らえていなかった。正座のまま、真つ直ぐ前に視線が固定されている。普通の日本人より遥かに礼儀正しい彼女にしては珍しい礼の欠き方だが、今回ばかり

りは仕方の無いことだと感じる。

自分も視線を前方に戻す。私たちが腰を降ろす机の向かい側には、一人の女性が座っていた。

ごくりと唾を飲み込む。少し前に人の気配を感じ、思い切って入った部屋にいたのは、少女と女性の二人。本来なら外見的特徴がある少女に目が行くところだが、

心臓が止まりそうになった。

『初めまして』、と言いましょうか。私は八雲紫というものです」

「う、宇佐見蓮子です」

「マエリベリー、・・・ハーンです」

お互いに座った状態で目を合わせる。八雲紫、と名乗った女性は静かに微笑みながらこちらを見ていた。

輝きを放つ金色の髪は腰の辺りまで流れており、その眩しさと同じ光を放つ目が見据えている。

目が、離せなくなる。女性から感じる圧倒的なオーラのせい、ではない。そんなもの

より、もつと重要な要因があつた。

(……メリー……なの?)

心の中で、呟く。第三者が見れば、何を馬鹿なことをと思うだろう。目の前の人物は八雲紫という名前であり、メリーは今この瞬間も私の隣に座っている。

それに彼女とメリーの違いをあげろ、と言われたなら即座に答えられる。まず、見た目が若干違う。着ている服を対象外にしても、20歳を迎えてないメリーと20代中々後半ほどと伺える女性なのだ。雰囲気はもちろん、顔立ちも異なるし背丈も誤差の範囲には収まらない差があるだろう。そっくりさんとして2人を紹介するには迷うレベルくらいの相違点がある。

だが、それでもだ。初めて彼女……八雲さんを見た瞬間に思ってしまったのだ。

八雲紫さんとマエリベリー・ハーンは『ほぼ同じ存在』だと。

他の者なら何も感じなかつただろう。精々が他人の空似で流すくらいだ。だけど、私は違つた。私だから違つた。短い期間ながらもメリーの異能を受け入れ、共に活動をしてきた私だから、本能で悟ってしまった。

「さて、久しぶりの客人ということでもてなしたいのは山々ですが、時間は無限でないことも事実です。あなたたちの疑問に出来る限りお答えしていきましよう。」

開かれた扇子を口にあて、八雲さんは目を細くした。動作の一つ一つに感じられる気品に思わず呆けそうになる。女子力が長期家出中の自分と比べて軽く絶望しそうになつたが、今はそれ所ではないと頭の中を整理する。

よくよく考えれば、私たちがしていることは不法侵入そのものなのだ。結界を越えたことで気持ちが大きくなっていたのは事実だが、八雲さんがその気になれば私たち二人を警察に突き出すことだつて出来たはずだ。明らかに人間とは思えない少女を見る限り、私たちの住む日本と一緒とは思えないが、私の目の情報が確かであればパラレルワールドという可能性もある。

人が空想できる全ての出来事は起こりうる現実である。遙か昔、光は粒子なのか波なのか？という議論が飛躍し、学者たちが大真面目にパラレルワールドの存在を考え始めた。一般の人々からは鼻で笑われたのだが、現代に生きる私たちからすれば、当時の一般の人々を鼻で笑うだろう。また話が逸れた。

「ふふふ．．．なにも不法侵入を咎めようだなんて思つてませんわ」

聞こえてきた言葉に反射的に反応し、その声を発した主、八雲さんに意識を向けた。考えが読まれていたとしか思えないタイミングでの声かけだったため、ほんのわずかだ



が体が跳ねた。

そうだ、改めて言えば八雲さんは猫少女の（恐らく）主人であるお方だ。人ならざる能力を持つていたとしてもなんら不思議ではない。

「えっと、その・・・」

「す、すみませんでした・・・」

「もう、家主の私が許可を出したのです。謝罪なんて必要ありませんわ。この話はここで終わりです」

扇子を置いた八雲さんがパンツと両手を叩いて、にっこりと微笑んだ。言葉通り、私たちの行動については何も言わないのだろう。笑みを向けられ、罪悪感に駆られた私は、間を取るために湯呑に口をつけた。・・・おいしい。

「さて、まとめて言うことになりますがこの場所はデンデラ野の向こう側でも上品蓮台寺の結界の先でもありません。人間が命名するには、マヨヒガと呼ばれる場所になります。」

ダンっ！と強い音が響いた。持っていた湯呑を机に強く振り降ろしてしまったためだ。真っ直ぐに降りたため容器自体は割れなかったが、中身が衝撃で少し飛び出し、自分の手にかかった。

火傷するほどの温度を持ったお茶だったが、今の私にはそんなことどうでもよかつ

た。

今、彼女はなんと言った？

「・・・あなたが原因だったんですね。」

「半分は正解、と言っておきましょう。マエリベリー・ハーンさん」

「こんな短期間で同じ人物が2度も境界の裂け目を発見だなんて、偶然どころか奇跡を重ね掛けしてもありえないことでしたからね。人為的なものだとすればまだ納得が出来ます。」

「メリーが八雲さんを睨み付ける。だが、その圧力を向けられた当の本人は何事も無かったかのようにお茶に口をつけた。」

「いや待て。本人が適当に流しているため軽視しそうになるが、もしメリーの言葉が的を得ていたとするなら・・・八雲さんは境界を操ることができるのか？」

「有り得ない。そんな力、それこそ神でもなければ使えない。世界の事象に干渉できる力なんて、一個人が持っているいい能力ではない。」

「あなたは・・・一体何者なのですか？」

「なんとか搾り出した声は小さく、震えていた。そんなものでも八雲さんはしっかりと」

聞き取ったしく、こちらに視線を戻した。その表情は相変わらず笑顔だったが、初めて、どこか悲しそうに見えた。

「私は八雲紫。ただのしがない妖怪です」

八雲さんの話によれば、ここは幻想郷という場所で間違いなく日本の一部であるとのことだ。ただし、歩き回ればたどり着く場所ではないみたいで、特別な入り口を経由するか八雲さん以上の力を持っていなければ入れないと言われた。

今回は前者で、彼女が結界を調整し、私たち二人を招き入れたとのことだ。規格外な、と感じた。

境界を操る力。メリーの持つ、境界を把握する力の上位互換といえる能力をメリーとほぼ同じ存在（だと思う）である彼女が持っていることが偶然だとは思えない。

横目でメリーを見やる。最初、部屋に入ったときは私以上に驚き、時間が止まったかのように動かなくなっただけだが、現在は少しだけ落ち着いたのか、八雲さんの話を目を合わせながら聞いている。

摩訶不思議な現象の連続で逆に冷静になった部分もあるのかもしれない。ここら辺は普段の活動でメンタルを培ってきた賜物といえる。一々驚いてはオカルト探索

などやっていけない。

ただ、完全に平常心というわけではないようで、膝の上においてある両手はぎゅつと力強く握られており、小刻みに震えていた。表情こそ動揺を悟られないように勤めて無表情を保とうとしている。緊張しているときのメリーが無意識の内に取ろうとする行動だ。

対する自分はどうと、メリーよりはマシといったところか。ドツペルゲンガーとの邂逅を果たしていない分、親友よりはまだ落ち着いた態度を取れている。

八雲さんが最初に放った爆弾発言から2〜30分ほど経った。現在は私たちが投げかけた疑問を八雲さんが解答していく形で時間が進んでいく。先に答えたくれた幻想郷という場所についても、それ以外のことについても何でも答えてくれた。幻想郷について語るときの八雲さんは、一段と笑顔になっているのを見て、ああ、この人は幻想郷が本当に好きなんだなと思った。

それ以外のおきでも笑顔を崩さなかった彼女が、2回ほど瞳に哀しさを漂わせた時があった。

1回目は冒険の発端となった、上本蓮台寺での詳細を聞いたときだ。初めに八雲さんが触れていたのが、桜の下で事切れていた女性について知っていることはないかを質問したのだが、饒舌に語っていた彼女の口が一瞬止まった。一泊置いて会話を再開したの

だが、無くなった女性のことにについては不自然なほど触れなかった。

2回目は、メリーの質問だった。

「私も、八雲さんみたいに境界を操れるようになるのでしょうか？」

メリーの目からは真剣な気持ちで質問しているのが読み取れた。これは私も気になつていたことだ。メリーの現在の能力は境界の裂け目を見ることは出来るが、作ることは出来ない。境界が不完全な場所を探し当てられれば境界を越えられるのだが、探索という非常に大きな手間がかかる。

もし、自分で境界を操ることができれば、動かずとも私たちの冒険をすることが出来るのだ。こんなに、こんなに欲しい力はそうそうない。

メリーも、私も八雲さんを見つめた。2人分の真剣な気持ちを感じ取ったのか、彼女は真顔になり・・・そして哀しく微笑んだ。

「悲しい『断言』をします。ハーンさんは境界を操作できるようなにはなれません」

言葉を発し、一瞬・・・一瞬だけ私、宇佐見蓮子の方を向いた。その目は悲しみより深いナニカに満ちており、それ以上質問することを躊躇った。

事実だけを伝えられたメリーだったが、彼女も八雲さんのただならぬ雰囲気を感じ取ったらしい。それ以上同じ質問をすることを止め、違う質問を問いかけていった。

八雲さんは博識であり、こちらの質問に丁寧に、時にはユーモアも添えて返してくれたため、私たちも質問に夢中になりあつという間に時間が過ぎていった。最初感じていた固さもある程度取れた頃にそれは起きた。

「では、私から一つ問いかけを行ってもよろしいでしょうか？」

ピン、と空気が張り詰める音が聞こえた。八雲さんが何気なく、本人にとっては本当に何気なく発した言葉だったのだろう。

だけど私、正確には私たちには言いようの無いプレッシャーを伴った問いかけに感じた。猫耳の少女も例外ではなかったらしく、時間の経過と共に緩んでいた雰囲気を経て去り、ピンと背筋を伸ばしていた。

八雲さんを見る。崩そうとしない微笑みを浮かべていた。それを見て、私は変な感想を抱いてしまった。

・・・何故この人は無表情なのだろうと。

彼女は、ゆっくりとした口調で、私たちに質問をした。

「あなたたちは、あなたたちが想う『幻想』を見つけることができますか？」

## 一時の別れ

「その・・・本日は色々、ありがとうございます」

正門の前まで見送りに着てくれた人物、八雲さんと猫耳の少女に私達は二人で礼をした。時間に見れば1時間ちよつとという、わずかな間の縁(えにし)だったが今日この日、得ることが出来た体験は一生忘れられない物になるだろうという確信があった。

今回の遠征における目的は大まかに分ければ、蓮台寺での出来事をもう一度現実のものとする、そして桜と共に散ったあの女性と会う、という2つのものがあつた。今後2ヶ月以上は食事内容が2ランクほどグレートダウンするくらいの金額を使ってまで決行したにもかかわらず、どちらの目標も達成できないまま、明日京都に帰ることとなるだろう。

それでも私は心の底から、来て良かったと思つた。

時間があるなら、くらしいの優先順位ではあるが、訪れたいと思つていたマヨヒガへの到達。何より、八雲紫さんとの出会い。彼女から教えてもらった情報は、オカルトサー



クルを名乗る私にとって非常にありがたい情報ばかりだった。

最初の内は初対面ということと、伝わってくるオーラに吞まれ、話を信じることに出来ずにいた。それが中盤、幻想郷という場所について語る彼女を見て氷解した。

今思えば、あの時だけは八雲さんが本心から笑っていたのかもしれない。そう思えるほどの純真な笑顔で、幻想郷への愛を伝えてくれた。彼女の熱の籠った話を聞いていると、まだマヨヒガという部分でしか知らないこの場所について好意を持ってしまいうくらいには惹きこまれるものだった。

それに・・・幻想郷を語る八雲さんのことを、何故か他人だとは思えなかった。内容は違えど心に大きな想いを持つもの同士、シンパシーを感じたのかもしれない。

こんな笑顔をする人が、嘘偽りを言うとは思えない。我ながら甘い考えだとは思いますが、自分の勘は、しようもないところでは外れるがここの場面では当たる方なのだ。

「ふふ、礼を言うのはこちらの方ですわ、宇佐見さん」  
門の境に立つ八雲さんが、笑顔で答えてくれる。

「帰る際は、この道を通つ直ぐに行きなさい。決して振り返つては・・・まあ構いませんが、名残惜しくなるだけなのでお勧めはしませんわ」

扇子で口元を隠し、ジョークか本気だか分からない事を言ってくる。もし、ずっとこの場所に入れるならと一瞬考えてしまったが止めておいた。幻想郷のとある場所に

存在すると言われているこのマヨイガは怪奇を追い求める者たちからすれば、垂涎の的だ。

だが、それが目的ではない。私達は、様々な神秘を、怪奇を、オカルトを追い求めたのだ。一つの怪奇に立ち会ってその場所で安住するなどという選択肢はない。世の中には無数の謎があるのだ。一つの怪奇で満足するだなんて、そんなにもつたいないことは無い。

神秘を追い求めて早数年。秘封倶楽部を結成して約半年。その短い期間だけでも様々な発見が、出会いがあった。それをまだまだ続けることが出来るとなれば、足を止める理由など無い。

まだ、夢の途中。今回の体験もしかと心に刻み、また歩みを進めようと誓う。

「はい。八雲さんも、お元気で……」

頭を下げ、マヨヒガに、八雲さんに背を向けた。

なだらかな斜面を黙々と歩いている最中、言葉が発したのはメリーだった。

「蓮子、結局八雲さんの目的はなんだったのかしら？」

同じ歩幅で歩きながら質問を投げ掛けてくる。横を見ると、困惑顔の彼女と目が合っ

た。

私もそうだが、メリーにとっては非常に内容の濃い一日となっただろう。マヨヒガでの体験はもちろんだが、自分の分身とも言える人物と会ったのだ。混乱が収まるわけがない。

そんな彼女が聞いてきた疑問は八雲さんについてだった。彼女が境界を操作して自分達を招きいれたといっていた。実際に境界操作をしている場面を見ることは叶わなかったが、それは仕方ない。

八雲さんは自身の能力について語るとき、どこか辛そうな表情をしていたし、メリーが自分も使えるようになりたいと申し出たときも拒否した。普通であればでまかせを言つて誤魔化していると考えるところだが、私は自分の勘を信じることにした。

その上で、何故彼女が自分達を呼んだのか？

彼女ほどの力を持つものが、どうして私達みたいな一般人を招きいれたのだろうか。単に暇つぶしというわけではあるまい。さらには、帰るときに八雲さんは私達を引きとめようとする仕事をしなかった。もし、目的があつて呼んだのであれば、私らが解放された現時点で彼女の目的は達成されているということになる。

私達と会うため、だけでもないだろう。そもそも、上品蓮台寺での出来事も彼女が起こした可能性が極めて高いのだ。単に私達に会うためなら、八雲さん自身がこちらの世

界に来るだけで事足りる。わざわざ2回も結界を歪ませ、かつこちらから会いに行くという面倒な手順に頼らずともいい訳だ。

単純に、私達に神秘を経験させたかったのかとも考えた。ただ、それはそれで疑問が残る。少なくとも、八雲さんとは初対面だ。見ず知らず（あちらがどうかは分からないが）の人物にこれだけ肩入れしてくれる理由が思いつかない。

メリーが鍵となるのかもしれない。が、見る限りでは八雲さんとメリーの間で何か起きた様子は無かった。

分からないことだらけ……しかし、一つだけ推測がある。根拠も何も無い馬鹿らしいものだが、オカルトを追い求める時点で根拠などあってもなくても問題ない。

「メリー。突然だけど、マヨヒガの伝記については全て覚えているわよね」

「え、……まあさすがに分かるわ」

息をするように私の手を握り（しかも恋人繋ぎで）、言葉を返してくれたメリーに、さらに問いかける。

「今回私達がもらった『もの』。これを気付かせたかったんじゃないかしら？」

「へ？ 私達何かいたただいたかしら？」

困惑顔で聞き返してくるメリー。私はそんな顔を見ながら、八雲さんの最初で最後の質問を思い浮かべた。

「紫様、良かったんですか？」

マヨヒガにある居間の一室で寛ぐ主に、思わず質問してしまった。

「あら、何がかしら？ 橙。」

「その、紫様が彼女らに問いかけた質問についてです」

最初に来たときと同じようにお茶を飲みながらのんびりとしている紫様。二人が屋敷から出てからは纏っていたかすかなオーラも消えたため、彼女がここに来た目的を無事にやり終えたのだろうかと推測する。

彼女達との会話が目的であれば私もすんなり納得しただろうが、最後の質問がそれを遮る。

紫様が二人に質問をした時、思わず私も身構えてしまった。紫様が戦闘時かと思うほどのオーラを纏い、圧を全身から発したからだ。彼女が本当に本気で『氣』を発していたなら私も含めて3人とも気絶してしまっただろうから、ある程度抑えていることは分かる。

それでも、普段めつたに見せないその姿を出したからには、あの質問はかなり重要なものだったはずだ。

その質問に対し、彼女達は何と答えたか？

『……分かりません、見つけられると信じている、ということしか言えませんが』ですよ。」

紫様は根拠の無い答えをあまり好まない。なのに、その解答を聞いた彼女は『氣』を緩め、笑顔……いや、安堵したかのような表情をしたのだ。

おおよそ主らしくない行動に戸惑ってしまう。そんな私の考えを見透かしたのか、紫様は静かに言ってきた。

「ふふ、ただ安心しただけよ。彼女の目を見て、ね」

「え、目ですか」

「ええ。私に目を合わせられて嘘を吐ける人間など早々いないわ。そんな中で彼女は口でも、目でも真つ直ぐに私を捉えていた。口からは彼女の本心を聞きだせし、目か

らは、覚悟を感じたわ。絶対に見つけ出してみせる、という強いものをね。彼女達なら、きつと『気づいてくれる』でしょうしね」

遠いどこかを見るように紫様は言った。その目には負の感情は見受けられず、ある種の達成感が漂っているのようにも見えた。

私はそばから見ていたため分からなかったが、紫様にとつては十二分に満足の行く答えだったのかもしれない。

「す、すみません、出過ぎた真似をしてしまいました」

「もーそんなの気にしてないわよ・・・あ、橙。お菓子お代わりお願いね♪」  
「はいー」

確かまだ台所に残っていたはず、と思いつながら部屋から出る。障子を閉めて目的地向かおうとした瞬間に、紫様のその声は聞こえてきた。

それは、消え入りそうな、静かな、儂い声音だった。

「ああ………本当に、懐かしいわ」



閑話：東方キャラの戦闘能力をFE方式で表してみた。

八雲紫 HP55

力 18

魔力 35

技 39

速さ 24

幸運 18

守備 33

魔防 37

スキル

『最強の妖怪』：妖怪との戦闘時、全能力+5

『境界操作』：戦闘時、敵から受けるダメージを1/2

『???』：???  
『???』：???

博麗霊夢 HP31

力	8
魔力	15
技	20
速さ	14
幸運	50
守備	9
魔防	18

スキル

『博麗の巫女』：妖怪との戦闘時、全能力+15

『異変の解決者』：ボスとの戦闘時、全能力+15

『龍神召喚の儀』：このスキルを使用した場合、このキャラは死亡する。マップ上に龍神を召喚する。

霧雨魔理沙  
HP 26

力 8

魔力 18

技 8

速さ 19

幸運 15

守備 6

魔防 17

スキル

『恋色の魔法』：ミニ八卦楼装備時、魔力&速さ+15。  
『収集癖』：「盗む」コマンドが使える。

ルーミア HP35

力 16

魔力 9

技 7

速さ 9

幸運 15

守備 15

魔防 9

スキル

『人食い妖怪』：人間との戦闘時、全能力+3

『封印解除』：1ターンの間、全能力+20。このスキルは5ターンに1回使える。

チルノ HP 24

力 4

魔力 14

技 5

速さ 10

幸運 30

守備 4

魔防 12

スキル

『妖精のリーダー』：周囲3マス以内に居る妖精の全能力+3

『氷結』：自身と隣接するマス一つに3ターン氷柱を出現させる。そのマスは誰も通れない。

紅美鈴 HP 49

力	2	3
魔力	6	
技	2	4
速さ	1	1
幸運	1	6
守備	2	6
魔防	2	2

スキル

『門番の務め』：自分と隣接するユニットが攻撃を受けた場合、代わりに自分が敵と戦闘する。その場合、力+10 守備・魔防+15

『受け流し』：戦闘時、一定確率で相手から受けるダメージを0にする。

パチュリー・ノーレッジ HP 25

力 6

魔力 2 8

技 2 8

速さ 1 4

幸運 18

守備 6

魔防 30

スキル

『七曜の魔女』：魔力+10。敵魔法ユニットとの戦闘時、必ず相性有利となる。

『大詠唱』：このスキルを発動したターンは、攻撃できない。次の自分のターンの戦闘時、必殺率+100%。

十六夜咲夜（サクヤ姫） HP32

力 11

魔力 12

技 21

速さ 16

幸運 16

守備 13

魔防 12

『咲夜の世界』：1ターンに3回まで攻撃行動を行うことができる。また、攻撃後は再移

動が可能。

『穢れ無き月の遺伝子』：特定条件下で発動。HP + 25、全能力 + 20

レミリア・スカーレット HP 51

力 30

魔力 30

技 28

速さ 33

幸運 22

守備 29

魔防 28

スキル

『吸血鬼』：敵に与えたダメージの半分吸収。夜間・屋内マップ以外での出撃時、全能力 - 20。

『運命操作』：自身のHPが0になる攻撃を受けた場合、高確率で1残す。

フランドール・スカーレット HP 51

力 3 3

魔力 3 4

技 7

速さ 3 1

幸運 1 0

守備 2 6

魔防 3 2

スキル

『吸血鬼』：敵に与えたダメージの半分吸収。夜間・屋内マップ以外での出撃時、全能力

↓20。

『狂気の破壊者』：戦闘時、低確率で敵の守備・魔防を0にする。

アリス・マーガトロイド HP 36

力 1 2

魔力 2 1

技 3 0

速さ 1 8



幸運 2 1

守備 1 1

魔防 2 4

スキル

『力配分』：敵に与えるダメージ－3。敵から受けるダメージ－5。

『人形演舞』：1ターンに一度、人形をマップ上に召喚できる。召喚した人形は自軍ユニットとして操作できる。

『禁忌の魔道書』：このスキルを使用したターン中、魔力＋15、技－15。

リリーホワイト HP 27

力 4

魔力 1 0

技 5

速さ 9

幸運 3 8

守備 6

魔防 1 1

## スキル

『春告精』：自身の周囲5マス以内にいる味方の全能力値+1。

『春一番』：自身と隣接する味方ユニットはターンはじめにHP10回復。

ルナサ・プリズムリバー HP36

力 10

魔力 19

技 20

速さ 17

幸運 4

守備 18

魔防 18

スキル

『正々堂々』：戦闘時、互いの命中率+20%

『鬱の音程』：自身の周囲5マス以内に居る全てのキャラの幸運+15。

『鎮魂曲』：章開始直後から使用できる。

メルラン・プリズムリバー H P 3 5

力 9

魔力 2 3

技 8

速さ 1 1

幸運 3 1

守備 1 4

魔防 1 6

スキル

『躁の音程』：自身の周囲5マス以内にいる全てのキャラの幸運+15。

『鎮魂曲』：ルナサ・プリズムリバーが『鎮魂曲』を使用した3ターン後に、このスキルを使用できる。

リリカ・プリズムリバー H P 3 3

力 9

魔力 1 2

技 2 4

速さ 1 5

幸運 1 1

守備 1 5

魔防 1 5

スキル

『幻想の音程』：『薨の音程』効果が味方に、『躁の音程』効果が敵に適用しないようになる。

『鎮魂曲』：メルラン・プリズムリバーが『鎮魂曲』を使用した3ターン後にこのスキルを使用できる。マップ上にレイラ・プリズムリバーを召喚する。

レイラ・プリズムリバー HP 46

力 1 2

魔力 3 2

技 2 2

速さ 2 7

幸運 4 5

守備 1 6

魔防 33

スキル

『幽霊楽団』：ルナサ、メルラン、リリカの全能力+5。また、『鬱の音程』、『躁の音程』の範囲、効果を2倍にする。

『オーケストラ』：周囲5マス以内に、ルナサ、メルラン、リリカ全員がいる場合、自身の全能力+5。

魂魄妖夢 HP35

力 15

魔力 7

技 21

速さ 16

幸運 13

守備 15

魔防 15

スキル

『半人前の一太刀』：戦闘時、低確率で敵の守備・魔防を0にする。

西行寺幽々子 HP 53

力 8

魔力 30

技 31

速さ 15

幸運 1

守備 25

魔防 34

スキル

『冥界の主』：戦闘時、受けるダメージを1/2にする。

『死を運ぶ蝶』：攻撃ヒット時、一定確率で敵のHPを0にする。スキル『蓬莱人』『月人』『純粋な月人』『蓬莱の人の形』のいずれかを持つ相手にはこの効果は発動しない。

魂魄妖忌 HP 46

力 24

魔力 3

技	4
速さ	2
幸運	1
守備	2
魔防	2

スキル

『時斬りの剣』：戦闘時、攻撃が必ず命中する。

『剣聖の一太刀』：戦闘時、敵の守備・魔防の値を0にする。

ミステイア・ローレライ HP34

力	1
魔力	1
技	7
速さ	2
幸運	1
守備	1
魔防	1

スキル

『狂人歌』：人間に攻撃が命中した場合、一定確率でバサーク状態にする。

『夜の帳』：自身の周囲3マス以内に居る相手は、命中率10%&間接攻撃が出来なくなる。

鈴仙・優曇華院・イナバ HP 45

力 19

魔力 23

技 20

速さ 25

幸運 9

守備 20

魔防 21

スキル

『狂気の瞳』：戦闘時、自身の命中率+25%・相手の命中率-25%

『自信家な臆病者』：体力が半分以上のとき、全能力+5。体力が半分以上のとき、全能力-5。



蓬莱山輝夜      H P 6 5

力            3 6

魔力        3 3

技            3 4

速さ        3 3

幸運        2 8

守備        3 8

魔防        3 9

スキル

『蓬莱人』：HPが0になっても一定時間後に復活する。

『月の姫君』：神以外との戦闘時、全能力+5

八意永琳      H P 7 5

力            3 5

魔力        4 9

技            4 9

速さ 4 4

幸運 4 1

守備 4 7

魔防 5 0

スキル

『姫の従者』：蓬莱山輝夜が出撃時のみ、自身も出撃できる。輝夜の体力が半分以下でない場合、全能力―20

『蓬莱人』：HPが0になっても一定時間後に復活する

『月の頭脳』：月人以外の相手と戦闘時、全能力+10。『姫の従者』が発動中の場合、このスキルは発動しない。

藤原妹紅 HP 65

力 1 5

魔力 3 8

技 1 8

速さ 2 9

幸運 6

守備 3 1

魔防 3 3

スキル

『蓬萊の人の形』：HPが0になっても一定時間後に復活する。蓬萊人との戦闘時、全能力+5。

『大罪の被害者』：魔力+15。戦闘時与えたダメージの1/4自傷ダメージ。  
『リザレクション』：自分のターンのはじめにHP60回復。

伊吹萃香 HP65

力 4 2

魔力 7

技 1 6

速さ 1 1

幸運 1 6

守備 3 9

魔防 3 8

スキル

『疎密変化』：戦闘時、回避率+30%

『百鬼夜行』：戦闘時攻撃が外れた場合、1回だけ追加攻撃できる。

風見幽香 HP 56

力 31

魔力 32

技 28

速さ 10

幸運 21

守備 24

魔防 31

スキル

『花鳥風月』：「森林」「花畑」の地形に居る時、全能力+5

『妖精の名残』：体力が0になった時、一定時間後に復活する。

小野塚小町 HP 49

力 27

魔力 14

技 23

速さ 11

幸運 10

守備 26

魔防 28

スキル

『死神の目』：体力が半分以下の相手と戦闘時、必殺率+50%

『距離操作』：1ターンに一度、任意の相手の隣マスへ移動できる。

四季映姫・ヤマザナドゥ HP58

力 20

魔力 32

技 40

速さ 28

幸運 22

守備 31

魔防 35

スキル

『旗幟鮮明』：戦闘時、自身の命中率が50%以上の場合、必ず攻撃が命中する。自身の命中率が50%以下の場合、必ず攻撃が外れる。

『桃源郷の閻魔』：戦闘時、敵の戦闘スキルを全て無効化する。

犬走棍 HP 47

力 20

魔力 8

技 28

速さ 22

幸運 15

守備 28

魔防 27

スキル

『千里眼』：探索マップ時、このキャラの視野は周囲20マスとなる（通常キャラは周囲5マス）。

射命丸文 HP 48

力 20

魔力 19

技 35

速さ 49

幸運 36

守備 20

魔防 21

スキル

『音速の一撃』：速さ+15。戦闘時、速さの1/10の値を力に加算する（速さの値はそのまま）。

『無双風神』：戦闘時に敵を撃破した場合、行動終了とならずもう一度移動、攻撃ができる。

『風神の加護』：敵の速さの値が自分より20以上低い場合、戦闘時に反撃を受けない。

守備	幸運	速さ	技	魔力	力	八坂神奈子	HP
40	17	28	29	21	41	神奈子	65

  

魔防	守備	幸運	速さ	技	魔力	力	東風谷早苗	HP
16	10	48	14	16	16	10	早苗	31

『奇跡を起こす者』：戦闘時、必殺率+50%。相手からの必殺率—50%



魔防 36

スキル

『天地開闢』：自身の周囲3マス以内にいる敵に20ダメージ。このスキルは3ターンに1度使える。

洩矢諏訪子 HP 57

力 26

魔力 37

技 33

速さ 27

幸運 15

守備 30

魔防 41

スキル

『崇り神の本質』：自身にダメージを与えた相手は、毎ターンの初めに5ダメージを受ける。

『土着神の頂点』：前ターン初めと同じ位置にいた場合、全能力+5（重複はしない）。

比那名居天子 HP 55

力 30

魔力 22

技 13

速さ 18

幸運 50

守備 44

魔防 42

スキル

『緋想の剣』：戦闘時、必ず相性有利となる。

『天人くずれ』：戦闘時、敵から受けるダメージー5

茨木華扇 HP 42

力 20

魔力 15

技	27
速さ	22
幸運	17
守備	21
魔防	19

スキル

『賢者の導き』：自身の周囲3マス以内に居る味方キャラは、状態異常にならない。

『奸佞邪智の鬼』：3ターンの間、HP+20 力、守備、魔防+15 技、速さ—1

0

『氷消波洗旧苔鬚』：宮古芳香が隣接しているとき、全能力+5。このスキルが発動中のとき、『奸佞邪智の鬼』は発動しない。

水橋。パルスィ HP 43

力 16

魔力 24

技 21

速さ 19

幸運 5

守備 18

魔防 28

スキル

『地底の嫉妬心』：戦闘時、自分と相手のステータス7項目を比べる。相手のほうが高い項目一つに付き、全能力+1。

星熊勇儀 HP70

力 50

魔力 1

技 7

速さ 5

幸運 17

守備 45

魔防 38

スキル

『ノーガード』：戦闘時、互いの回避率—50%  
 『金剛鉄壁』：守備、魔防+5。戦闘時、敵の防御貫通スキルを無効化

古明地さとり HP 50

力 17

魔力 30

技 35

速さ 22

幸運 14

守備 23

魔防 31

スキル

『サードアイ』：戦闘時、回避率+50%

『地底の主』：戦闘時、相手の必殺率—30%

火焰猫燐 HP 44

力 19

魔力 2  
技 1

速さ 3

幸運 1

守備 1

魔防 1

スキル

3 『キッツウオーク』：黒猫形態に変身可能。黒猫時、力・魔力―5、速さ+5、移動+

『怨霊使い』：妖怪との戦闘時、必殺率+50%

霊鳥路空 HP 51

力 1

魔力 5

技 9

速さ 3

幸運 1

守備 2 2

魔防 2 1

スキル

『荒々しき地底の太陽』：魔力+15 技―5

『八咫鳥の裁き』：戦闘時、敵の防御・魔防の値を0にする。

『広域殲滅攻撃』：低確率で発動。命中率+30%

古明地こいし HP 45

力 1 5

魔力 2 6

技 1 6

速さ 3 3

幸運 1 0

守備 2 4

魔防 3 2

スキル

『無意識の少女』：相手ターン時、このキャラはダメージを受けない。

『閉じた恋の瞳』：スキル『サードアイ』を持つ相手と戦闘時、全能力+5。さらに、『サードアイ』を無効化する。

綿月依姫 HP 65

力 39

魔力 38

技 40

速さ 39

幸運 36

守備 41

魔防 38

スキル

『神降ろし』：能力7項目の内、いずれか3つの値+5。補正を受ける項目は、1ターンごとに変更される。

『純粋な月人』：妖精以外との戦闘時、全能力+5。純化妖精との戦闘時、全能力-30。

綿月豊姫 HP 68



力	4	1
魔力	4	4
技	3	3
速さ	3	3
幸運	4	5
守備	4	2
魔防	3	7

スキル

『海と山を繋ぐ姫』：隣接する味方をマップ上の好きな所へワープさせる。

『純粋な月人』：妖精以外の戦闘時、全能力+5。純化妖精との戦闘時、全能力-30。

ナズーリン HP34

力	1	1
魔力	1	6
技	1	2
速さ	3	0
幸運	1	0

守備 13

魔防 15

スキル

『ダウジング』：このキャラの攻撃で敵のHPを0にしたとき、敵の装備を一つ手に入れる。

『逃げるが勝ち』：体力が半分以下のとき、速さ+5

多々良小傘 HP34

力 16

魔力 8

技 11

速さ 10

幸運 5

守備 16

魔防 11

スキル

『鍛冶屋』：1ターンに1度使用できる。持っている武器一つの耐久値を回復する。

雲居一輪 HP 42

力 22

魔力 2

技 13

速さ 12

幸運 18

守備 21

魔防 10

スキル

『入道使い』：自分のターン時、力+15。相手ターン時、守備、魔防+10。

『純粹な想い』：聖白蓮のHPが半分以下のとき、全能力+10

村紗水密 HP 40

力 22

魔力 8

技 12

魔防	守備	幸運	速さ	技	魔力	力	寅丸星	HP
20	23	16	25	19	23	18		47

『古の船幽霊』：海地形を移動できる。海地形に居るとき、全能力+5  
『純粹な想い』：聖白蓮のHPが半分以下のとき、全能力+10

スキル	魔防	守備	幸運	速さ
	16	18	5	16

## スキル

『宝塔の加護』：宝塔を持っているとき、全能力+3。宝塔を持っていないとき、全能力-10

『純粋な想い』：聖白蓮のHPが半分以下のとき、全能力+10

聖白蓮 HP 33

力 12

魔力 34

技 14

速さ 11

幸運 22

守備 11

魔防 35

## スキル

『身体強化』：3ターンの間、以下のいずれかの効果を得られる。『身体強化』重複は不可。

・剛力：力+30、守備+15

・疾風：力+15、速さ+30

・鉄壁：守備+30、魔防+15

封獣ぬえ HP45

力 ??

魔力 ??

技 ??

速さ ??

幸運 ??

守備 ??

魔防 ??

スキル

『正体不明の正体』：このキャラのステータスは、毎ターン開始時ごとに決定される。

ステータスの値は0〜45までのうちランダムな数字となる。

『千年恋慕』：源頼政が隣接している時、全能力+10。また、頼政が敵から攻撃を受けた際、代わりに自分が戦闘を行う。

姫海棠はたて

HP48

力	2
魔力	1
技	3
速さ	4
幸運	2
守備	2
魔防	2
スキル	

『念写』：一度以上戦闘した相手と再び戦う場合、全能力＋5

『烏天狗のプライド』：戦闘時、攻撃回数＋2回

『雷神の加護』：戦闘時、必殺率＋20%

宮古芳香 HP 58

力 25

魔力 2

技 4

速さ 2

幸運 1

守備 2 4

魔防 2 2

スキル

『死なない殺人鬼』：戦闘後、体力が10回復する。

『気霽風梳新柳髪』：茨木華扇が隣接している場合、技・速さ・幸運+10

霍青娥 HP 46

力 1 2

魔力 2 3

技 2 1

速さ 1 8

幸運 2

守備 3 2

魔防 3 4

スキル

『壁抜け』：マップ上の地形、壁などの障害物を全て無視して移動できる。



秦ころろ HP 37

力 11

魔力 15

技 9

速さ 11

幸運 8

守備 13

魔防 10

スキル

『表情豊かなポーカーフェイス』：ステータス7項目の内、6項目の値がそれぞれ+15、1項目の値が-5される。変化する値は1ターンごとに変化する。

今泉影狼 HP 43

力 19

魔力 4

技 13

『草の根活動』：周囲3マス以内に妖怪が居る場合、全能力+3

速さ	3
幸運	2
守備	1
魔防	0
スキル	1
魔防	3

『一寸法師』：道具「打出の小槌」を装備している場合、HP+30かつ全能力+25

少名針妙丸	HP	12
力	1	
魔力	1	
技	3	
速さ	7	
幸運	9	
守備	2	
魔防	1	
スキル		

『小人族』：スキル『一寸法師』が発動していない時、回避率+80%  
 『針の一突き』：鬼と対戦時、全能力+15

清蘭 HP 34

力 13

魔力 20

技 17

速さ 19

幸運 6

守備 18

魔防 15

スキル

『ルナティックガン』：このユニットの射程範囲は、マップ上全体となる。

ドレミー・スイート HP 52

力 11

魔力 35

魔防	守備	幸運	速さ	技	魔力	力	稀神サグメ	魔防	守備	幸運	速さ	技
4 7	3 6	3 8	3 7	4 2	3 9	2 6		3 5	2 6	2 9	2 6	3 5

スキル

『ドリームワールド』：このユニットから攻撃を受けた者は「夢見状態」となる。夢見状態時、速さ―5・必殺率が0%となる。

HP 63

## スキル

『事象反転』：1ターンの間、自分のHPが0になった場合、代わりに相手のHPを0にする。

『純粋な月人』：妖精以外との戦闘時、全能力+5。純化妖精との戦闘時、全能力-30。

クラウンピース HP 27

力 4

魔力 16

技 5

速さ 12

幸運 21

守備 7

魔防 15

## スキル

『狂気の松明』：ダメージを与えた相手を、一定確率で次ターン行動不能にする。

『純化妖精』：純狐よりスキル『純化』を受けると発動。3ターンの間、HP+25、全

能力+25

純狐 HP 80

力 41

魔力 47

技 46

速さ 46

幸運 0

守備 44

魔防 45

スキル

『殺意の百合』：月人との戦闘時、全能力+10。

『純化』：特定の味方ユニットに対して発動できる。

『母の使命』：戎璿花が隣接しているとき発動。彼女が攻撃を受けた場合、代わりに自分が戦闘する。その場合、守備・魔防+15

ヘカーティア・ラピスラズリ HP 120

力 60

魔力 60

技 60

速さ 60

幸運 60

守備 60

魔防 60

スキル

『手加減』：体力が1/2以下でない場合、全能力ー30

『地獄の女神』：戦闘時、敵のスキルをすべて無効化する。『手加減』が発動時、このスキルは発動しない。

エタニティラルバ HP 23

力 5

魔力 10

技 7

速さ 8

幸運 34

守備 7

魔防 12

スキル

『永遠の幼虫』：戦闘経験値+50%。

『常世神』：摩多羅隠岐奈と戦闘時、全能力+30

坂田ネムノ HP55

力 30

魔力 3

技 17

速さ 0

幸運 11

守備 29

魔防 27

スキル

『山姥の縄張り』：戦闘時、相手の攻撃回数は必ず「1回」となる。

『聖域の守護者』：前のターン開始時と同じ位置にいた場合、守備&魔防+5（重複はな



し。

矢田寺成美 HP 33

力 7

魔力 16

技 7

速さ 10

幸運 16

守備 11

魔防 16

スキル

『傘地蔵の忍耐』：体力が半分以下の時、守備&amp;魔防+10

摩多羅隠岐奈 HP 65

力 26

魔力 35

技 37

速度	15
幸運	13
守備	33
魔防	35
スキル	

『絶対秘神』：味方キャラを一体選ぶ。次の自分のターンまでそのキャラの全能力+8

戒瓔花 HP26

力 4

魔力 8

技 19

速さ 6

幸運 0

守備 7

魔防 9

スキル

『河原のアイドル』：周囲3マス以内にいる味方キャラの全能力+2

庭渡久侘歌 HP 42

力 17

魔力 21

技 16

速さ 27

幸運 12

守備 16

魔防 22

スキル

『地獄の番頭』：相手ターン時、守備・魔防+5

『百日咳治癒』：ミステリア・ローレライ、幽谷響子がいる場合、二人の魔力+10

吉弔八千慧 HP 51

力 23

魔力 28

技 36

『鬼傑組組長』：戦闘時、このキャラは反撃を受けない。

速さ	1
幸運	1
守備	2
魔防	3
スキル	5

杖刀偶磨弓 HP 51

力	2
魔力	6
技	3
速さ	8
幸運	2
守備	8
魔防	1
スキル	7

『比類なき忠誠』：埴安神桂姫と隣接している時、守備・魔防+15。埴安神桂姫が攻撃

を受けた時、代わりに自分が戦闘を行う。

5. 『不敗の埴輪軍団』：周囲5マス以内に居る弓兵埴輪、剣士埴輪、騎馬兵埴輪の全能力+

埴安神桂姫 HP 70

力 35

魔力 10

技 49

速さ 29

幸運 22

守備 36

魔防 33

スキル

『偶像造形』：1ターンに一度、以下のいずれかのユニットを召喚できる。召喚したユニットはHPが0になるまで消滅しない。

・弓兵埴輪 HP 40 力 20 魔力 20 技 25 速さ 15 幸運 10 守備 1

5 魔防 25

・ 剣士 埴輪                   HP 40   力 25   魔力 0   技 25   速さ 20   幸運 10   守備 2  
5 魔防 15

・ 騎馬兵 埴輪               HP 45   力 25   魔力 0   技 20   速さ 30   幸運 10   守備 2  
0 魔防 20

『イドラデウス』：自分のターン初めに、マップ上に存在する全ての味方埴輪ユニットのHPを全回復する。

驪駒早鬼   HP 57

力   37

魔力 2

技   7

速さ 43

幸運 6

守備 22

魔防 19

スキル

『猪突猛進』：戦闘時、力+5、命中率+20%、回避率—20%

カナ・アナベラル HP33

力 7

魔力 15

技 7

速さ 13

幸運 5

守備 10

魔防 16

スキル

『夢を失った少女騒霊』：このキャラは、物理攻撃によるダメージを受けない。

朝倉理香子 HP32

力 11

魔力 25

技 13

『科学を追い求める魔法使い』：魔力―30。装備している武器の威力が2倍になる。

スキル	魔法	守備	幸運	速さ
	28	10	16	16

『未熟な吸血鬼』：与えたダメージの1/4吸収。

スキル	魔法	守備	幸運	速さ	技	魔力	力	くるみ
	10	11	15	15	9	9	12	HP 30



エリー  
HP 46

力 21

魔力 5

技 14

速さ 13

幸運 8

守備 19

魔防 12

スキル

『夢幻の門番』：相手ターン時、守備・魔防+5

夢月  
HP 48

力 23

魔力 14

技 30

速さ 31

『二人で一人前』：夢月が隣接していない時、全能力－5。隣接している時、全能力＋1

スキル

魔防 2 2

守備 2 4

幸運 1 3

速さ 3 0

技 1 1

魔力 3 1

力 3 2

幻月 HP 5 1

0

『二人で一人前』：幻月が隣接していない時、全能力－5。隣接している時、全能力＋1

スキル

魔防 1 8

守備 2 0

幸運 3 2

ユキ HP 32

力 11

魔力 16

技 10

速さ 11

幸運 24

守備 8

魔防 16

スキル

『仲間想い』：隣接する味方ユニットの全能力値+1

『激昂』：マイの体力が半分以下のとき、全能力値+5。

マイ HP 31

力 9

魔力 20

守備	幸運	速さ	技	魔力	力	夢子	
1	2	2	3	2	2	HP	
9	9	3	3	0	3	4	
						6	

スキル

魔防	守備	幸運	速さ	技
1	1	9	1	1
9	0		3	2

『足手まとい』：味方ユニットにユキがいる場合、全能力値－3。  
 『激昂』：ユキの体力が半分以下とき、全能力値＋8。および『足手まとい』が発動しなくなる。

魔防 24

スキル

『悲しき人形』：戦闘時、命中率+30%。回避率-30%。HPが0になっても、次ターン復活する。

神綺 HP80

力 26

魔力 49

技 42

速さ 41

幸運 28

守備 37

魔防 49

スキル

『魔界の創造神』：戦闘時、敵の戦闘スキルをすべて無効化する。

天魔 HP 55

力 30

魔力 21

技 42

速さ 50

幸運 30

守備 27

魔防 27

スキル

『神速の連撃』：速さ+20。戦闘時、攻撃回数+2

『夢想風神』：戦闘時、このキャラは反撃を受けない。

『天狗の頂点』：周囲5マス以内に居る天狗の全能力+3。

??? HP 80

力 33

魔力 48

技 50



## ＼登場人物紹介＼

宇佐見蓮子

年齢 19歳

身長 160cm

体重 51kg

異能：月と星を見ることで、場所と時間を把握できる

所属 西京都大学 超統一物理学専攻

性格 大雑把

尊敬する人物 ホーキング博士、キュリー夫人

好きな人物 いない。

好きな食べ物 ペペロンチーノ

嫌いな食べ物 刺身（昔大当たりしたことあり）

趣味 天体観測、囲碁（弱い）、ナンプレ

長所 度胸がある、機転がきく

短所 時間にルーズ、無鉄砲



## 宗教 神道

秘封倶楽部の片割れ。高校までは東京で過ごし、大学進学を機に京都に移住する。目に異能を宿しており、星を見ることで現在の時間を、月を見ることで今いる場所を正確に把握することが出来る。その能力を使い、マエリベリー・ハーンと共に結界暴きの活動を継続中。

身に宿す異能とは裏腹に大雑把な性格をしており、時間にルーズ。大学の講義やメリーとの待ち合わせ時刻に遅刻すること多々あり。成績自体は最上位に片足を突っ込んでいるレベルだが、この遅刻癖のせいで若干点数が引かれて、上の下あたりの順位にとどまっている。本人も自覚している。自覚しているだけ。

裏表の無い性格で誰とでも壁を作らずに接するため、同性異性問わず友達が多い。最近メリーの策略（第3話参照）により友達から避けられることが多くなったが、彼女はまだ真相に辿りついていない。

マエリベリー・ハーン

年齢 19歳

身長 159cm

体重 48kg

異能：境界の裂け目を把握できる

所属 西京都大学 相対性精神学専攻

性格 慎重

尊敬する人物 フロイト、ナイチンゲール

好きな人物 蓮子 蓮子 蓮子

好きな食べ物 スイーツ全般

嫌いな食べ物 特になし

趣味 スイーツ巡り、映画鑑賞、心理テスト

長所 我慢強い

短所 優柔不断

宗教 なし。強いて言えばキリスト教。

蓮子大好き結婚しましょう。

秘封倶楽部の片割れ。幼い頃に来日し、現在進行形で日本に居を構えている。目に異

能を宿しており、境界の裂け目を垣間見ることが出来る力を持つ。オカルトマニア垂涎の能力であり、本人も自覚しているため、今まで蓮子以外の人物に打ち明けてはいない。

才色兼備の名にふさわしい人物である。日本最高峰の西京都大学においてトップクラスの成績を収めており、容姿に関しては、モデル業界に入れば3日で天下とれるレベルである。今まで告白された回数は数知れずだが、蓮子への策略（第3話 r y）が成功してからは告白を受ける頻度が減った。

見た目に寄らず、結構アグネツシブ。ただ当の相方が快速暴走列車なため、ブレーキ役を務めることが多い。実は結構な大食いではあるが、いくら食べても栄養がお腹に行かず胸に溜まる体質のため、黄金比のスタイルをキープし続けている。その体質を聞いた蓮子はガチ泣きした。

蓮子愛してるわ結婚しましょう。

# 出発前の一時

卯酉の道 心の旅

—— 東海道の地下は日本で最も日本的だった。

## 『遷都』

都を都へ移すこと、また都を替えることを意味する言葉である。反対にかつて都であつた場所に再び都を戻すことを還都というが、日本では遷都と還都を同義語として扱う傾向がある。

遷都のパターンとしては、大まかに分けると以下のよう区分される。

- ・ 政権の交代に伴い、新政権が最適地と判断した場所に移転する。
- ・ 政治、経済情勢の変化によつて最適地が他所に移つたと判断され、移転する。
- ・ 前政権の業績を否定するため、今までの都を廃都とした上で新天地に移転する。

・戦況の変化により、正式な遷都という形でなく軍都、臨時首都のように一時的に移転する。

詳細に分ければさらに区分することも出来るが、大抵はこの4つが遷都の基本といわれている。

この中で日本史における遷都の原因は一つ目、二つ目が主だと言われている。西暦643年、皇極天皇の時代に飛鳥板蓋宮に都を移したのが、日本で始めての遷都と言われている。

古来より、現中華人民共和国がある土地から文化を取り入れることが多かった日本は、都作りにおいても、中国の都市を参考としていた。694年に完成した藤原京や、著名な平城京、平安京はその最たるものといえる。

最も、中華式を取り入れ発展した都が、中国から伝わってきた仏教が原因で何度も遷都することになったのは皮肉といえるが。

日本では150年間の間に実に13回もの遷都が行われたのだが、鳴くよ鶯（うぐいす）平安京という言葉で知られる794年、平安京へ都が移つてからは『遷都』という言葉が歴史から消えることとなる。

そもそも、平安京は一時しのぎとして建てられた仮の都だった。一つ前の都、桓武天

皇の元、一大プロジェクトとして建てられた長岡京は度重なる自然災害や疫病、後継者争いなどの権力抗争により10年足らずで荒廃。避難場所として遷都された京都、平安の都が栄華を極めることとなるのだから歴史というものは不思議である。

ちなみに明治2年、東京への首都移転が行われるまで1000年以上に渡り平安京は首都としての役割を果たすこととなる（この時行われたものは奠都であり、厳密い言えは遷都とは違う）。

外国からの技術を積極的に取り入れることでやがて名実ともに日本の中心となった東京都。

外国の技術を取り入れながらも日本文化を残すことで日本屈指の観光地となった京都府。

形は違えど、日の本の顔となった二つの都市。京都是もちろんだが、第二次世界大戦を経てなお産業革命の波に乗った東京都の繁栄は、世界史をひっくり返しても数えるほどしかない発展速度として語られている。

21世紀に入ってから技術大国の中心地として、先進国の首都として輝きを放ち続けたその都市が。

佐渡島に満たぬ面積にもかかわらず、日本の人口の一割以上を萃めていたその都市が。

2100年を前にして再び、遷都の対象になるとはいつたい誰が予想しただろう。

天気は快晴、湿度も快適。

春色の風をその身で感じられる季節の割に早朝の時間肌寒く感じられたのは、昨夜から雲一つない天候だからだろうか。それならあとは恵みの輝きを持つ太陽がその姿を地平線に隠すまで、私たち生物に恩恵を授け続けてくれることだろう。

どうやら出かける直前まで悩み続けていた、ジャケットを羽織るかどうか、という賭けに私は勝ったようだ。未だにアスファルトだらけであろう土地は、私たちが住む場所、京都よりも体感温度は高いはずだ。数日前まで活躍してくれただけのお気に入りのお服は、このまま家での留守番をしておいてもらおう。

最も、現在は肉眼で太陽を確認できない訳だが。

手帳を仕舞い視線を上げると、白を基調とした風景が私を、私たちを囲っていた。1日の間に数えるのも億劫なほどの人物が行き来する場所にもかかわらず、これだけの清潔さが保てるのは技術進歩の成果ともいえる。

古き良き伝統はしっかりと守り、改善できる場所はどんどん新しく変えていく……まさに、完璧な発展だ。これこそ温故知新といえるだろう。

「蓮子、その四字熟語意味が違うわよ」

……と、すぐに突っ込んでくる者が居なければもつと気持ちいい気分で居られたというのにこの方ときたら。そんな思いを持って、本を読みながら時間を潰す相棒に目を移す。

特徴的な帽子に、一般的というにはやや無理のある紫色を中心としたコーディネートまとめられている服装。私みたいな人間が纏えば不審者一步手前、半径3メートルほどの人間限定ATフィールドを搭載することが可能となるが、彼女が着れば違和感のいの字も感じないのだから世の中というものは不公平にできている。

むしろ違和感どころか、太陽にも負けない輝きを放つ金色の髪との色合いが調和を引き出し、美の結晶と言つて差し支えない存在となっている。

現に、周りにいる男性諸君がほぼ全員、彼女に視線をちらちらと向けている。私と同じ方向にいる男性はさりげなく位置をずらし、陰にいる人物に視線を通していた。私のことは眼中にないみたいだった。泣いた。

「メリーは細かいなー。雰囲気で意味が伝われば問題ないのよ」

「私はともかく、物理学専攻のあなたがそのセリフを吐くのはいささか不味いのでは



ないかしら？」

「実験や数式との格闘以外ではずぼらでいいじゃない。超統一物理学が好きなのは確かだけど、人生全てを捧げる気はないわ」

「私は蓮子になら全てをs「はいストップ」

モテ期が来ないことで少し八つ当たり気味にメリーにチクチクと棘を向けたが、棘どころかグングニルの槍が我が身を貫かんと飛んできた。往來の場で何爆弾発言しようとしてるんだこの女は。

言葉を遮られたメリーはきよとんとした顔をこちらを向けてきた。いやなんで訳分からないうつ顔をしているんだ。むしろこっちがしたいくらいである。少なからず自身に注目が集まっているであろう状態で性癖をさらけ出せるその度胸はいつたどこから来るのだろうか

自重という単語を忘れたメリーは前年度比200%の勢いで私にアタックを仕掛けてくるようになった。以前は二人きりの時のみの行動だったが、今ではプライベートな時も公共の場でもお構いなしに愛の告白をしてくるのだからたまらない。

いつもそんな感じのメリーが近くににいるせいか、最近心なしか同性異性問わず友達に避けられているように感じる。待つて違うの。おかしいのはメリーだけだから。私はノーマルだから。

「なら蓮子、こんな言葉知ってるかしら？」

「ごめんメリー電車来るまではそれ以上しゃべらないで」

「えー」

声を伸ばし、頬を膨らませる彼女だが、心を鬼にして発言権をぶん取った。これ以上メリーの口をノーマークにしていたら間違はなくとんでもないパンデミックを引き起こしてしまう。彼女だけならまだしもこつちにも火の粉通り越して火炎弾が降り注いでくる可能性も高いとなれば、事前に刈り取っておくのが吉であろう。

と、そんな私の苦勞が伝わったのだろうか。一本のアナウンスが私たちのいる場所……地下に設置された駅のホームに響き渡った。

『本日も、卯酉新幹線をご利用くださいまして、ありがとうございます。まもなく7番線に、ヒロシゲ36号が到着いたします。安全柵の内側までおさがりください。まもなく……』

機械的な音声に続くように、遙か遠くから聞こえてくる、風を切る音。一昔前までは騒音レベルで響いていたといわれる線路の繋ぎ目が引き起こす音も、現在主流となっているリニアモーターカーのおかげで既に過去のものとなっている。

私たちの住む場京都、首都移転が行われて四半世紀以上が経った場所、東京。その二

つの区間を結ぶ、ヒロシゲ36号。

4 か月ぶりに乗るその列車の姿が、少しずつ大きくなって見えてきた。

## ヒロシゲ36号

晴天清らかな昼下がり。太陽の光が届かない場所で、その列車は走り続ける。

かつて、53もの宿があつたといわれるその道のりを、1時間もかからずに結ぶ列車。その窓からは、春の陽気も、夏の情景も、秋の風情も、冬的神秘も見られない。映るのは、完成された東海道の美しい景色。

地上かと思間違うほどのリアリティを誇る、カレイドスクリーンを通じて目に飛び込んでくるそれは、日本が生んだ傑作の一つとして海外からの観光客にも人気だ。

## 次世代型リニアモーターカー『ヒロシゲ』

既に完成されていたといっている日本の公共交通網に、上記の列車が急ピッチで追加建造されたのにはそれなりの理由がある。

西暦2100年を迎える前に起こった、間違いなく日本史に残るであろう出来事である「神亀の遷都」。

首都移転によつて、経済の中心地は東京から京都に変わり、それにともないに本社を関西地方に移す企業が後を絶たなかつた。

必然的に人口も流れることになるのだが、東京、もしくはその近辺に家を構えるものはおいそれと引越すわけにも行かず、結果として通勤という選択肢を選ぶものが多かつた。

100年前と比べると人口が約半分に減つたとはいえ、未だ2000万人ほどの人口を抱える関東地方のサラリーマン、OLら全員の通勤を支えられるだけのキャパシティが、当時の路線にはなかつた。

その時の混雑具合たるや、一般的な満員電車が極楽浄土と思えるほどの地獄だつたという。何せ、列車の本数と時刻、そして始業時刻は決まつているのだ。油断しているとあつという間に電車内が埋まり、遅刻確定となる電車を待つ羽目になる。

幸い、良くも悪くも同調意識が高い日本のためか、ホームでは長蛇の列こそ出来ても、横入り・乱闘などの騒ぎが起きること稀だつた。よつて、早く並べば比較的早く乗ることができたため必然的に東京駅に集う人々の起床時間は早くなつていった。

全ては遅刻しないため。欠伸をしながら仕事をする社会人の数は少しずつ増えていき、わずか半年で彼らの仕事中のミスや仕事効率の低下が、各会社で無視できない損失となつて現れた。いかに優秀な社員でも、万全の状態でなければ実力を発揮できない。

減らない遅刻者数と、増え続ける睡眠不足の社員。企業単位での解決策はそのほとんどが意味を成さず、頭を抱える経営者の数も比例するように増加の一途を辿った。

経済への悪影響。それは遷都から1年後に公開された年間経済指標によつてはつきりとした数字で現れた。数字こそが最高の説得材料であるとは誰が言つた言葉か。経済の中心地となつた京都で発生した経済停滞を日本人ははつきりと認識し……非難の矛先を政府に向けた。

遷都当初は浮かれて盛り上がっていた国民達は手のひらを返すように政策にケチをつけ始める。政治家はそんな国民を見て勝手な奴らばかりだ、と思つたが、彼らとて現状のままではいいとは思っていない。

事態は急を要する。1年だけで、目に見える形での弊害が出たのだ。10年、20年と続けば最悪、日本という国事態がどうなるか分からない。

指標が揭示された数日後に国会で議論が始まり、わずか1ヶ月で『ヒロシゲ』の原案が完成。急ピッチで線路の選定を終え、その年の内に国の一大プロジェクトとして工事が始まった。

「……政府が国の威信を賭けて取り組んだ新たな交通網、ヒロシゲ。今になってみれば、大成功だったと言うべきでしょうね。」

頬杖をつきながら私はカレイドスクリーンに流れる景色に目を向ける。かなたに見える富士は遠くにもありながらもその巨大さ、そして美しさを隠すことなく見せ付ける。その麓に広がるは、新緑鮮やかな色彩。どこまでも広がる青空も相まって、一つの完成された美を形成している。

それだけだ。

正直に言えば、昨年東北旅で車窓から見た田舎の風景の方が惹かれる。

どんなに素晴らしい光景でも、『映像の世界』に感情移入できないのは私の脳が一代前からバージョンアップしていないだけなのかもしれない。目でしか見れない天国よりも、この身をもって体感できる地獄のほうがまだマシだ。

日の当たらない場所。太陽が届かない地下を進み続ける、ヒロシゲ36号。最先端の技術が集結して製作されたそれ自体には、私はあまり関心を抱くことが出来なかった。

「新設された卯東京駅と酉京都駅をわずか53分で結ぶ夢の列車、ねえ。数字といい

名前といい元ネタを隠す気0ね。」

「名前はともかく、結果は上々よ蓮子。ヒロシゲが開通してから日本経済は無事、右肩上がり。幸福度も上位へV時回復を果たしたのだから、英断と呼ぶに相応しいわ」

2箱目のお菓子に手を伸ばしながらメリーが相槌を打ってくれた。私にとつては退屈でしかないこの映像刺激も、彼女には一定の娯楽となつているのか、乗車時間の大半を仮想風景の観察に費やしている。

映像はゆるやかに流れていく。近代化の象徴とも言えるスクリーンに映るのは、東海道という一帯が受け継いできた、日本の原風景。今はちようど苗植えの時期である3月中旬ということもあつてか、年配の方が広い園地に定植を行っている光景が映し出される。

季節に合わせて1ヶ月ごとに映像が変わるところもヒロシゲの評価点と言われおり、地上の景色を限りなく正確に映し出すその装置は、年を追うごとに外国人からの人気が上がってきている。

「にしても、メリーも飽きないわね。そんな偽物を見たところで何が面白いのかねえ」「あら、蓮子はバーチャルリアリティにいい感情を持っていなかったかしら？」

半年前とは違う映像が流れていく。その非現実を写真に収めながら話すメリーは、どこか楽しそうに見えた。



「蓮子って目に見えるものしか信じない主義？」

「というよりは、作り物がどうもね……。映画とかはまだ好きなんですけど、お化け屋敷みたいなものはダメね。『驚かせる為に作られた』って意識しちゃうとどうにも盛り上がれないのよね」

「ふーん……。まあ、私も蓮子も変な目を持つているからね。普通の刺激じゃ物足りなくなってきたのかもかもしれないわ」

「……。待ってメリー、それよ」

ピンと来た。よくよく考えれば、作り物への関心が薄くなつていった時期と、秘封倶楽部活動が始まった時期が一致していた。

そりやそうだ、メリーのおかげで御伽噺に勝る体験を何度も行えたのだ。境界を乗り越え、幻想のような現実をこの身で経験できるとあつては、人工的な娯楽に興味がなくなつて当然である。

「なるほどね、つまり蓮子は私なしじゃ生きて行けない身体になつてしまつたと」

「ナチュラルに心読まないでくれるかしらメリー……。でもいいなあ、どうせ異能を宿すなら、メリーの目が欲しかったわ。もし手に入れられたなら、泣いて喜ぶと思ふわね。」

じいーとメリーの輝く瞳を見つめる。彼女はその双眸を瞬かせた後、苦笑した。

「そんなにいいものじゃないわよ、蓮子。たしかにオカルト関連ではこれ以上の力は無いとは思っているけど、それ以外じゃ無用の長物よ。」

「そんなもんなの？」

「ええ。それこそ、こんな映像が面白く感じられる程度には、ね。」

常人がどれだけ見ようと思っても見れないモノを垣間見れる瞳。それを持つメリーは、どこか遠くを見るような表情で、カレイドスクリーンに視線を戻した。

## 大罪人

風が吹く。

心地よい春の風が、咲き誇った花の香りを運んでくる。緑と赤、そして灰色に埋まる地上は、時間の流れが極端に遅く感じられる。

生憎の曇り空だが、こんな場所にはお天道様よりもどんより顔をした天候がお似合いかもしれない。もとより今私がいる場所は、頭の中に『常識』というメモリが欠片でもあるなら近寄ろうとも思わない土地なのだ。日差しだなんて眩しいものはもつたいない。

ゆつたりと仰向けに寝そべり、鼻歌を奏でながら目を閉じる。暗闇に染まる瞼の裏側に、様々な情景が映し出される。今まで生きてきた中で、忘れずに覚えていた記憶が次々に映し出され、消えていく。どうも碌でもないものばかりだったが、ずぼらに私らしいといえれば私らしいのかもしれない。

寝そべったまま背伸びをする。いつも通り一眠りでもしようと考えて寝転がった訳

だが、どうも肝心の眠気が訪れない。普段なら1分やそこらで夢の世界へ旅立つことが出来るのだが、現在の天気とは裏腹に自分の脳内は快晴マシマシのようだ。

これは困った、と心の中で愚痴る。すぐに寝るつもりだったためほぼ手ぶらであり、暇を潰せるような物を一つも持ってきていない。こんな事なら酒でももって来るべきだったか、と思つたが後の祭り、後悔先に立たず、だ。

仕方なしに目を開き、再び灰色の視界を享受する。さてどうしようか。結構な頻度でこの地を訪れる香霖堂とこの旦那の影は見当たらない。1人の時間が好きな自分だが、必要以上に干渉してこない、それでいて話の合う店主のことは割かし気に入っている。昼寝しているときは無理に起こさず、起きているときは暇つぶしの相手になってくれる、ありがたい知り合いだが今日は店に引きこもっているようだ。

それならば、と反動を付けて立ち上がる。立つた拍子に咲いていた花を潰してしまつたが、気にせず歩いていく。

え、5分ほど歩くと、古びたボロ小屋が視界に入った。4畳あるかどうかという狭さに加え、

雨や隙間風をありのまま受け入れる建築設計は、これを建てた人物の性格をうかがい知ることが出来る。

台風が来れば間違いなく大空へ舞い上がるであろうこの小屋は、実を言うと3代目と聞いている。先祖らは自然界の力によりご臨終されたとのことだが、私は依然見たそのボロ小屋とやらを船に乗せ、彼岸まで運んだ記憶が無い。ということは、今も風に乗ってどこともいえぬ天彼方を旅している可能性もある。

かの命連上人は生前、立派な蔵を飛ばしたと聞いている。それならば、それより小ささと年季が売りの建物が飛んではいけない理由などない。次の休みには未だ空を飛んでいる（かもしれない）小屋を求めて、久々の現世観光と洒落込むのもまた一興だ。

……と、下らないことを考えながら3代目の小屋の戸をノックする。もちろん、慎重に、だ。強く叩いて崩れてしまったら、この建物の住人のことだ、いい笑顔で修繕費を請求してくるだろう。どうしようもない災害はまだしも、自分の不注意による失態はなるべく減らしたいものである。

ただ、今回に限っては、私の気遣いも意味の無いものになった。

返事が返ってこない。いつもなら一泊遅れて聞こえるめんどくさそうな声が、未だに私の耳に入ってこない。

戸に少しだけ力をこめると、何の抵抗もなく開いた。お邪魔しますよ、と心の中で呟きながら中を覗くと、やはりというべきか、住人不在だった。『ダウジング』という棒

を両手に持ちながらの宝探しを続ける妖怪ネズミの影も見当たらない。

あの店主ほどではないにしても、たまにこの土地に訪れているはずだが、今日は運悪くネズミも、件の店主もここに用は無かったようだ。

ため息をついて、扉を閉める。さあ本格的にやるのが無くなった。せつかく足を伸ばして来たのだから、何もせずには帰るのは勿体無いというものだ。

だが、眠気も訪れず、酒も無い。煙草があればまだ良かったがこの辛いご時世、勤務先も火の車状態で私の日々の頑張りが中々給料という形で反映されないのだ。酒はともかく、完全に嗜好品の域に入る煙草はおいそれと手を出せるものではない。

「はあ……せめてもう少し給金が高ければ煙草も気軽に買えるんだけどねえ」

「給料が上がったとして、結局使い道はそれですか小町」

「当然じゃないですか四季様……」

……ん？

いつもの癖で返事を返し、数泊遅れて我に帰る。後ろから耳に届いた、かなり聞き慣れているあまり聞きたくない声。ゆっくりと後ろを振り向くと、そこには予想通りの人物が立っていた。

自分より頭一つ以上低い身長。緑髪の上には、青色と金色の2色をベースとした冠が飾られている。青と黒で上下に分けられた姿には緩んだ箇所が一つも無い。いつも仕事場で手に持っている棒が見当たらないことから、どうやら現在はオフのようだ。事中とプライベートの姿にほとんど差が無い上司の、数少ない見分け方である。

とまあ、そんなことはどうでもいい。重要なのは今、私の少ない自由時間に彼女と出会ってしまったことだ。

「偶然ですがちょうど良かったですね。仕事の中では時間的に言えなかつたことも多いので。少し話に付き合っていただけませんか、小町？」

質問系ではあるが、有無を言わせぬ厳かな口調とどこまでも真っ直ぐな瞳。それは、私の時間が彼女の説教によって綺麗さっぱりつぶれる事を意味していた。

ぼつ、と顔に水滴が当たる。上空を見上げると、先ほどよりも少しだけ色が濃くなつた雲が一体を覆っていた。

「昏くして 雨降りかかる 曼珠沙華 . . . . . てねえ . . .」  
暇の潰し方を考える必要は無くなつたみたいだ。悪い意味で、だが。

無縁塚、という土地がある。

幻想郷に住む人間にとって、危険度の高い場所の一つとして恐れられている、魔法の森。そこを通り抜けて再思の道のさらに先まで進んだ所にある、小さな共同墓地である。

あらゆる縁を失い、最後まで死に場所を求めて彷徨った人間がたどり着く場所……などと言われているが、正直幻想郷の者はここに来るまでに妖怪の餌食となることがほとんどのため、(嫌な言い方になるが) 富士の樹海といった自殺の名所というわけではない。

それでも放っておけばこの場所は人の遺体で溢れる事となる。理由は簡単。その者は幻想郷の住人ではないからだ。

外の世界で孤独となり、世間から忘れられ自ら命を絶った人間。その骸が幻想入りを経て、この土地に降り立つ。

元々境界が薄かったこともあり、外の世界からの訪問物は無縁塚に集中して落ちてくる。結果、どんどんと死体が増えていき、一時期は山のように積み上がっていたという。妖怪がたまに漁りにはきたが、それ以上の勢いで山は増えていった。

人間側(というには少し怪しいが)が初めてこの異常事態に気づいたのはそんな時



だった。魔法の森で商業を営んでいる店主が新たな商品探索地として無縁塚を選び、訪れたことで現状を理解したのだ。

その店主は店に戻るなりすぐに知人である博麗の巫女と妖怪の賢者の2人にこの次第を説明。幻想郷の管理者でもあった賢者は、今回の事態に今まで気づけなかったことを謝罪し、彼女の責任の下、死体は丁重に埋葬された。

その後賢者は境界の修復に取り掛かったが、短期間での改善は難しく、最低でも100年単位はかかってしまうというとの結論が出た。

結果、定期的に賢者と店主の二人が無縁塚の巡回をし、死体を見つけた場合は埋葬をする取り決めをした。店主としても、巡回中に見つけた品物は自分のものにしていいという条件を貰った為、無縁塚までの遠出に不満は無かったという。

危険な場所である魔法の森の、さらに奥。

今も時折降って来る人間の死体と、それを狙う妖怪。  
未だに修復中である、境界の歪み。

とてもではないが人間がピクニックがてら足を運べる場所ではない。また、妖怪から見ても件の漁り以外には目ぼしい目的を持てる場所ではなく、人気の無い土地である。

よって、こんな場所に来るのはよほどの物好きか単なる馬鹿だけだ。

と、言いたいところだが実は一人、定期的にどこるか頻繁にこの地を踏むものがある。

名を、『四季映姫・ヤマザナドゥ』という。

「ふむ……今回も特に異常は無いみたいですね」

目を細めながら辺りを見渡す四季様を見て、私は軽くため息をついた。

普段の勤務態度に対する説教が終わってから、彼女のルーティーンとなつて無縁塚の見回りに付き合わされてる現状である。私がもう確認したから、と言ったものの彼女は自分の目で見ないと信じていることが出来ない性格ゆえ今の状況となった。

私の貴重な休日潰す悪魔の所業である、と訴えようにも日ごろの行いを盾にされてはぐうの音も出ない。前よりはサボリの頻度が減ったのに（当社比）、揚げ足取りを止めないとは卑劣である。口に出しては言えないが。

四季様は人の行いを正すことに生きがいを感じているらしく、今日みたいな休日を使つては幻想郷に赴き、人妖神問わず説教を行う。相手のことを想つて、ということとは分かるが、いきなり現れて日々の生活をダメだししてくるのだからたまらない。彼女の評価がどうなっているのかは、名譽のためにあまり触れないでおく。・・・まあ、善人である、ということは皆が口を揃えて言っている。

そんな彼女が無縁塚での死体の山にまつわる事件を聞き、放つておくはずが無い。すぐに妖怪の賢者に直談判し（この時の賢者は若干引いていたという）、幻想郷に赴く際には無縁塚を通るようにして巡回の一角を担うことに相成った。

・・・それから何十年以上に渡つて、必ず無縁塚を通るのだから恐ろしい。地味に私の職場ともろ被りしているため止めて欲しいのが本音である。船をだらしなく漕いで欠伸をしながら正面に向き直つたら冷たく笑う四季様のご尊顔とご対面である。しよつちゆうあるのでほんと勘弁して欲しい。死神がシヨック死なぞ末代までの恥である。

「本当に勘弁してくださいね。私も首にしたくはありませんので」  
ジトつとにらんでくる四季様の圧が怖い。

「いや、私のためを思つてということとは分かっているんですけどねえ。中々癖というか個性というものは直せないものでして」

「あなたがここを首になったら、ほかに雇ってくれる所などないですからね。」

「そんなに酷くはありませんよ!? それにもしもの時は未来の夫の元に永久就職しますって。安月給で鍛え上げられた節約術と抜群の家事スキルを兼ね備えた優良物件っぷりを見せ付けて射止めて見せますって!」

「無理ですよ中身が欠陥住宅ではないですか」

「四季様今日はやけにキツク言いますね!」

四季様も結婚していない癖に、という言葉は寸での所で呑みこんだ。場違いな八つ当たりであることは目に見えているし、今後の休暇を減らされたらたまらない。あ、そもそもこの人生がいと結婚してたわ。

頭の後ろで両腕を組みながら、ぶらぶらと歩いていく。私も四季様もオフのためか、だらけた態度に関しては何も言ってこなかった。その分、仕事中の怠慢に関しては耳にタコが出来るほど言われるが。

無縁塚周辺を回り、最初にいた位置に戻ってきた。紅色に咲く、彼岸花。いくつもあがる灰色の石、墓石にはこの地に眠る人間の名前が刻まれている。身に着けているものから名前が判明すれば一番良いのだが、それすら無い無縁の者も少なくない。

だが、埋葬されるだけマシな方だ、とも思っている。妖怪の牙にかかった人間は、何

も残すものが無いのだから。

元々無縁塚に彼岸花は咲いていなかった。自然がありのまま存在する、何の変哲も無い場所だったのだ。その景色が紅く染まり始めたのは、人が埋葬されるようになってからだ。

埋められた人の無念が形なつて現れたのか。自分はここにいるんだ、ここにいたんだ、という主張か。

そんな考えが出来ればいいのだが、生憎私はリアリストだ。人が埋まったことで土の成分に少しだけ影響を与え、彼岸花が咲いた可能性が高い。

やるせない、とは思ふ。ただそれだけだ。

「小町」

欠伸びながら歩いていたら、急に呼び止められた。声の主、四季様を見ると、彼女の視線は私の目を捉えていなかった。地面、正確に言えば私の足付近を見ていた。下に目を向けると、私の右足が彼岸花を踏んでいた。

それを見てから視線を上げると、今度はしっかりと目が合った。

「・・・四季様はこういうことを気にするタイプですか？」

「そうですね。今のあなたの行いに思わず声をかけてしまう程度には」

その目には非難の色は無かった。こちらの意見をしっかりと聞こうとする・・・そん

な色をしていた。

まずは相手の話を聞いてから説教をする、それが彼女のスタイルであることを理解している私は、それなら少し語ってみるかと考えた。

「そうですね・・・少し前に同僚にも言われたことがあるんですよ。あまり仲良くないやつですがね。『花を踏むな。この一輪にも命が宿っているんだぞ』ってね」

「ふむ」

「私は思わず笑ってしまいましたよ。何が可笑しいんだ、って問い詰めてくる同僚はずっと、雑草を踏み潰していたんです。その事を指摘したら、それ以上何も言ってきたんです」

今でも、言葉に詰まったあいつの顔が鮮明に浮かぶ。

「人の死に深いかかわりを持つ死神のことを殺し屋だと非難する人間にも会いましたね。その人間は、平気で近づいてきた蚊を叩いて殺していましたよ」

嫌悪の目を向けてきた人間の顔がすぐに頭の中のスケッチに描かれた。

「結局、自分で勝手に線引きをしているだけなんですよ、私も含めてね。どこまでは殺して良いか、どこからは殺してはダメなのか、その基準をね。それを自分で持つ分には構いませんが、人に押し付けるべきではないんじゃないですかね？」

「しかしそれでは殺人をしてもいい、という考えを抱く者が野放しになる危険があり

ます。それはどうですか、小町？」

こちらを見上げる四季様の顔は、こちらを試すような目をしていた。恐らく彼女の中では今の質問の答えが出ているのだろう。なら、答えあわせといこうじゃないか。

「簡単な話です。そのために法があるんですよ。法を守りつつ、自分の中で線引きをして生きていく。自身の線引きを優先して法を破るものを罪人とする。それなら別に良いんじゃないですかね」

「なるほど、小町の考えは理解できました。責め立てたことを謝罪します」

いや責め立てられてなんていないんですけどね、と思いつつ頭を下げてこようとした四季様を止める。

本当に真つ直ぐな人だ、と感じる。自身の言葉と行動に絶対の自信を持ち、何者にも染まらない。こんな人だからこそ、閻魔大王に任命されているのだと納得できる。あと小さじ一杯の優しさでもあれば言うことないのだが。

「いえ、いいですよ。でも四季様も大変ですよ。自らが法になって罪を裁かないといけないんですから」

「何言ってるんですか小町？」

話を弾ませようと先ほどの話題を取り入れて振ってみたが、なぜか投げたボールが相手で止まってしまった。四季様を見ると、真つ直ぐな体勢のまま声を発していた。

「人は法にはなれませんよ。私は、私の中で決めた基準に従って、魂を、罪を裁いているだけです」

「・・・えーと、それなら四季様は結構な罪人になっちゃう気がしますね。ハハ・・・」  
「当たり前ですよ」

先ほどの話を取り入れるどころか埋まっていた不発弾ごと掘り返されたような発言に、詰まってしまった。

笑って会話を誤魔化そうとしたが、当の四季様自らがその爆弾を事も無げに踏み抜いた。

いつも通りの、真っ直ぐな姿で。何の疑問も抱いていない、自身の発言に絶対的な自信を持って。彼女は言い切った。

「地獄における最大の罪人は、この私ですから」

彼女は、四季様は少しもブレない体勢で、静かに目を閉じた。





## 取り残された場所

日本は言う国は北海道、本州、四国、九州に大小さまざまな島が合わさって一つの形を成している。昔の日本は世界の国々と比べると、特別広い国土を持っているわけではない・人口は多いが突出してはいない、という取り立てて恵まれた国ではなかった。

そんな日本が長い間、世界に誇る経済大国、技術大国と呼ばれたのには当然理由がある。

戦後の驚異的な復興に重なるように起こった、高度経済成長期。重化学工業分野での技術革新、国内市場の拡大、為替変動による輸出への追い風、有能な内閣による経済改革……。

上げればキリがないが、様々な要因が重なり合ったことで日本の景気は回復どころか過去にないインフレ度合いを見せた（バブルというさらに大きな山については、ここでは割愛する）。

待っているだけで山のように入ってくる受注。働けば働くだけで色のついた残業代。当然のように行われる事業拡大。

それは、焼け野原しかなかった十数年前とは天と地ほどの差、いやそもそも比べること自体が失礼に当たるといふほどの違いがあった。

働けば働くだけ金銭的に豊かになっていく生活。子供の頃は米を食べることも困難だった自分が、今では和食にするか洋食にするかをその日の気分で決めることが出来る。子供のときに夢見ていたマイホームも、決して夢ではない。

より幸せに、幸福に生きるために人々は働き続けた。景気、改革が追い風となりさらに好景気、給料増加に結びつく好循環。比例して、『24時間はたらけますか?』というフレーズが特徴的なCMが流行るほどに残業時間も増えていった。

どこまでも豊かに、どこまでも幸福に。

仕事に人生を費やす人々が飽和状態になったその日、今まで日本が積み上げてきたものが、一つの形となって示された。

国連調査による世界各国の幸福度調査。

先進国最下位、『日本』。

確かに、物資面、経済面では世界有数とまで言われるほどに発展を遂げた。だがそれ

は、日本人が取り立てて優秀だから、というわけではない。

元々全人類がホモ・サピエンスという一つの括りの中にある。個人単位で天才が生まれることはあるが、1カ国全てのヒトが秀才であることなどありえない。もし日本という島国が秀才軍団であったならば、当の昔に地球の中心となっていたはずだ。

では何故か？

簡単な話である。日本人は、自らの時間を犠牲にして、会社に貢献し続けただけなのだ。1年2年だけならまだしも、10年単位で長時間労働に勤しむ者が多く、その代償は、過労死などといった形で返ってきた。

貯金が貯まっても、それを自分のために使う時間がない。

金銭的に豊かになったはずの日本は、感情面で幸福を感じることが出来なくなってしまうのだ。

日差しが暑い。

地面を焦がす太陽は、雲という遮蔽物がないこともあり、惜しみなく地上に熱を送っ

ている。

季節は春。本来であれば母性を感じさせる日の光が、どことなく厳しさを覗かせるのはこの土地だからだろうか？

私、マエリベリー・ハーンは頬を伝う汗をハンカチで軽く拭きながらうんざりとした気持ちで歩いていった。

53分間の仮想体験を経てたどり着いた場所は、私達の住む京都とは何もかもが違っていた。

駅を出た瞬間に、身にまとわり付く熱気。3月だと言うのに熱さを感じる原因は、少し前まで京都にいたことが挙げられる。緑地運動にも取り組んでいる京都は、アスファルトの地面を少しずつ減らして合成土壌を地に固める計画を順調に進めている。

それに比べ、東京はそんな大掛かりな工事をする予算など存在せず、昔の町並みのまま時が止まっていると聞いていた。

訪れてみて初めて、なるほどと思う。灰色だらけの地面に、どこまでも高く建てられた鉄の箱。かつて栄華を誇っていたという都心は、地方都市ほどの人口ほどしか見受けられない。早歩きで道を行くサラリーマンやOL、少々奇抜な衣装をした同年代の若者もおり人自体はそこそこののだが、町全体に活気が感じられない。

田舎のような、人が少ないながらも穏やかさを感じた場所とは違う『何か』を感じて

いた。

「ゴーストタウン……ってわけでもないのだけれど。建物は多いのに都会と言う印象を受けないわね」

「言いたい放題言ってくれますねえメリーさんや」

土地の感想を呟いていると、横から抗議の声が聞こえた。いつも通りの服装に身を固め、帽子を外して自身に風を送っている私の結婚相手（予定）、宇佐見蓮子である。

自身の故郷のダメだしをされた所為か、彼女からはどこことなく不機嫌という名のオーラが漂っている。そんな蓮子もまた可愛いのだが。

「蓮子はよくここで過ごせてたわね……。3月でこの暑さとか私にはちよつとキツイわ」

「暑さだけじゃないわ。今から1ヶ月前は氷点下近くよ」

「ええ……。急すぎるわね。暑さと寒さで相殺することは出来ないのかしら。それなら1年中過ごしやすくなるのだけれど」

「メリー絶対田舎居住に向いてないわよ……」

呆れた表情を向けてくる蓮子を視界の端に収め、一步步アスファルトの地を踏みしめていく。

スマホで確認した限りでは、気温自体は東京京都に差はあまりない。むしろ、若干で

はあるが京都のほうが高くくらいだ。それなのに、身に感じる熱量はこちらの土地が多く、強い。アスファルトが主な原因だろうと推測を終えているが、理解が出来たところで納得できるかどうかは別である。

今回、私達2人がここを訪れたのは秘封倶楽部活動のため、ではない。

お彼岸、という日本の風習のために春休みを使って実家に帰る蓮子。その付き添い兼蓮子のご両親への早めの挨拶をするために、私も便乗した形である。

ここでいい印象を見せることが出来れば、また外堀を埋めることが出来る。無理に蓮子本人を習い続ける必要は無い。周りから攻め立てるのも一種の常套手段である。

それに初めての訪問となる東京という土地自体にも関心があった。未知なるものへの興奮はオカルトであろうとなかろうと変わらぬ。降り立って1時間もしないうちに気持ち急降下してはいるが。

改めて周りを見渡す。

昔は当たり前だったという、大型店舗が立ち並んでいる。1つの建物に数十もの店を詰め込んで経営することで集客力を高めるといふさかさかレトロな方法。昔ならいざ知らず、現在の人口数を鑑みると時代にあっているとは言いがたい。

閉鎖された小さい建物を彩る生長した植物。暗い緑色をしたそれらは、どこことなく

『自然』ではない。

「……そういえば、まだ言つて無かつたわね。メリー」

建物を観察しながら歩いていたとき、思い出したように蓮子が話しかけてきた。

横に目をやると、先ほどまで団扇代わりにしていた帽子を被り、不適な表情で笑つて  
いる。かっこつけたがる、彼女の癖の一つである。

帽子に片手を掛け、蓮子は静かに口を開いた。

「時代に取り残された土地、『東京』にようこそ。メリー」

幸福度最下位だった日本が変わる切欠となつた出来事、遷都。京都に首都が変わつた  
ことを切欠に、日本は本格的な労働改革に取り組んだ。

結果、下がった給料を補つて余りある精神面での幸福を国民は手に入れ、わずか十年  
で日本は精神の景気が回復した。幸福度ランキング最下位を脱出し、少しずつ、確実に  
順位を上げていったのである。



京都の動きに追従するように広がっていった改革。それを受け入れ切れなかった場所があった。

過去の栄光を忘れられなかった土地、東京都。

有名な会社が軒並み京都に移住し、ベットタウンと化した現状でなお、過去のやり方で、発展してきた昔ながらの方法を続けた。もう一度、輝くために。

快晴の日の下で笑う蓮子。その姿は影がかつて、日中なのに少し見えづらかった。

## 快晴の下の星読

懐かしさを感じる。

故郷の地に降り立って1時間。寄り道をしながら私は、私達は都心から少しずつつ離れていく。

最盛期でも東京都の4割ほどは地方都市寄りの田舎だったと聞いているが本当だろうか？歴史の脚色は世の常であるが、東京の発展と衰退、そして変異の軌跡までもが幻ではないかとさえ考えてしまう者もいる。

時代の隙間に真実を隠したのは政府か、都知事か？はたまた真実なのか？過去を知るときに人は写真や映像を見るが、その真偽を確かめることは出来ない。その写真は改竄されたものかもしれないし、映像は捏造されたものかもしれない。どれだけ証拠を集めて積み重ねようと、人は『過去』を視ることは出来ないのだ。

それが一般人であるなら、だ。

一枚の写真を空に向かって突き出す。太陽の光を隠すように掲げられた、切り取られ

た風景。道路と家を遮るように建てられたブロック塀。その内側には小さいながらも庭が広がり、新緑色を抜げる木が数本立っている。

車道の反対側に見えるのは、公園だろうか。小さな子供が元気いっぱいという様子でジャンプしており、公園の端にいる親が苦笑しながら見守っている姿が映っている。

その光景の4分の1ほどが黒く、暗く描かれているのは、風によって舞い降りた葉が、タイミングよくレンズを横切ったからだろう。

私の人生において、見慣れているとは言いがたい緑に囲まれた景色。緑化運動を経てなお、関東や中部、関西では珍しい優しさを持つ土地の写真。

一度、見上げていた視線を水平に戻す。私の目に映る景色は、未だ空を靡く写真とは似ても似つかぬものだった。

碁盤のように綺麗に区切られた道と、その目に合うように建てられた数多の一軒家。以前は東京に家を構えるなど一部のエリートしか叶わなかった夢だったらしいが、現在は所狭しと言った具合で乱立されている。土地の価格が現在進行形で下がっていることもあり、関東周辺の者が通勤に便利なこの土地に住居を移す事例が後を絶たない。

小奇麗に整備されたこの場所は視覚的に鮮やかな色で構成されている。住む人々が思い思いの願いを家の形、色に反映している様は、一人一人が自らの願望を目に見える

姿で具現指させた展示会とも受け取れる。

無駄を極力排除したような町並みは一種の芸術である。有力企業が出て行き、活気を失った都心より郊外のベッドタウンの方が清潔だというのだから面白い。

無駄なものはないのだから、当然ではあるが敷地を食う公園はない。1本あるだけでも土地の面積を埋め、見晴らしを悪くする木々もない。

信じられるだろうか、この場所がまさに、写真に移っている場所であるなどと。

様変わり、などというレベルではない。変化した場所よりも変化していない場所を探すほうが遥かに難しく、名残や面影といった単語が欠片たりとも出て来ない。異世界と入れ替わったと言われたほうがまだ納得できるくらいには、何もかもが違う場所。

それでも、私はここだと確信できた。今年でやつと二十歳を迎える年齢ゆえ、大昔の風景など子の目で拝見したこともなければ、手に持つ写真が加工されているものか確かめられるわけでもない。それでも私は、私だけは分かるのだ。

写真を再び掲げる。大昔の記録を映す、1コマの映像に映る青空と、今という時間に存在するどこまでも広がる青空。

二つの青を、重ねるようにして見比べる。太陽の光を隠すように頭上に挙げた一枚のパノラマを見て、目を細める。焦点を合わせるように写真の、もつといえは写真の青空のみを注視して見つめる。

見続けて、見続けて、徐々に浮かび上がってくる粒子のような光を確認する。瞬きをして消えない『ソレ』を、私の目で視つめる。その行為を行うことで、一瞬で視界に表示される情報が浮かび上がる。それは写真の風景が示す、日付と場所だった。

一旦写真を持つ手を下ろし、空を見上げる。眩しい輝きが目に降り注ぐが、急いで写真を仕舞い、手で太陽を隠す。少し光が漏れるが、この程度であるなら問題ない。無視するように天を仰ぎ、青を見つめた。

同じように浮かび上がる光を掴むように、かき集めるように見渡して情報を浮かべる。出てきたのは、今私が立つ場所の場所と日付。

ため息をついて、顔を下げる。上を見続けた所為か首に軽い違和感が生まれたのでぐると円を描くように動かす。何度か繰り返した後、軽く背伸びをして身体全体の調子を整える。少し体は楽になったが、精神的には余裕を持つことが出来なかった。

私を持つ特異な目を通して得たもの。今まで一度たりとも疑いを持ったことのない異能の力は、今得た情報が真実であることを教えてくれる。だからこそ、ため息が出る。何度視ても、二つの場所は一言一句違わない。食い入るように見ても、片目をつぶってみても、二つの空を重ねても、文字に修正が起こる気配はない。

高度経済成長期は十数年で様変わりしたのだ、その2〜3倍の期間があるなら面影を消し去るほどの変化など容易いだろう。

この町並みを見て生まれ育ったためか、変な感慨というものはある。だが、それだけだ。昔は昔、今は今だ。オカルトに絡まない事象であれば、大抵のことは受け流せることが出来る。

もう一度、空を見上げる。光と共に表示される数字と文字。私は黙ってそれを見つめた。

月と星が見えないのに、時間と場所が分かる。

自分の目の変化に気づいたのは、マヨヒガでの幻想的な体験を終えた2週間後だった。非日常から帰還した私達が過ごす、平穩で平凡な日常の最中に何気なく空を見上げた。そのままぼーっと空の青色に思いを馳せていたら、視界にキラキラと点滅する何かが浮かび上がってきたのだ。

初めは太陽の影響かと思っただけで視線をそむけるだけで終わった。しかし翌日、曇り空を見上げた際にも同じ現象が起こったのだ。

訳が分からずそのまま空を見上げていると、粒子がどんどん散らばるように増えてい

き、やがて見慣れた数字が浮かび上がったのだ。

驚いた、なんものではない。星々と月が輝く晴れの夜、という条件化でしか使用できなかった能力が今具現化しているのだ。その日の内に何度も試し、翌日以降も時間をずらして空を見続けたが私の目はことごとく今という事象を正確に読み取り続けた。

明らかに能力が進化している。この事実をすぐにメリーと共有し、メリーの目についても尋ねてみたが彼女の方は特に変化なしのことだった。

原因を考えるとするなら、八雲さんとの邂逅が挙げられる。しかし、それなら何故私だけだったのか分からない。どちらかと言えば自分よりもメリーのほうが、八雲さんとの関連性がありそうなだけに謎である。

それから半年、私の目はそれ以上の進化も退化もせずに時間と場所を表し続けている。快晴の日も、大雨の日も、吹雪の日も、意識を集中させれば粒子と共に私がいる事象を私に教えてくれた。

……まあ、自分の能力が進化したからといって、日常に変化はなかったのだが。

仮定の話になるが、メリーの能力が進化すれば秘封倶楽部活動に大きな影響（いい意味で）を及ぼしていただろう。オカルト関連の活動においては、メリーの境界把握が絶対条件だからだ。ノーヒントでやるなど、鳥取砂丘から砂金を見つけることに等しい

が、彼女の目があれば話は別だ。

もし・・・もしもだ。境界を把握するのではなく、『境界を操る』ことができればなら、幻想の地にいた八雲さんの能力が手に入ったなら。

無い者ねだりということは分かっている。それでもその先を、さらなる力を求めてしまうのは人間の性だろうか。だがそこまで考えて、首を振った。八雲さんが自分の力を説明してくれたときに私は思ったはずだ。

その力は個人が持っているものではない、と。

もつと秘密を追い求めたい気持ちはある。境界を自由に暴きたい気持ちもある。

それ以上に、メリーが遠いところに行ってしまうような恐怖がある。

無鉄砲で後ろを向かずに秘密を追い求める私の、絶対に超えたくない一線。メリーと一緒にでなければどんな冒険も色あせたものになってしまうのだ。

秘封倶楽部は2人で1つなのだ。彼女の手を取らないまま行う活動など、考えたくない。

ふふ、と笑みがこぼれる。なんだかんだ、自分もメリーに依存しているみたいだ。普段の彼女の行動、言動はアレだが、私もメリー無しでは生きていけないのかもしれない。



「どうしたの蓮子？」

前を歩くメリーから声が掛かった。珍しそうに辺りを見回しながら観光兼観察に浸っていた瞳は、私に向いている。思った以上に独白の時間が長かったみたいだ。

何でもない、と言いつつメリーの横に並んで歩き始める。一步一步ゆっくりとした足取りは、今という時間を大切にしたい気持ちの表れか。

額に流れる汗を拭きながら目的地・・・私の実家に向けて歩を進めた。

「げっ・・・」

「会って一言目がそれとは、随分な身分のようですね小町」

嫌な人物が来た、という感情丸分かりの声が出てしまった。

目の前に立つのは、見慣れた自分の上司。どうやら今日が休日のように、自分の職業を表す道具一式を外している。そしてこれまた見慣れた光景だがここ、三途の川を通つて此岸へと赴こうとしている。

幸い、今日は『珍しく』真面目に仕事をしていたせい、出会つて早々仕事に関する小言を言われることはなかった。態度に関してはご愛嬌で済ませて欲しい。割と切実に。

そんな彼女は今日も今日とて幻想郷に赴くのだろうか。人のことに口出しする趣味はないが、よく続けられるものだと思う。貴重な休日を他人のために使うなど、私には到底出来そうにない。

「考えが顔に出ますよ、小町」

「おっとこれは失礼しました」

怠惰で邪な思いが伝わったのか、四季様が鋭い目で見つめてくる。私がどんな気持ちでいようと、仕事をしっかりとしていれば長時間の説教はないことがせめてもの救いだ。

「では四季様、今回も幻想郷までですか？何ならお供しますよ」

「自然な流れでサボろうとしないで下さい。それに今回は幻想郷には行きません」

「あれ、じゃあどこですかね？地底や天界ですか？」

「いえ、少し外の世界までです」

「ああ、そうですか……」

……はい？

いつも通り流そうとして、思考が急停止した。あまりにも予想外の行き先を聞いたせいか、脳が言葉の意味を理解するまでに時間が掛かった。

慌てて呼び止めようとしたが、気づいたときには、彼女の姿は既に遠くにあった。

## 19路に乗せた夢

パチン、と小さい、それでいて良く通る音が部屋に響く。

二階建ての建物の一室で座る二人の少女。一時間以上前から正座を崩さないのは私、宇佐見蓮子だ。もう一方、女の子座りをしながら静かに俯いているのは、私の相棒であるマエリベリー・ハーンである。

全開の窓から流れてくるそよ風が、私たちを優しく撫でる。空調が効いた部屋においても、その五感への刺激は私に涼しさを届けてくれる気がする。外とは打って変わって快適な空間なのだが、私の顔には何故か汗が張り付いていた。

勝手見知ったといえる、部屋の中。今いる場所は、自分が高校時代まで過ごした実家の一人部屋だ。必要なものは大学進学と共に全て京都に持って行ってしまったため、非常に殺風景なものとなっている。子供の頃に買ってもらったぬいぐるみや、昔好きだったアーティストの電子ポスターといったものくらいしかない。

そしてもう一つ、東京においていったものが、向かい合う私たちの間にある。

櫃、と呼ばれる木で作られた正方形の形をした物体。4本の足で支えられているその上面には、かつて栄えた都の道のように縦横に走る黒い線がある。本格的なものであれ

ば日本刀に漆を浸して線を刻むらしいが、こちらは生憎量産品である。櫃と言っても新櫃（大まかに分ければ松竹梅の竹にあたる）であり、黒い線も機械の力を借りたものだ。この竹ランクでも数万円近くはしたのだが、松ランクを買おうとすれば数百万〜数千万は掛かるため手が出ないというのが現状である。

櫃に描かれた黒い線。その線が十字に交わる部分に黒と白の石が置かれている。多数に置かれたそれは複雑怪奇な模様を描き、19路の迷宮を彩る。

### 『囲碁』

その歴史は古く、2000年以上前に中国の地で生まれた。その時は今のようなルールではなく、天文学・占星術を極めるための道具として生まれたと言われている。碁盤を広大な宇宙に、石を無数に散らばる星に見立ててこの世の理を追い求めようとしたのだろう。

7世紀頃に日本に伝わったのだが、その時には現在ののような対決、対戦としての基盤が完成していたという。すぐに貴族の間で人気となり、かの紫式部や清少納言もたしなむほどには広まったとされている。

暫くは高貴な競技だった囲碁が、一般人の手に渡ったのは戦国時代頃の話となる。より広域な地を囲った方が勝者となるのが囲碁のルールだが、その性質が領地争いに明け

暮れる戦国武将、武士の間で流行したのだ。戦国武将が、碁の強い庶民を招いて対局をするという光景は珍しいものではなかったという。

普遍的となった囲碁は江戸時代になっても普及し続け、徳川幕府も手厚い保護を推し進めたことにより、今日に至るまで競技として存在し続けている。

もちろん、文化断裂の危機は幾度となくあったと言われている。一番大きなものは、100年ほど前にあった『AIショック』だろう。

当時、囲碁界最強と謳われていた韓国のプロ棋士がいた。囲碁大国四天王と言われている日本、中国、韓国、台湾の頂点に立つ人物であり、彼に勝つ方法はミスを祈ること、なんて言葉も生まれたほどだった。

そんな彼の元に舞い込んだ依頼が、人工知能との5番勝負だった。当時既にチェス、将棋のプロがAIの前に屈していたとはいえ、9路盤の二つと違い、囲碁は19路盤でルールも複雑である。当然ながら囲碁AIの普及も遅れており、下馬評ではプロ棋士の5戦全勝が大半を占める結果となった。

だからこそ誰も予想していなかった。プロ棋士1勝、AI4勝という惨敗に終わるなどとは。

AIの碁は、プロの誰もが納得する、好手の連発というものではなかった。この時は悪手、禁忌とされていた手を平然と打ち、それでいて圧勝するという悪夢のようなもの

だったのだ。

現代の常識に照らし合わせれば、間違はなく自分が優勢、有利な形なのに冷静に計算をしてみれば何故か自分が悪い状況という、得体のしれない恐怖が最強のプロ棋士を、リアルタイムで観戦、検討していたトッププロ集団を襲った。

1000年以上の月日をかけて築き上げてきた一手一手の評価や善悪を、たった5局で粉々に打ち砕かれた衝撃は、当事者でない私ですら身震いするものに感じた。

自分たちが培ってきたものは何だったのか。自分たちから子孫へ、次の世代へと伝え、受け継いできたものは全て間違いだったのか。人が創造したモノが、人が創造したモノによって奪われるのか。

先の2つの競技が既に敗北していたことで、囲碁に関しては人間が機械に勝る最後の砦という期待、役割があった。それゆえ、絶望はより深いものとなった。

AIシヨックから競技人口は目に見えて減り、最盛期の3分の1にまで落ち込んだ。ここで囲碁業界も尋常ならざる事態だと把握し、腰を上げる。趣味、娯楽としての側面や、社会問題であった認知症の予防としてアピールをすることで、最悪の事態を避けようと奮闘した。

努力の甲斐あつてか、将棋、チェスと並び今日まで消えることなく一つのボードゲームとしての地位を確立しており、プロになればその職業で飯を食っていける体系も無く

ならないまま存続している。

ただ人間の頭脳では頂点を目指せなくなっただけ。その事実が浸透しているだけだ。甘い遅延性の毒が数十年かけて囲碁界を蝕み、昔は誰もが持っていたはずの憧れを、人の夢を奪っただけなのだ。

そんな囲碁の歴史を知って、私が関心を持たない理由はない。誰にも言えなかった私の目と関連性がありそうな起源と、夢を忘れてしまった囲碁界の現状。元々は父親が結構な高段者（アマだが）であることもあり、すぐに始められる環境も整っていた。

手に持つ黒石という星を、碁盤という宇宙に刻む。最初の内はルールも理解できずにいたが、訳が分からなくても楽しかった。

ルールを覚えていくに従い、一つ一つの手が意味を持つものに変化していく。それはまるで、一見無秩序に広がっているように見える無数の星が、他の星の引力によつて存在している奇跡をみるようで。

高校一年生で始め、現在は初段が見えてきたくらい棋力を持つまでになった。不幸（？）なことに碁盤を見つめても私の能力は発動しなかったが、それでも小さな舞台に広大な宇宙を、無限の可能性を今でも夢見ている。



3年間飽きることなく続けてきたし、恐らく今後も、それこそ死ぬまで続けていくことになるだろう。確かに人では頂点に届かないかもしれないが、それでも楽しいのだ。可能性を閉ざされたからといって諦めるほど素直な性格ではない。

もちろん、それは対局でも同じだ。逆転の余地なし、相手が大ポカをしない限りひっくり返らない状況、という場合なら私も投了するが、自分の力でひっくり返せる可能性がある限りは止めない。

諦めるだけなら誰でもできる。わずかな希望があるのであれば、私は決してリタイアをしない。

そう、例えば……

現状の盤面をどう打開できるか、である。

いや待ってメリーさん何でそんなに強いのか？一年前まで囲碁のいの字も知らなかったよね。去年の5月あたりに私が勧めて覚えるまでド素人だったわよね。

いくら問いかけても、メリーには届かない。石が織りなす模様をじつと見つめて、静かに情勢を見極めていた。

読み切ったのか、静かに人差し指と中指で石を挟み、盤に打ち下ろす。パチン、と甲高い音が部屋に響く。

たらりと汗が流れる。勝勢を意識した、言つてしまえば『勝ちました』宣言というべき手堅い手だ。密かに狙つていた石の薄みを補強され、文字通り逆転の芽を摘み取りに来ている。

おかしい。確かに上達するのが早いとは思つていたけど、年末の際はまだ私の敵ではなかつたはずだ。私の棋力が落ちたのかとも思つたが、息抜きに行うネット対戦ではむしろ好成績を収めている。

じいー、と穴が空くくらい盤面を見つめる。ぽた、ぽたと滴り落ちる汗を無視して見つめ続けるも打開策が何も浮かんでこない。進化した私の目で見つめても、場所や時間はもちろん奇跡の一手が表示されない不具合が発生している。月と星を詠む能力はどうした、肝心な時に発動しないとかポンコツ極まりないではないか。

くすつ、という声が聞こえた。顔を上げると、メリーが盤を見ていた視線をゆつくりとこちらに合わせた。そして、静かに微笑んだ。

あれは、勝ちを確信している顔だ。

いらつときた。絶対に逆転してやる。

心に宿つた思いを胸に、私は決死の勝負手を仕掛けるべく、再び目を落とした。

「彼岸参り?」

夕食に出てきた筑前煮に箸を向かわせながら、聞こえてきた言葉をオウム返しのように繰り返す。

テーブルに座るのは私、メリー、そして父親母親の4人だ。私とメリーが隣通しで、真向かいに父、斜向かいに母親がいる。質問は、その母親から発せられた。

え、対局はどうなったかって? ははは、蓮子ちゃん日本語よくワカラナイ。

「そ、今まで何かと理由付けて逃げてたでしょ。お母さん、今年ちよつと都合が悪いからあなたが行つてきてちょうだいね」

につこりとほほ笑む母親が悪魔の笑みにしか見えない。彼岸の作法もへつたくれも分らない私に何頼もうとしているのか。

「いや待つてお母さん、こんな猛暑真つ只中の状況でか弱い娘を放り出すの?」

「あなたが弱いんだつたら世の中全員が虚弱体質よ。それにまだ春だし早朝行けば全然問題ないわ」

「えー……でも作法とか曖昧で」

「スマホで調べれば問題ないでしょ？」

取りつく島もないとはこのことか。さっと父親に視線を向ける。

速攻で逸らされた。一家の大黒柱なため仕方ないが、彼岸については毎年母親に任せていたせいも、強く出れないことがありありと見て取れた。

スマン、という感情を目で送ってきた。いや感情だけでなく言葉で送ってきて。できることなら母親にぶつけてお父さん。

私の必死の願いむなしく、父親は私から目を逸らした。希望なんてなかった。

「すみません」

諦めかけたその瞬間、澄んだ声が部屋一面に響いた。

隣から聞こえてきた声、持ち主はメリーだった。正面に座る自分の母親を真っ直ぐに見つめている。

あれ、もしかして私の援護をしてくれる気なのかな？淡い期待を込めてメリーを見る。

「よろしければ私も蓮子と一緒に彼岸参りに行ってもいいでしょうか？」

悪魔を超えた邪神がいた。

「大歓迎よ！でも大丈夫かしら、蓮子についていくの結構大変よ？」

「ご心配なく。いつも蓮子に振り回されていますので体力には自信があります」

「あらあらうちの娘がごめんなさいね。でも、それなら願いしようかしら♪それにしてほんとに嬉しいわ！こんなに綺麗な子が蓮子の親友になってくれるなんて。それとこの筑前煮本当においしいわ！うちの娘とは大違いよ！」

「本当ですか、ありがとうございます！」

にこにここと笑いながら会話に花を咲かせる2人。ちよつと待つて何で私の悪口で盛り上がっているのこいつら。そしてメリー猫被りしすぎじゃないかしら。ていうかこの筑前煮メリー作ったの？めちやくちやおいしんだけど。私の女子力木端微塵なんだけど。

私と父親そつちのけで会話を続ける2人。その合間、メリーは小さな、小さな声で呟いた。

「・・・ふふ、蓮子のご先祖様にもしつかりご挨拶しないとね♪」

微笑みながら言葉を吐くメリーを見て、言いようのない不安を覚えた。

・・・あれ、もしかしてこの状況、外堀埋められている？

## 二人だけの世界

その夢は、どこか懐かしい感じがした。

そのユメは、どこか知っている感じがした。

ふわふわとした感触。子供が母の腕の中にいるときに感じるような、無防備に体を預けられる心地よさ。

私の足が、一步一步勝手に進んでいく。目的地など分からない私の感情と対極にあるような、確信の籠もった足取り。まるで見えない壁があるかのように、突然直角に曲がったり、大きな半円を描いたり足跡は複雑な模様を描く。

辺り一面、見渡す限りの黒。

もし、足跡が自分の意志で動くようになってしまったら、寿命が尽きるまで彷徨い続けるだろうと思うくらいには、目印もなにもない場所。

ああこれは夢なんだ、と自覚したのはいつだろうか。行き着く先も、いつ醒めるのかも分からないまま、現の裏側で意識を紡ぐ。

怖さはなかった。元々、夜が好きだ。成績くらいしか取り柄のなかった少女時代で、

私が世界で唯一の『特別』な存在になれる時間。太陽が沈み、夜が降りてくる瞬間は当時、何よりも輝かしく、眩しいものだった。

暗くても平気だった。夜空に広がる無数の小さな光が、暗闇を照らす夜の太陽が、絶对的な事象を伝えてくれるから。私という存在がいる場所を、時間を教えてくれる。その輝きは、私を導いてはくれない。ただ、そこに存在するだけ。

だが、それだけで十分だ。何百万年、何千万年、何億年前かの光が、私にスポットライトを当ててくれるから。

じゃあ今は？星の輝きも月の導きも視えない、きつく目を閉じたかのような黒の世界。当然のことながら、時間も場所も把握できない。それなのに、恐怖心というものが一切湧いてこない。

夢と自覚しているから？足が勝手に動いているから？

違う。そんな理由をつけられるものではない。もつと感情的な、心の底から感じられる安心感がある。理屈では説明が付けられない、どこまでも曖昧な何かを私を包み込んでいる。

「……メリー？」

口から相棒の名前が漏れる。何故、この言葉が出てきたのか分からなかった。

どれだけの距離を歩いただろうか？どれだけの時間が経ったのだろうか？終わりは唐突に訪れる。

ずっと歩みを続けていた足が急に止まったのだ。

「うわっ」

自由になった体を制御できず、勢い余って前に倒れてしまった。どこまで自分はどんくさいんだ、と思いつながら立ち上がろうとして、力が上手く入らないことに気づく。

ずっと感じていた心地よさが、より強く私を縛り付けていた。

動くことが好きな自分からはまず出てこない思考が心を埋め尽くす。何なのだこれは。何故こんな私らしくないことを思うのだ。何故この『場所』にずっと留まっていたと思うのだ。

腕に力を込める。反動をつけて立ち上がろうとして、手まで力が伝わらずに両腕が崩れ落ちる。足が、胴が、全身の力を振り絞っても少ししか動かせない。

いや、違う。動きたくないのだ。全身を締め取る安心感が、私の行動を阻害する。

「何なのよ、これ……」

やっと出た声は、消え入りそうなほどに小さいものだった。

ずっと、死ぬまで倒れたままでいたい。



嘘偽り無い感情が心を支配する。私の人生においてこれ以上に幸福を感じることがあつただろうか。

それこそあの人に、幻想という存在そのものに会った時と同じ程の……

と、そこまで考えた時、反射的にバツと顔が上がった。音が聞こえたのだ。長らく自分の声と足音しか受け取らなかつた耳に、久しぶりに入った第3の音。顔だけとはいえ、甘く優しい糸を引きちぎるくらいの意志を湧き立たせた。

目の前に広がる景色は、一変していた。

目に飛び込む、無数の光。私が見慣れた小さな輝きが、漆黒の世界を彩るように視界一面に広がっている。

だが、私はその星の光を見ていなかった。

遠くに浮かぶ、一つの星。所々に白色と緑色の模様をまとつた、蒼色に染まつた星が視える。

ずっと、ずっと見ていたくなるような光景。それは、私の故郷。数十億年という歴史を刻んできた、生命の星。

(これが……私の住む星)

一目見て胸に飛来したのは、そんな当然のことだった。綺麗だとか、美しいだとか、偉

大だとか、そんな安っぽい造形語では言い表せない、どこまでも絶対的な事実が私の心を埋め尽くす。

宇宙が生まれ、星が生まれ、やがて誕生した無数の命。それが広大な海で肌を青く染め、群を成す。海での生存競争に敗れかけた種族は、種を絶えさせないため地上に上がり、適合した。地上の王者から逃げるため、手足を発達させ木から木へと飛び回る者もいれば、王者の牙が届かない、広大な空へ活路を求めるものもいた。

果てなき生命の歴史を、その群像劇をありのまま受け入れてきた星、地球。

見惚れているうちに、一つの疑問が浮かび上がった。

(あれ……こうやって地球が視えるのであれば、この場所はどこ?)

当たり前といえば当たり前の疑問なのだが、非現実的な体験のせいですっかり頭から抜け落ちていた。

その考察を始める前に、再び大きな音が右から聞こえた。

力を振り絞って、顔を捻り傾ける。変に力を入れたせいで少し首に痛みが走ったが、そのおかげか視点をしっかりと向けることが出来た。

視線の先、どこまでも続く無機質な岩肌の先に二人の人物が見えた。

二人は飛んでいた。黒く光る宇宙という海の中を泳ぐように、舞踏会のフィナーレを務める主役のように舞っていた。

片方には見覚えがあつた。特徴的な帽子に、紫と白を貴重とした服と、無地の傘。八雲紫。幻想と共に存在する者。半年前、私達に大きな夢を魅せてくれた人が、宇宙を舞つていた。

彼女の姿を見た瞬間、また胸が高鳴つた。再び会えた喜び、ではない。もつと別の何かが、彼女という存在に対しての感情が、私に流れ込んできた。

八雲さんが、宙を駆ける。縦横無尽に動き回り、もう一人の人物に対して、輝く球体やレーザーのようなものを放っている。

およそ人間業ではない行いだ、彼女であればそれくらいのこと出来て当然、と根拠もない肯定をしていた。いや違う。『私はそれくらい力があることが分かつていた』。

二人は、戦っているのだろうか？もう一人の人物は、飛んできたものを交わしながら、同じように球体を八雲さんに向かって飛ばしている。目を凝らしてみても、霧がかかったように霞み、具体的な姿を捉えることが出来なかつた。

二人共、私のことは全く気にかけなかつた。私などは眼中にないように、そもそも気づいていないかのように二人だけの世界を築いていた。

舞う姿。きらびやかな球体とレーザー。二人を包む、漆黒のソラ。要素一つ一つが主役を張れるそれらは、合わさることで調和を生む。違和感など無い、一つの芸術を作り出していた。

観客の私は、ただ見ていることしか出来ない。動けない身体なのだから当然だが、仮に動けたとしても割って入ることなどするはずがない。劇の最中に、舞台に乱入する無粋な真似ができるだろうか。

この光景は、間違いなくユメだ。それでいて、どこか知っている感じがした。二人が織りなす舞台を、私はただ、じっと目に焼き付けていた。

「蓮子っ!!」

覚醒の時は突然やってきた。意識が深淵から引き戻され、身体が自由を取り戻す。ガバっと顔を上げると、呆れ顔の親友と目があつた。

「おはよう。随分と熟睡してたようね」

既に寝間着姿から着替えているメリーがため息をついた。スマホで時間を確認すると、朝か昼か決めがたい時刻が表示されている。

予想以上に眠っていたみたいだった。昨日、ムキになって夕食後もメリーに勝負を挑み、5連敗を記録するまで夜更ししていた弊害が早速現れたみたいだ。

ついでに言うならまだ眠い。脳がさらなる睡眠を求めているのか、鉛が入ったような感覚がある。

「おはよう・・・メリー・・・ごめん、あと2時間」

「駄目」

慈悲もない一言と共に、強引に布団を持っていかれる。どいて、と言われて部屋の隅に寄ると、メリーはテキパキと自分の布団を片付けていった。昨日同じ部屋で寝たはずなのだが、自身の布団は私が起きる前にもう綺麗に整理されていた。

ものの1分で、布団で占領されていた部屋の床、が広域を取り戻した。

あ、メリーいてくれるとホント便利・・・という考えを頭から振り払う。もう昨日の時点で外堀埋められてる気がするのだ。実家でメリーに頼り切りの姿を晒してしまっ  
てはいよいよ本丸に手がかかることになってしまふ。

「蓮子、実家だからってダラけててちゃダメよ。しつかり体を動かさない」と

「はい・・・お腹すいた・・・」

「はあ……とりあえずご飯食べましょう。もうお義母様が用意してくださってるわよ」  
「メリーごめんイントネーションおかしくなかったかな？」

身の危険を感じてとつさにツツコミが出たが、メリーはどこ吹く風で下へ降りていつてしまった。

一人になった部屋で、深呼吸をする。

変な夢を見た気がする。見知った人物と会った気がするし、ひたすらに何かに見惚れていた気もする。

しかし、思い出せない。情景は朧気ながら頭の中に描かれるのに、霧がかかったように抽象的な光景となってしまう。

とても重要なことだったはずなのに、鍵が掛けられたのか、いくら開こうとしてもびくともしない。頭を抱えて記憶を手繰り寄せようとするが、途中で糸が切れているようでそれ以上引つ張つてくることが出来ない。

うーん、と考えて、ひとまず保留することにした。

後からふとした拍子に思い出すこともあるだろうし、結局忘れたままであればその程度のことなのだろう。

クローゼットに歩み寄りながら、一つ大きな欠伸をした。

## 夢分析

「いいかしら？そもそも人間という生物が行動する際、少なくとも9割は無意識の領域だと言われているの。人は歩く時、ずっと歩いていることを意識してはいないわ。意識の外で足を動かしている場合が多いの。一節によると表層意識の割合は数パーセントで、残り全てが無意識、潜在意識に分類されているという場合もあるわね。その無意識の分野に着目したフロイト氏が唱えるには、夢というのは人の持つ無意識下での欲望、望みが形として表れたものであって……」

ぐてーん、と机に突つ伏す私。寝不足気味の身体にコーヒーをぶち込むことで強制的に覚醒状態を保っているのだが、そのなけなしの努力を無に帰さんとする子守唄が聞こえてくる。

さながら講師のように、すらすらと言葉を紡ぐメリー。伊達眼鏡と指示棒が似合いそうなその姿から繰り出される、聞くものを夢の世界へと導く延々とした講義。自業自得とは言え、睡眠時間をロクに取れていなかった私にとってはかなりキツイものがある。

私よりも高く、それでいて全く耳障りに感じない調和の取れた声。普段であればいつまでも聞いていたいと思うのだが、今ばかりは深い微睡みへと誘う悪魔の囁きとしか感

じられない。

時刻は昼。土曜ということもありゴルフ大会にでかけた父と、親戚の方と食事にてかけた母は未だ帰ってこない。現在、宇佐身家には居間の中央にあるテーブルで対するグロツキーな私と、淡々と説明を続けるメリーの二人だけが残っていた。

さて、何故私がこのような仕打ちに遭っているかと言えば、これまた半分ほど自業自得だったりする。

発端は、目が覚めると同時に内容を忘れてしまった夢についてメリーに話してしまったことである。朝食というにはやや遅い食事を摂った後、ふと口から漏れてしまったのだ。

「そう言えば、明晰夢のようなものを見たのよね。起きたら内容の大半を忘れてしまったんだけど」

という台詞を言った途端、メリーの目がキラリと光るのが見えた。あ、マズイと思ったときには全てが手遅れだった。

精神学を専攻しており、夢に関する体験、関心には一日の長がある彼女が止まる道理はない。自分の考察を見せびらかしたい研究者のように、夢というものに関する説明を始めたのが30分前。それからほぼノンストップで喋り続けられているのだから堪らない。



寝不足で頭が働いていないことを差し引いても迂闊なことをしてしまったと感じる。現に、メリーの講義は一向に終わる気配がない。滅入っている私の姿は見えているはずなのだが、全く気にする素振りを見せずに持論、というか蘊蓄を語り続けている。

沈没寸前の脳で聞いていた部分の話をまとめると、

『太古の昔から、夢というものは神や悪魔と言った、超自然的存在からのお告げであると謳われてきた』

『夢の世界とは無意識が意識に混入してくる』

『夢とは時に、その者が普段から持っている抑圧された願望が現れる場合がある』

『明晰夢というものは、遺伝子にプログラムされた意識のフォトグラフ』

というものになる。うん、さっぱり分かんない。

同じ大学、同じサークルに在籍する私達だが、専攻分野は大きくかけ離れている。

私は超統一物理学という分野を専門として学んでいる。これは21世紀当時、学者を悩ませていた『電磁気力』『弱い力』『強い力』『重力』それぞれの理論を一つにまとめ、統一させたものである。

そう、21世紀では上記の4つの力が素粒子の間で働いていると言われていた。素粒子、つまりはこの世を構成する最小の物質。この謎を解明すれば世の中全てを解き明かせる学者たちは躍起になった。

この世の根源たる力がたった4つから表せる、と一般人は考えるだろうが専門家の意見ではそうはならない。かなり強引ではあるが、彼らから見れば人類の歴史が4つあると言われているようなものだ。どれか一つが正しいのかも知れないし、それぞれの理論を組み合わせたものが真実なのかも知れない。

21世紀終わり頃、彗星の如く現れた赤髪の女性物理学者がこの理論をまとめ上げることになるのだが、それまでは学会は荒れに荒れていたという。

とまあ、いわゆるゆ絶対的な理論の元構築されたものが私の学問であるわけだが、メリーはその対極にある。

相対性精神学。人の精神、感情という曖昧で、相対的な面から物事を見つめる分野。今までサークル活動の合間に何度か教科書、参考書を見せてもらったのだが全く理解できなかつた。

そんな彼女がキラキラした眼で、専門的な知識を織り交ぜつつ暗号を口にし続けるのだ。聞き続けられる人がいたら出会ってみたい。

いい加減眠気の限界も近いので、メリーには悪いけど話を一旦切る方向に持っていくことにする。

「メリーさ、色々な考察を言っているけど、結局の所どれが一番可能性が高いのかな？」

残り少ないコーヒーを口にしつつ尋ねると、メリーはキョトンとした顔をした後思案顔になった。あれだけ語っておいて考えてなかったんかい。

「そうね・・・明晰夢の考察は心の願望説、パラレルワールド説等様々なものが存在するわ。ただ、私が推しているのは『魂の記憶説』ね」

「魂の記憶？」

「ええ。さつきも言ったけど、遺伝子に組み込まれたDNAとしての記憶ね。前世以前の記憶が夢という形でフラッシュバックするという可能性が挙げられるわ。これが夢だと認識できるのは、遙か過去に実際に自分が体験しているからよ」

「DNAねえ・・・」

話を聞きながら小さくため息を吐く。正直、生物学的な知識に関してはさっぱりだ。

「蓮子、見たつていう明晰夢に関して少しでもいいから思い出せることはないかしら？」

首をかしげながらの言葉を聞き、もう一度顔に手を当て目をつぶる。糖分とカフェインをいれたおかげか、起きた当時よりは夢の中の描写が少し鮮明になった。それでも殆どはもやの中なのだが。

断片的な風景、わずかに残っている記憶をかき集めて、継ぎ接ぎのストーリーを完成させる。

「うーん……ずっと暗い闇の中にいた気がするわ。長い間そこにいて、気づいたときには急に景色が変わって。目を上げたら二人かな？二人が飛びながら戦っていたようななかったような……」

「前世は魔法使いだったのかしらね？」

呆れた眼で見つめてくるメリー。だって夢なんだからしようがないではないか私は悪くない。

しかし、件の話を聞いた後では気になることも事実である。およそ非現実的な光景であるあの夢が、万が一過去に経験したものであったとしたら。

自分が見た夢は三人称視点だったのだが、もしかすれば二人のうちどちらかが私の前世だとも言うのか。

馬鹿だな、と感じた。いくら眠いとは言え、そんなことを真面目に考える自分がである。もちろんいい意味でだ。ありえないことに対し、はいそうですかと打ち切るなどではない。

結局、それ以上は思い出せなかったため夢の話は打ち切りとなったのだが、また記憶を引き出せれば考察してみようと心に決めた。

……よし、とりあえずは寝よう。

忙しく動き回っていても、のんびりと過ごしていても、時間というものは平等に過ぎていく。

どれだけめんどくさいことが待ち構えていようとも、等しく未来へ向かって進む時間は止まることがない。

とどのつまり、来てしまったのだ。彼岸の日が。

両親は既に外出している。二人共、帰ってくるのは夜になるとのことだ。眩しい朝日を浴びながら、私達はお寺への道のりをゆっくりと歩いていった。花や線香、お供え物などをまとめたかばんを持って、一步一步踏みしめていく。

あの後さり気なく母親に交渉をしかけたが、結果はご覧のとおりである。泣きたい。お寺まで交通機関を使えれば楽なのだが、電車もバスも、綺麗に通らない位置にあるのだ。使ったとしても対して時間が変わらない上にお金だけは掛かるといふ踏んだり蹴ったり仕様となれば、己が脚を使うしか無い。

さすがに客人立場であるメリーに物を持たせるわけにも行かないため荷物を全て抱えて出発したのだが、早くも限界が訪れたため空の水桶だけは持つてもらっている。貧弱な私の腕に乾杯。

来たときとは違う道をきよろきよろしながら歩くメリー。転ぶから危ないと言いかけたが、留まった。未知の風景を観察しているのであれば、止めることは忍びない。

私としてはこんな住宅街のどこが面白いのか、という思いもあるが住人ならそんなものだろう。どんな観光名所だろうと、その土地に住む者にとっては見慣れた、見飽きた風景なのだから。

目指すは宇佐見家先祖代々の墓。

これから起きる出来事など、今の私は露知らず、メリーと共に黙々と歩き続けた。

# ささこぐうた

彼岸花。別名曼殊沙華。

花言葉は『悲しい思い出』『転生』『追想』

『また会う日を楽しみに』

年に何度もない、ご先祖様とのご対面。その肝心な時に私の足腰は限界を迎えていた。

わざわざ墓参りに来たものを拒絶するかのような長い坂道。ぱつと見50m以上はありそうなその急勾配が、寺へ行く唯一絶対の道のりである。長い間歩いてきて棒になった足を地獄に突き落とす悪魔の仕掛けである。

一つ言い訳をさせてもらえるならば、普通ならこんなことにはならないのだ。伊達に

秘封倶楽部の一員ではない。サークル活動でそこそこ鍛えられた身体を持つてすれば、片道一時間もしない寺くらい余裕で踏破できるのだ。

そう、このくそ重い荷物さえなければ今頃とつくに墓参りを終えていただろう。彼岸参り一式セットが腕だけでなく足にもダメージを与え始めて数十分。休憩を挟んでも文字通り気休めにしかならず、件の坂道手前で私の気力は見事に碎け散った。

息絶え絶え、早く鼓動を打つ心臓を落ち着かせるように何度目かの深呼吸を行う。俯いたの体制のまま膝に手を当て、息を吐く。母は毎年この苦行を平然とこなしていたのかと思うと尊敬の念を感じずにはいられない。いやそれをかよわい娘にやらせるとかやっぱ悪魔だわあの人。

「れーんこーほら、早く登ってきてよー!」

そしてそんな満身創痍の私に発破をかける、もう一人の悪魔がいた。

坂道の上という遥かな高みからこちらを見下ろすメリーさん。空の水桶を持ちながら元気な声で私を励ましてくれる。その態度からは、手伝おうとする気持ちだが微塵も読み取れない。ものの数分前、疲労困憊の私の横を軽やかに駆け上がっていった光景はしっかりと目に焼き付いている。客人待遇なんざ知ったこつちやねえともつと渡しておくべきだったか。

「メリー……メリー!出来れば」



「疲れたからむりーりー！」

悩んだゆえの懇願は、まぶしい笑顔で却下された。どこをどう見ても疲れている者の表情には見えない。

所詮人間は孤独。この世の理を身をもって実感した瞬間だった。

後で覚えているよ、と決意を胸に秘め、パンツ！つと右手で自分の頬を叩いた。その手を籠の取っ手に据える。

私は何でこんなことをしているんだろう。そんな考えを打ち消すように一歩、足を進める。アスファルトで敷き詰められた坂に立ち向かうには足りない体力を、気力で補うように自身に活を入れる。

春と呼ぶには少し暑い天候の中でひたすらに歩を進める。そんな私を応援するように、桜の花が両脇を囲む。

例年より少しだけ早い開花となった、日ノ本を象徴する花。見るだけで心が安らぐそれが、延々と坂の頂上まで続く光景はいつまでも見ていたくなるものだ。

風に吹かれた木が揺れ、花びらが舞う。桜色に染まる景色に目を奪われそうになりながら、少しずつ歩を進める。ふわり、と花片が手に被さるのを見てくすくすと笑みが漏れる。

こんな場所もあったんだな。

時代に取りに残された都市、東京都。周りを見ず、耳を貸さず、愚直に発展を求めた末の成れの果て。そこにはまだ、僅かながら昔の原風景が残っていたようだ。何のことはない、特異な目を持っていながら、十数年過ごした故郷のことすら碌に見えていなかった。これじゃあ秘封倶楽部失格だな、と呆れながら顔を上げる。

今年に入つて初めての桜を見て、不意に以前見た幻想が頭をよぎる。結局、あの人は逢えず仕舞だったなとため息が出る。

何気ない日常のことはすぐに忘れても、ずっと忘れられない非日常もある。あの日見た季節外れの桜は、幻想の中に取り込まれて消えてしまったのかもしれない。そう、現実を生きる私たちとは二度と交わらない彼方へと。

半分ほどまで登ったところで、一度後ろを振り返る。遠くに見える整備された住宅街が、私たちが歩いてきた道のりをまざまざと感じさせる。

「れんこー！早くしないと日が暮れちゃうよー！」

と、人が感傷的な気分浸っている時にその空気をぶち壊してくる人物もいた。

登りきったら覚えていろ・・・いや、その時は体力がないだろうから帰ったら覚えていろ。

人間、希望や夢より、怒りや悲しみを背負った方が力が湧くものなのだ。暗い炎を燃やし、あと半分ほどの坂道を睨みつけた。

登りきって道なりを進み、墓地に入った私達。そこで、二人の足が止まった。

「何、これ・・・」

疲れて息が疎らな口から自然と漏れたのは、純粋な疑問だった。辺り一面に広がる、紅の花。見るものの視覚に直接的な刺激をもたらすその色が、決して狭くはない墓地を埋め尽くしていた。

黒色に近い土も、春の訪れとともに目覚めた青い若葉も、至る所に転がっているであ

ろう小石も、何もかもが地を覆う朱色に覆われていた。

呆然となった状態から口に出た、困惑の声。それは何もかもが分からないから出たのではない。この花の名前が分かるからこそ漏れたものだった。

### 『彼岸花』

くつきりとした鮮やかな赤色の花びらを持ち、葉を持たないという特徴がある。根、莖莖、花卉の全てに毒を持っていることで有名であり、昔の農民、百姓は害虫除けとして好んで彼岸花を田や畑の周辺に植えていたという。

人間には大して効果のない毒でも、ネズミやモグラといった小動物には絶大な効果があり、人から人へ、土地から土地へと渡った花はいつしか、日本各地で見られるようになった。

広まった理由から分かる通り、元々は観賞用の植物ではない。農民が人口の大半を占めていた昔の人々にとって極めて実用的な役割があり、非常時には球根を潰して患部に塗る民間療法としても重宝されていた。

特徴的な名前、見た目からそこそこの知名度がある彼岸花。この花の咲く時期は9月、秋の彼岸頃に咲く。

そう、彼岸花は9月に咲く花だ。

「メリー、今ってまだ秋だったかしら？」

「秋に桜が咲くと思っているの？」

私のとんちんかんな質問に、いつもなら呆れ要素を満遍なく含んだ声を返してくるメリーも、心なしか言葉に余裕がない。

そう、彼岸花は言う花は、春風が靡く3月に咲くものではない。少しでも植物、花の整体をかじっているものであれば、当然知識として知っていること。だからこそ、目の前の現実が理解できなかった。

私は夢を見ているのか。知らないうちにタイムスリップしたのかと空を見上げるが、浮かび上がった数字がその淡い考えを否定する。

進化した私の目が読み取った場所と時間は、確かに今この瞬間を示していた。摩訶不思議な状況を肯定する、事象を捉える瞳。

静かに屈み、彼岸花に手を伸ばす。まさかとは思うが、こんな場所でも人を集めようと画策した寺が、トチ狂って広範囲のVRを備え付けたのかと邪推したが、そんなことはなかった。私の手は確かに、彼岸花の感触を受け取った。風に揺れる紅が、静かに揺れる一つの生命が、この花が現実に存在するのだと教えてくれる。

仮にもオカルトサークルを名乗って活動してきたのだ。常識外の物事に遭遇したことは一度や二度ではない。それでも、この異変は何かが違う気がした。

顔を振って正面に向ける。紅色に惑わされて辺りを意識できなかつたが、少し遠く、私の祖先の墓がある付近に人が見えた。それ以外の人物は見当たらなかつた。

彼岸参りという、人が集う時期にも関わらず、お寺にいるのは私達を除いて件の人が一人だけ。

「……メリー」

「……うん」

万が一を考えて、しっかりと彼女と手を握る。強く、強く、痛いくらいの力で。ただの偶然か、彼の者が原因か。非日常を見据えて、私は一歩、疲れを忘れた足を進めた。

ここに来たのはいつ以来だろうか。

青い空の下で、遙か遠い思い出を手繰り寄せる。

彼女は、たった一人で幻想の地に足を踏み入れた。人間としてみても若い、到底大人とは呼べない身体に夢と超能力を詰め込み、幻想郷の住人と邂逅を果たした彼女。

ぶつかりながら、時には命の危険にさらされながらも、彼女はひたすら前に進み続けた。応援していた者、敵対していた者全てを巻き込み、最終的にその全員と心を通わせた。

無鉄砲、周りを見ないという言葉が相応しいだろう。後ろを振り返らず、後悔せず、顔を上げ続けた少女がいた。

私は、外の世界に来ていた。幻の国とよばれた地と比べて、科学の発展を極めた世界。生活水準など比べ物にならない土地の一角、お寺と言われる場所を訪れた。

ここに来たのはいつ以来だろうか。

もう一度同じことを考え、記憶の波に身を委ねる。

目の前に建ててある『宇佐見家ノ墓』という文字が、私の思考に染み入ってくる。

時が経ち、精神が成熟してからも、年老いてからも、幻想に住む私達との交流を続けてくれた彼女。どんなときでも明るく、挫けなかつたあの姿は今でも私の記憶に残って

いる。

そう、それこそ今は亡き、何者にも囚われなかつた巫女や、星を追い続けた魔法使いと共に焼き付いている。

妖怪や、私のような者と違って人間は寿命が短い。その短い命を、彼女たちは輝かせた。力も、精神も、経験も豊富な私達が羨むほどに彼女等は眩しく生き、最後まで周囲を照らし続けながら生を終えた。

「・・・騒がしい時代も、ありましたね」

目を閉じ、誰へとも分からぬ言葉を吐く。全てを受け入れる幻想の地は、一昔前と比べると随分静かとなった。吸血鬼も、亡霊も、蓬萊人も、鬼も、天狗も、あまり目立つた動きを見せずに、淡々と日々を過ごしている。

博麗大結界が張られて、初めて訪れたと言つていい長期の安定期。閻魔としては喜ぶべきことなのだが、どこか、心に隙間風が吹いているような感覚がある。

静かに手を合わせ、顔を下げようとして、目を開いた。私以外の足音が、この場に響いた。

聞こえてきた方向に身体を向ける。そこには二人の少女が立っていた。

片方を見て、僅かに目を見張った。その少女はどこか、記憶の中の『彼女』に似ている気がした。





## 対極の存在

日本におけるお墓参りは、五供(ごくう)をお供えして合掌することがしきたりとなっている。お供え物、と聞くと食べ物と連想する人が多いだろうが、お灯明もその一つとして数えられる。

ここでいう五供とは、香・花・灯明・浄水・飲食(おんじき)のことを指す。

香は線香のことを指す。仏壇に礼拝する時に焚くことで人の心と身体を清める役割がある。墓ではなく仏壇で使用する場合、香りが部屋の間々まで行き渡ることから、全てもともと平等に接するという仏様の慈悲の心を表しているとも言われている。

花はお墓に供える供花のことを指す。麗しく新鮮な花を仏壇に捧げること、その花のように清らかな心でいてほしいという願いを込める意味がある。ただ、派手な色や棘を持つ花は避けられる傾向がある。

逆に枯れた時に散らかりにくい、日持ちする性質を持つ花は好まれている。これらの条件を全て満たす菊が重宝されているのは納得だ。現に、今回私が持ってきたのも菊の花である。

灯明とは文字通り灯りの事であり、一般的には蠟燭のことを指す言葉である。蠟燭の

灯は周囲を照らすだけでなく供養する人の心を引き締め、仏教の教えを守ろうとする気持ちを支える働きがある。

また、その光が拝む人の煩惱を照らし、その全てを取り除くと言い伝えられている。もし本当であるなら、ぜひメリーに毎日照らし続けてほしい。私の将来のために。

お水やお茶でお供えすることを、仏教では浄水という。仏様の清らかな心に自分たちも洗われたいとの願いが込められている。昔は自然水、天然水を汲みに行っていたらしいが、面倒になったのか現在は水道水で代用する方法が定着している。そもそも話、現代ではどこから水が湧き出ているのか知らない人が殆どとなったことが原因でもある。

飲食は一番想像しやすいだろう。日持ちするお菓子が好まれるが、その日のうちに下げるのであれば、おはぎのような生物でも構わない。自分たちが食すものを供えることで、祖先とつながる事が出来る。

私の家では故人の好物を毎年供えているらしく、今回は大福を持たされた。途中つまみたくなったことはここだけの秘密だ。いくら私でも最低限の常識は備わっている。

・・・と、これら5つの供物を格式通りに置いたところで一息ついた。決まりも何も分からないまま来たため、スマホ片手に悪戦苦闘覚悟でやって来た訳だが、予想

していた時間の半分も掛からなかった。

私達の手際が良かった、という訳ではなく手伝ってもらったおかげなのだが。

私とメリーと共に、宇佐見家のお墓に手を合わせて祈る人物をちらつと見る。

真つ直ぐな姿勢からやや首を傾げ、目を閉じている女性。いや、少女というべきか。淡い碧色の髪と、蒼い瞳をもつ彼女。お墓に着いた時には既に彼女がいて、持ってきたのであろう白い菊の花が供えられていた。

その後、私が持ってきた供物も手際よく供えてもらった。知識のない私の出番はなかった。はつきり言えば、この人のおかげである。

初対面の人に手伝わってしまったことへの謝罪とお礼をした後、墓前に立った。私のお祈りは10秒程度で終わってしまったのだが、彼女は5分たっても、微動だにせず手を合わせていた。

(・・・ひいおばあちゃんの知り合い、なのかな?)

他人の祈りの邪魔をする訳にもいかないため、心の中で推測をする。

単純な見た目からすれば10代中盤、自分よりも年下に見える彼女が、曾祖母と知己の中であるとは考えにくい。物心付く前に亡くなったのだから、更に若い人物が曾祖母

と知り合いと考えるには無理がある。

普通に考えれば、だ。

彼女は、『あちら側』の可能性が高い。

今なお祈り続ける少女と私達を囲む、真紅の曼珠沙華。春に咲くはずのない、美しくも背徳的な花。匂いのない花だとは分かっているはずなのに、風に揺れる紅色から独特な香りが漂ってくるような気がする。その彼岸花は彼女を中心に広がっていた。

なにより、彼女という存在が異質だ。

真つ直ぐすぎるのだ。その目が、身体が、精神が。

どこまでも真つ直ぐで、はつきりした事象。そこに、曖昧さというものは微塵も見当たらない。そう、どこまでも曖昧だった八雲さんと対極にある存在のようで。八雲さん曰く、人より遥かに長い時間を生きてきたという言葉が本当ならば、この人もまた何百年、いや、それ以上の時を過ごしてきたのかもしれない。

科学世紀において非常識を追い求めてきたからこそ理解できる。彼女は、八雲さんと同じだ。性質こそ真逆だが、本質的な所で通じる何かがある。

少なくとも、外見相応の年齢だとは思えない。その存在が、その在り方が、理解できないということが理解できる。

どれくらい経ったのだろうか。静かに佇み、手を合わせていた彼女がこちらを振り返った。

真つ直ぐな瞳が、私を射抜く。全てを見透かされるような感覚に包まれ、反射的に目をそらしてしまうようになる。なんとか踏ん張り、視線を合わせる。青と白に占められた服装は、紅の背景にはアンバランスに感じるはずなのだが、不思議と違和感はなかった。

「そういうえば、自己紹介がまだでしたね。」

見た目よりも数段落ち着いた声が私に届く。決して大きくない声量なのに、心が包み込まれるような奇怪な気持ちになった。

そんな心情を知ってか知らずか、目の前の人物は表情を変えずに言葉を続けた。

「私は四季映姫、と言います。以後お見知りおきを」

「私は宇佐見蓮子です」

「マエリベリー・ハーンと言います」

ぺこり、と頭を下げた彼女・・・四季映姫さんを見て、私達も頭を下げる。少ないやり取りの中で、四季さんの律儀な性格が伝わってきた。一つ一つの動作が洗練されており、全くの無駄がない。その動きを見ているだけで、こちらの気持ちも引き締まってしまふ錯覚を覚える。

風が吹く。季節を鑑みればやや暖かいと思えるそれが、私の頬を撫でる。風は等しく、皆に届く。メリーに、四季さんに、そして曼珠沙華に。突然私達と遭遇し、あつという間に置き去りにしてしまう。手を伸ばしても掴めない、数瞬の邂逅。

きつと、四季さんとの邂逅は偶然の物なのだろう。最初、自分たちを見たときの彼女は、目を少し見開き、驚いているような表情だった。すぐに元に戻ったとはいえ、あの顔が嘘だったとは考えにくい。

八雲さんのときとは逆で、あちら側の存在がこちら側の世界に交わった。帰省中は秘封倶楽部活動をしない予定だったが、前言撤回だ。非常識の存在を前にして、黙っているようじゃ私じゃない。

とはいえ、四季さんが一般人という確率も0ではない。その場合、めちやくちや失礼な邪推をしていたことになる。

だからこそ、一言つぶやいてみることにした。

「……………八雲紫」

四季さんの目を見据えながら、一人の人物を口にした。彼女は、初めて会った時以上の驚きを、その顔に表した。

「・・・・・・・・八雲紫」

目の前の少女が発した名前に、私は驚きを隠すことができなかつた。

記憶の中の彼女と似た顔を持つ者と、彼女が口に発した妖怪の賢者と『ほぼ同じ』存在の者。



最初こそわずかに気が動転したが、お墓参りの手伝いを行った後は幾分冷静さを取り戻した。なのに彼女、宇佐見さんの言葉でまた心がざわついた。

幻想を追い求め、掴み取った董子。外の世界で職についてからは幻想郷を訪れる機会が減ったが、年に数回は顔を合わせた。老人になってからは自由な時間が増えたのか、博麗神社や香霖堂によく顔を出してはお互いの息災を確かめあった。

そんな董子だったが、家族や知人を連れて来たことはなかった。私が止めるように言つたため当然といえば当然なのだが、自由奔放な彼女ということもあり、言いつけを聞かないのでは無いかと考えていた。自分の勝手な思い込みであった。

最期まで誰にも話さずに、一人だけの秘密にして天に旅立つた董子。実際、彼女の真似をして結界を越えようとする者はいなかったため、他人はおろか、親しい者にも打ち明けなかったのだろう。

しかし、彼女の曾孫（ひまご）が八雲紫という存在を知っていた。晩年、董子が「ようやくと、曾孫が出来たんさ」

と笑いながら自慢していた記憶が蘇る。しかし時期を考えれば、物心が付く前に董子は亡くなっていたはずだ。

どうやって、非常識の存在を知りえたのか。

「……どこでその名前を知ったのですか？」

言つてしまつてから、すぐにしまつたと思つた。冷静さを欠いていたせいか、発した言葉には力が籠もつていた。閻魔という地位についているためか、威圧的にならないように注意を払つていたのだが、棘のある空気を纏つたまま相手に届いた。

少し怯えたような表情に変わる二人を見て、慌てて頭を下げた。

「申し訳ございませぬ！ 気が動転してしました、どうかお許しを……」

「い、いえつ、全然大丈夫です！ 気にしてませぬので！」

必死で謝る私を、二人がかりで宥めて頂いた。本来であれば、長く生きる私が手本とならなければならぬのに、気を使わせてしまつた形となる。自身の動揺すら抑えられない体たらくで、よく今の地位が務まるものだ。

結局、私の失態で5分ほど時間を使わせてしまつた後に改めて宇佐見さん、ハーンさんから事情を聞き……内心で三度目の驚きを享受した。

二人が幻想の地を訪れ、八雲紫との邂逅を果たした。

二人が宿した異能は一旦置いておく。状況的に間違ひなく、八雲紫が二人を招き入れた。神出鬼没で掴みどころのない彼女だが、はつきりと分かることがある。

一つは、幻想郷を心から愛していること。全てを受け入れる、美しくも残酷な土地と

共に在るその姿からは、いつも感じる嘘偽りが全く見えない。その身と引き換えにしてでも、彼女が創造した世界を守り抜く覚悟が伝わってきた。

もう一つは、無駄な行いはしないということだ。気まぐれで動いているようで、行動の一つ一つに何かしらの意味がある。彼女が二人と出会ったのは、『彼女が必要だと感じたから』だ。いつものように式神任せではない。八雲紫という存在が、直接会う必要があった。

二人と会話を続けながら、急速に情報をまとめ上げる。

(………何かが起きるのかもしれない。)

舞台となるのは、幻想の土地か、外の世界か。いや、それとも……。  
心のざわめきを抑え込みながら、そんな予感を抱いていた。

## お願い

相容れない存在、というものがある。互いの主張や立場が相反し、両立し得ない、受け入れられないことを指す言葉である。

国籍、性別、思考、宗教など様々な理由は千差万別であり、どれだけ言葉での議論を尽くそうとしても分かり合えない相手はいる。あるいは水と油のように、近づこうとしても絶対に交わらない相手というものもある。

さて、それでは目の前の人物は？

初めて顔を合わせて30分も経っていないが、会話や仕草を通じて簡潔ながら彼女・・・四季映姫さんのことが分かってきた。

まず、ものすごく真面目な人である。品行方正、清廉潔白という言葉は彼女のためにあるのだと言われれば、心から納得できる程には。優雅さ、美しさといったものは皆無で、愚直なまでに真つ直ぐな佇まいをしている。動作の一つ一つに無駄がなく、極限まで研ぎ澄まされたような・・・そんな出で立ちだ。

人と話す時は目を見て話しなさい、という言葉は誰しも親から、先生から言われたことがあるだろう。私も極力相手の目を見ながら話すよう心がけているのだが、時間が経過するとその視線が風景に移ってしまう。

話の合間合間など、全ての時間を相手に向けることが出来るのか？意識すれば多少は可能だろう。しかし長時間やろうとなれば話は別だ。どんなに注視していても集中力が途切れる瞬間、相手から眼を、意識を逸してしまう。それは普通のことなのだ。

なのに、四季映姫さんは違う。これだけ私達二人相手と言葉を交わして、一度も眼を、意識を逸していない。話の途中、私は何度か意識を青空や彼岸花に向けている。それは会話の最中のふとした瞬間だったり、相方が話をリードしている時だったりする。

そんな時でも、彼女は真っ直ぐに話す相手を視ていた。口を開いているときも、耳を傾けているときも、蒼色の双眸が私を射抜いて離さない。『私という存在』を見極めようとする眼差しを受けると、こちらも目を離せなくなる。

ここまでの紹介だと杓子定規な印象を与えるが、話してみると良い意味で裏切られる。実直な話し上手、と言いきか、話の内容がスラスラと頭に入ってくる。こちらの話も最後までしつかりと聞いてくれ、その上で共感したり、話どんどん広げてくれる。

一言で表すなら、完璧な善人だ。私なんかより遥かに素晴らしい人だ。

なのに何故だろうか。

『私と四季映姫さんは相容れない存在』であると認識してしまったのは。

先に言っておくが、私が悪人だからという理由ではない。確かに善人ではないが、それなりに勉強に励みつつ真面目に生きてきたつもりではいる。

いや、違う。そんな性格の違い、といったちっぽけなものではない。もっと大きな、お互いの根源に関わる何かが相反している。

そう、それこそ・・・

(私の・・・境界を把握する力によるものかもしれない)

蓮子と会話をしている四季映姫さんを見ながら、私は想像を巡らせる。

境界の裂け目を見つuckerこの瞳。その先に繋がる世界は時間も、場所も、全く異なる場所かもしれない。

今という事象を絶対的に確定させる蓮子と、今という事象をどこまでも曖昧なものにする私の能力。二人で一つの秘封倶楽部とはよく言ったものだ。

前にも言ったが、この目はオカルトに興味がある人ならどんな手を使ってでも手に入

れたいものだろう。結界を越えた、神隠しに遭った、という報告はいくらでも見つかるが、実際に確認するとすぐにボロが出たり嘘だと判明したり・・・本物はあるかもしれないが、生憎今まで他人からの体験談に当たりはなかった。

結界の綻びをヒントなしの自力で見つける作業は、大海から目的の貝殻を見つけることに等しい。まずこの作業で大半、というよりほぼ全員が挫折する。はるか遠くにあるかもしれないし、目の前にあるかもしれない。

奇跡の累乗によつて綻びを見つけることが出来たとしても、その綻びが『開いている』かどうかの関門がある。

考えてみれば当然のことだが、世界中に散らばっている結界の裂け目が全て完全に開いているのなら神隠しどころの騒ぎでは済まなくなる。歩いているだけでいつの間にか異世界に飛ばされてしまったなんて笑えない。

小さな綻びが裂け目となり、あちら側へ引き込まれるタイミング、それを待たなければならぬのだ。現代に生きるもの、全員が様々ながらみや職という社会の役割を抱えているため、永遠にその場で待ち続けることが出来ない。肉眼では見えないものを、どうやって根気よく粘れるだろうか。

そんな気の遠くなるような捜索を、この目はショートカットできるのだ。蓮子も時々言っているが、確かにこれほど便利な異能は早々ないだろう・・・私自身がどう思っ

ているかは別として。

閑話休題。そんな私の力だが、事象の綻びがあつて初めて役に立つ異能と言える。言  
い方を変えれば、不完全なものに対して力を発揮するものである。

不完全さ、曖昧さ・・・彼女、四季映姫さんとは対極にある言葉だ。この瞳を通して  
見ても一寸の歪みも見当たらない。

彼女は今、そこにいる。絶対的で確定的に存在している。

(うらやましい・・・)

私と違い、何者にも影響を受けない彼女のがんが。旗幟鮮明の如き性格が。  
彼女の瞳には、世界はどう映っているのだろうか。

「・・・ハーンさん?」

「メリー?」

はつと気づけば、四季映姫さんと蓮子がこちらを見ていた。考え事に没頭しすぎて、  
周りが見えなくなる癖が出てしまった。

二人に謝罪の意を示しながら頭を下げた。これでは、瞳云々以前の問題である。

「ごめんなさい、少し考え事をしてしまって・・・」

「・・・あなたの能力と、八雲紫についてですか?」



「……ええ。それもありません。」

蒼色の瞳を真正面から見返しながら、質面に答える。

八雲紫。私の能力の完全上位互換といえる異能を持つ女性。別れて半年たった今でも、忘れられるはずがない。

夢のような現実。短い巡り合わせの中で、私が得たものは何だったのだろうか。

境界の向こうから招かれ、様々な対話の終わりに受けた質問。私はまだ、その答えを出せていない。

足りない。

あの短時間では、とてもではないが足りなかった。もっと八雲さんのことを知りたかった。

私と『ほぼ同じ』彼女のことを。笑顔という無表情に隠された素顔を。八雲さんの本質を。

もっと知りたい。もっと理解したい。

「四季映姫さん。一つ、お願いがあります」

私は改めて、四季映姫さんを見つめた。

蓮子が放った一言で、彼女と八雲さんが知り合いだということが判明している。境界を操れる八雲さんと知己であるなら、映姫さんも普通の方ではないだろう。

それなら……

「もう一度、八雲さんに会いたいです。四季映姫さんの力で、会わせていただけませんか」

無茶なお願いということは承知している。会って間もない人にこんな頼み事をするなど、無礼極まりないことだと自覚している。

それでも、この場で言わなければ後悔する気がした。頭を下げ、懇願する。

生まれつきのこの力。蓮子と出会うまでは疎ましいときさえ思っていたこの異能を解明できるならば。それによつて、より未知なる神秘を追い求められるならば。

どれだけ論文を読んでも、ネットの海に潜つても手がかりすら掴めなかつた私の眼の正体。一度目の邂逅では畳み掛けるような展開が続ぎ、聞きたかつたことの1割も聞けなかつた。

もし、『もう一度』があるなら今度こそ全てを打ち明けたい。

蓮子が息を飲む声があったが、無視した。

「……ふむ、可能かと言われれば可能ですが……少し時期が悪いですね」

返答は、思ったよりも早く返つてきた。それも、想像していたより遥かに良い内容の返事が。

顔を上げると、映姫さんが思案顔になっていた。無理なお願いをして不快感、いや、怒

りを買うことも覚悟していただけに予想外だ。

「もちろん、紫が許可した場合に限りますが。私からも一度話をしておきましょう」

「ほ、本当ですか！．．．あ、でも四季映姫さんとはどうやって連絡を取れば」

「必要ありません。その時になれば紫が呼び寄せてくれるでしょうしね。ただ、実際に会ってくるかどうかは分かりません。それは心に留めておいて下さい」

何気なく話す彼女を見て、僥倖だと思った。

「ありがとうございます！無理なお願いを聞いていただきまして．．．」

「いえ、構いません。そんなに手間になりませんし、実際動くのは紫ですからね。いつも人の動くさまを見て笑ってる方ですからね。少しは動く側に．．．っと失礼」

何やらブツブツと黒い言葉が聞こえて気がしたが、四季映姫さんに限ってそんな事は言わないだろう。

頼んでみるものだと思った。今更ながら、未だ目を白黒させている蓮子に悪いことをしたなど思った。幻想の向こう側から来た人と触れ合う機会を、私の勝手なスタンドプレーで台無しにするところだったかもしれない。

後でお詫びしないと．．．いやその前に四季映姫さんにお礼を何か送れるだろうかと考え始めてしまう。また私の悪い癖が出た。

そのせいで、四季映姫さんが眩いた小さな言葉を半分聞き逃してしまった。私をしつかりと見据えながら零した、その声を。

「似ていますね・・・その真つ直ぐさが」

そんな、過去を振り返るような一言を。

## その目で見たもの

代わり映えしない地獄の関所。そこでの門番、見張り役を務められるのは『ド』が付くくらいの真面目な者が目を覆うほどのサボリ魔くらいしかいないだろう。

自分は一体どちらに当てはまるのか。変化のない景色を見ながら私、庭渡久侘歌は考える。

同僚や友人からは、久侘歌ほど真面目な人物はそうそういない、四季様に匹敵するほどの几帳面、なんて言われたこともあるがとんでもない。普段の仕事をそこそこ真面目に行っているだけであり、息抜きする時はとことんぐーたら人間、いや神様に成り果てる。

妖怪の山にある住処は派手に散らかっていて人を呼べるレベルではないし、休日は用事がない場合、その家の中で一日を終えることとなる。掃除をしようにも20分もしない内に他のことをやっているとという有様だ。

件の仕事中也、人前では真面目に取り組んでいるのだが、他人の目が無い時は要領よくサボっている。現に今も関所の監視を行いつつ、人間の食料として定着してしまった

ニワトリの地位向上について、脳内で真剣な議論を繰り広げている。

こんな存在が是非曲直庁でも、上から数えて何番目というしつかり者の部類に入るといふのだから、この職場の人選が若干心配になる。サボり魔の代名詞を持つ赤髪の死神は極端な例であるが、他の者も仕事に障害をもたらすレベルでの怠けは避けてほしい。割と切実に。いやボーナスに関係するから。連帯責任なつちやうから。

この世の地獄、生き地獄なんて言葉もあるが、生者の住む世界とは一線を画す極悪劣な環境であるからこそ、それを取り締まる者は無法者であつてはならない。地獄といえど一つの大きな組織。成り立つ上では秩序が必要である。一人一人の小さな綻びがいつか、大きな裂け目となるかもしれない。

一つ、大きく欠伸をする。相も変わらず殺風景な場所だ。関所以外の建物などなく、どこまでも続く色素のない地面。その所々に赤く花咲く彼岸花が点在しているだけの場所。妖怪の山のような豊かな景観も、人里のような娯楽もない。

顔を上に向けてみるが、退屈しのぎには繋がらない。鳥一匹飛んでない空を見て何が楽しいのか。灰一色の上空に比べれば、二色のコントラストが在る地上がまだマシかもしれない。そんな思いで再び地上に目を戻す。

「・・・退屈だなー」

目を細めて、そんな言葉を漏らしてしまう。

現在の仕事が、ではない。内心ちよつとだけ思つてたりもするが、今考えているのは違うことである。

彼岸の向こう側、幻想郷。かつては毎年のように起こつていた異変が無くなり、穏やかな日々が流れている土地。今では異変を知らないまま成人となつた人間がいるまでになつたと聞いている。

昔の方が良かった、とは言わない。自身も巻き込まれた鬼形獣異変の事はしつかりと脳に染み付いている。勁牙組が人間界に押し寄せようとしてきた時は死を覚悟で防衛戦を行ったし、実際に全治一年ほどの重症も負つた。止めに來たはずの巫女からついでとばかりに攻撃を受けた時は割と真面目に殺意を覚えた。

あの頃に戻りたいか、と言われれば首を横に振るだろう。平和になつた今を何故拒む必要があるうか。

それでも心では、無意識の内にあの時の情景を思い描いている。

何もかもが輝いていた、あの時代を。

「……とはいっても、この場所以上にありがたい土地はないんですけどね」

長時間に渡る、一人での監視。続けている内に癖になつてしまった独り言を紡いでい

く。

『外の世界』の情報は、断続的ながら私の耳にも入ってきている。発展に次ぐ発展、カガクという分野が成熟しきった世の中。そこに曖昧な概念が入る余地は無く、人間本位の世界となっているという。

恐怖から生まれた一部の妖怪、信仰を糧とする神様には非常に生きにくい世の中だ。最近、外から幻想郷に流れ着いてくる神が多いのはそれが原因かもしれない。とてもではないが、行きたいとは思えない。

非科学的な事象が当たり前の場所。だからこそ私のようなあまり有名ではない神様でも不自由なく暮らすことが出来る。

人間も、妖怪も、神様も、幽霊も受け入れる最果ての土地、幻想郷。恐らく私はこの先もここで過ごすのだろう。何百万年後、何千万年後、それ以上かは分からないが、生涯を終えるその日まで。

(それにしても……)

遙か未来まで飛んでいた思考を引き寄せる。

幻想郷について考え始めると必ず頭に浮かぶ人物がいる。



## 八雲紫

幻想郷を創生した中心人物であり、今も賢者としてこの土地を守り続けている妖怪。

「八雲さんは、何で幻想郷を作り上げたんだろう・・・？」

その問は、長年思っているもの。自分みたいな一介の存在が八雲さんと関わりを持つるはずもないため、ずっと懐で温めていた疑問が再び浮かび上がる。

幻想郷の役割は、言ってしまうえば力を失った妖怪、神の保護だと思っている。実際、外の世界で生きていくことは困難だ。

しかし、それは今の話である。元々は、人里離れた辺境の地。そこに一枚目の結界を張った時代は、まだまだ妖怪の力が健在だったはずなのに。

安息の地を与えてもらっている立場で相手の心理を追求するというのも失礼な話だが、気になってしまった以上は仕方ない。

うーん、と頭を捻って考えてみるも、この鳥頭では天才的な推理など出来るはずもなく。結局はいつもと同じ、袋小路に迷い込んでしまう。

違う目的があったのか？隠された事実があるのか？

「分かんないな・・・ん？」

首をひねらせ考えていると、視界に変化が起こった。

遙か彼方、地平線から小さな点が徐々に近づいてくる。地獄の関所に向かって飛んで近づいてくれるものは、規約上数えられるくらいしかない。

思考を止め、姿勢を正して到来を待つ。小さかった点は大きくなり、人の形へと見方を変える。

やがて色を識別出来るようになり、そこでやって来た人物を認識した。

「四季映姫様！」

いつもと変わらぬ仕事服を着た私の上司。少しの期間、休暇をとって外の世界に行っていたが、今日から復帰するようだ。

私に気づいたのか、十分に近づいてから高度を下げ、すぐ近くに降り立った。

閻魔を表す冠に、罪状を書き込む悔悟の棒。その道具以上に、彼女という存在感が閻魔という立場を表している。

一糸の綻びもない表情を見て、直立不動の姿勢に更に力がこもるのを感じた。

「お久しぶりです、庭渡。長い間空けてしまい申し訳ありません。本日からまた職務を執り行いますが、私のいない間に何か変化はありましたか？」

「お久しぶりです。私の職場に關しましては、トラブルは一つも発生しておりません」  
四季映姫様からの質問に、淡々と返答をする。実際、悪意を持つものでもよほどの力

がなければ関所までたどり着けないので、ここが一大事となる事はまずない。一つ前の有事が件の鬼形獣異変だから、実に100年ほどは目立ったトラブルは起きてない計算となる。

人の一生分の期間。ふと、先に旅立った人間達・・・巫女や魔法使いのことが頭に浮かぶ。

と、いけない。今は四季映姫様と対面しているんだと他の思考を打ち切る。会話中に他のことに気を取られていたら、手に持っておられる棒が火を吹く結果となる。

「確かにこの場所でのトラブルは滅多なことでは起きないでしょう。しかし裏を返せば、もし起こった場合は非常に深刻な可能性が高いです。大変かとは思いますが、異変を感じたらすぐに知らせてください」

「かしこまりました」

姿勢を変えぬまま、目を見て返事をする。その答えに満足したのか一つ頷いた四季様が、ではこれで、との言葉を残して再び舞い上がった。

その行動を見て、おや？と感じた。いつもなら四季様との会話が10分以上は続くというのに、今回は会って1分もしない内に切り上げられたのだ。最低限の事務連絡をしただけであつという間に飛び上がった。しまった。

長い対話を覚悟してただけに、少し拍子抜けしてしまった。こちらに近づいてきた

ときと同じように、ものすごい速さで遠ざかっていく。何度か瞬きする内に人形が点となり、その点が徐々に小さくなつていく。妖怪の山の河童が言つていた、『ぎやくさいせい』みたいだと思つた。

再び戻つてきた、静寂の時。音もなければ風もない。退屈さを凝縮したような世界が戻つてきた。

もう少し四季様と話かつたな、という感情は出てくるのは今だから言える感想だろう。長々と話が続いていたら、早く終わらないかなと考へてたはずだ。

それに、いつもと違いすぐに行つてしまつた事を鑑みるに、急ぎの用事があつたと見るべきか。休暇明け初日ということもあり、いつもより早めに職場に到着したかつたのかも知れない。真面目な四季様であれば十分に有り得る話だ。

対面する緊張が抜けたせいだろうか、はあく、とため息が出た。この先、交代相手があるまでの勤務時間をどうやって過ごそうか。遙か彼方の地平線を見ながら私の思考は、一時中断していた幻想郷の考察に戻るのだった。

地獄の夕暮れは、まだまだ先だ。

「……なるべく早く会う必要がありそうですね」

浄瑠璃の鏡を見つめながら、私は呟いた。

手鏡の形をした、閻魔のみが持つことを許される道具。その鏡面には、私の姿ではなく二人の人物が映し出されていた。

電車、と呼ばれるものに乗っている少女たち。先日、外の世界で偶然巡り合った彼女らの現状を見るに、彼岸参りは終わって帰省先から大学という場所に戻る途中のようだ。

楽しそうに会話を交わす和やかな光景。音までは聞こえてこないが、双方の笑顔を見るに、明るく弾んだ内容であることが伝わってくる。

そんな二人を、じっと見つめる。

見つめて見つめて……手鏡を握る手にギュツと力が籠もった。

(やはり、見間違いではなかった)

力が籠もった目元を抑え、瞳を閉じる。

待つこと数十秒。凝視によつて固まった目周辺の筋肉をほぐすように指で軽く揉む。

その後目をこすつて手鏡を再度見るも、結果は変わらなかった。

『四季映姫・ヤマザナドゥ』

名は体を表すという言葉がある。私ほど、この格言が当てはまる人物もそうそういないだろう。

ヤマザナドゥは私の役職名だ。幻想郷の閻魔を示す言葉であり、私の役職名である。地獄の中心に近ければ近いほど力を増す身体となったのは、この名を頂戴した時からだ。

なら、四季映姫は？

瞳から手を離す。外の世界に存在する、海と同じ色をした目。この目に映るものは、景色だけではない。

四季を映す姫。私の瞳は見た相手の四季、つまり『過去と未来』を臆気ながら見ることが出来る。

自分が姫など、おこがましいにも程があると感じる。それでもこの能力は生まれつき宿っている、私だけの力であることに変わりはない。

過去を見るなら、今手に持っている浄瑠璃の鏡を使用すれば遥かに高い精度で観測することが出来るので、閻魔になって以来使用していない。

しかし、未来を見る力は頻繁に使用している。先に述べたように非常に臆気では在るが、悪しき方向に進んでいこうと者をするものを咎め、説教によって留めることが出来るのもこの目のおかげだ。

話を戻そう。今も鏡の中で笑い合っている二人の少女。外の世界で会った時は、董子の墓参りが目的だったこともあって閻魔としての立場をとっていないかった。二人と会話をしているときも、自然体で接していたため彼女らの四季を捉えていなかった。

会話が終わり、八雲紫への連絡を約束した後の帰り際。手を振ってもらった彼女らに合わせるよう振り返し、そこで初めて、何の気なしに力を使用して彼女らを見つめた。

目を疑った。

その後は急いで地獄へ戻ってきた。力が増す地獄内で、もう一度二人の未来を見るために。霞がかかった先に見えた、その結末が嘘であつてほしいと祈りを込めて。

結果は変わらなかった。

鮮明になったその未来は、最初に記した光景をよりはつきりと映しているだけだった。

鏡を持つ手に力がこもる。こんな・・・こんな結末があつていいのか。

違う管轄の赤の他人だと切り捨てられればどんなに楽か。だが、そんなこと出来るはずがない。知ってしまった以上、見て見ぬ振りをするなんてことをした日には、私が私を許せなくなる。

強く手鏡を握りしめていた手を緩める。手鏡を左手に渡して、力を込めていた拳を開くと、汗が僅かに滲んでいた。

「会わなければいけません・・・八雲紫に」

頭に浮かぶは、幻想郷の賢者の姿。二人との会話から八雲紫の存在が出てきた以上、



詳しく話を聞く必要がある。

もしかすれば彼女も、少女たちの行く先について何か知っているのか？

特に気になるのは金髪の少女、マエリベリー・ハーンさんだ。その目に宿す異能が、八雲紫と似通っていることが無関係だとは考えにくい。

妖怪の賢者は、自分より先に彼女らと接触を果たしていた。もし何か考えがあつた場合、私が迂闊に行動すると事態をややこしくする可能性がある。

まずは八雲紫と接触して、話を通す必要がある。

(・・・仕事が終わりましたら、訪れましょう)

考えをまとめ、力を抜いた。外の世界を映し出していた鏡面が徐々に薄れていき、数秒後には本来の鏡としての機能を取り戻した。

仏教面といえる私の顔を見つめ、鏡を上着のポケットに戻した。

顔を上げる。今の私は四季映姫・ヤマザナドゥ。楽園の名を司る、幻の国の閻魔だ。個人の感情を胸に留め、自分の受け持つ仕事を全うする。

悔悟の棒をしつかりと握り、私は再び空を駆った。

## 季節跨いで夏の空

## 『正座』

元々は神道での神、仏教で仏像を拝む場合や征夷大將軍にひれ伏す場合にのみとられた姿勢であった。日常生活においては武士はもちろん、女性も胡坐・立膝で座ることが普通だった。

それが庶民にも浸透したのは江戸時代、参勤交代にて全国から集まった大名達が全員市將軍に向かって正座をすることが決められ、そこから各大名の領地に広がった。この時期に、庶民の生活にも畳が使用されるようになったことも、正座の普及を後押しした。16世紀後半には、下級武士や農民まで浸透していたという。

現在は、胡坐で座ることはくだけた座り方だとされ、公式の場においては不適切であるとの認識が高い。高齢者や足に持病を抱えている者には配慮があるが、男女ともに正座が

改まった座り方だと周知されている。

科学世紀となってからは規模が縮小したとはいえ伝統的な日本の茶道、日本舞踏など

の芸道や武道、神道では必須の作法であり、神事・仏事等に参列する際は正座をするところが常識である。

ここで逸話を紹介する。参勤交代で正座が広まった理由の一つに『徳川家光が小心者だった』という説がある。

言うまでもなく、参勤交代は地方で所領を構える大名に財政的な負担を強いることで謀反の芽を潰す目的の元、制定されたものだ。しかしながら江戸に赴いた家臣と顔を合わせる必要があり、その場で万が一のことが起こらないとも限らない。

そこで考え出したのが、参勤交代に赴いた家臣に正座を強いるやり方だ。正座を長時間した事がある人なら必ず共感するであろう症状、足のしびれ。立とうとしても力が入らずにもつれて転んでしまったり、つかれただけで悶絶してしまつた経験を持つ者は少なくないだろう。

それを利用し、謁見までの時間ずっと正座でいることを指示して顔合わせの際に立ち上がれない状況を作る・・・という何とも笑えてしまう逸話が存在している。

真実であるかどうかなど分らないし随分と滑稽な話であるが、仮に事実だつたとしても私は家光公を小心者だとは思わない。戦国の世が終わって間もない時世、徳川に恨みを持つ者は数えるのが馬鹿らしくなるほどいただろう。命を狙われている立

場……常に警戒心を持つ心構えを誰が責められようか。

嘘か誠か、真相は時代の中に埋もれたエピソードは置いておいて、正座にはもう一つの側面が存在する。

それは……

「……あの」

「誰が口開いて良いつていったのかしら？」

「はい」

暑い夏の日差しが降り注ぐ京都。それを感じさせない空調の効いた図書館の一角に二人の少女が陣取っていた。

片方は仁王立ちする金髪の少女、マエリベリー・ハーンである。薄手のワンピースに纏った上で腕を組む体勢をしているため、去年よりさらに豊満になった胸部が惜しげもなく強調されている。美貌に關しても胸部以上に留まることを知らず、先日行われた大学主催のミスコンで満場一致の優勝に輝いたことは記憶に新しい。

最近は何回数と同じくらい、スカウトの申し出があったと聞いている。私にはない

のに。非公式のファンクラブもいくつか出来ているとの噂が耳に入ってきてる。私のはないのに。

そんな立っているだけで人が集まるレベル彼女なのだが、本日は何故か寄ってくる者はいない。それどころか、私たちの存在に気付いたものから逃げるように立ち去っていくのだ。

摩訶不思議な現象、オカルトだと考える人もいるだろう。しかしこの私、宇佐見蓮子の手にかかれば簡単に解決出来てしまう。その手掛かりは、今の私の状態に隠されている。

正座。

私が今とっている体勢である。日本最候補と言われる西京都大学の伝統ある図書館で、私がつっている体勢である。

ちらつと顔を上げると笑顔のメリーと目が合った。あ、アカンやつやこれ。すぐに目を下ろし、姿勢を正す。プログラムされた温度管理による快適な空間にいるはずなのに、先ほどから冷や汗が止まらない。一瞬メリーの背後に毘沙門天のオーラが見えた気がするがきつと見間違いだらう。見間違いであってほしい、頼むから。

休日の昼下がりに、なぜ私がこんな目に遭っているか。一言でいえば私の自業自得である。

学部の違う私たちだが、共通で受けている講義も存在する。その中の一つからレポート課題が出されたのだ。テーマ指定なし、文字数制限なしの完全自由という西京都大学ならではの内容である。

提出締め切りまではまだだま余裕があるとはいえ、配点が結構大きい今回のレポート。テーマの選定段階からメリーの助けを借りようと思い相談、本日の朝10時に集合する約束を取り付けたのだ。

起きたら何故か12時だった。

初めに目に飛び込んできたスマホの時刻をまじまじと見つめる私。びっしりと連なる不在着信の表示が画面中央を占拠している。

心が無の状態になったまま電話をかけ直す。2コール目で繋がった相手からは一言、「待つてるから来なさい」

と抑揚の感じないお声を頂いた。目覚ましの設定を忘れかけていたと気づいたのは、それから10秒後のことだった。

かくして今の状況と相成った。全速力でアパートから集合場所に駆け付けた私の目

に飛び込んできたのは、すつごくいい笑顔で手を振っているメリーの姿だった。

「蓮子（こ）つち（こ）つち（こ）」

全く感情が籠っていない声だった。電話口で聞いた時より数段ヤバさが増していた。振っている手が死神の手招きに見えてしまった。

メリーは到着した私の腕をガシッと掴んで図書館内に連行していく。計2時間30分の遅刻という区間新記録を打ち立てたことで、既に私の決定権および発言権はほぼ無くなっている。もしかすれば生存権も危ういかもされない。

腕をしつかりと絡ませて歩いていることで周りから視線を集めているのだが、メリーから発せられるオーラを感じたのかサツと目を逸らして足早に去っていく。美人が怒ると怖いと言うが、奇しくも私は何度かその言葉を身をもって実感している。何故懲りないのだろうか。

そして現在、本当なら和気あいあいとレポートを進めていたであろう時間帯に、ひんやりとした床の上に座している。メリーは相変わらずの笑顔だ。怖くてまともに顔を見れない。もし今の状態のメリーに気軽に話しかけられる人物がいたなら、私はその人を勇者と呼ぼう。

「れーん（こ）、どうやったら貴方が呼び出した用事に2時間以上も遅刻することができ  
るのかしら？メリーさんとっても不思議だなあー」

「・・・あの、この件に関しましては誠に「関しましては？」失礼しましたこの件に関しましては誠に申し訳ありませんと言う他なく心からの謝罪でしか誠意を示せない事は私の不徳を如実に表したものでありましてその・・・」

言葉選びをミスったら死ぬ。いつ切れるか分からない、というよりは既に切れているかもしれないメモリーの堪忍袋に全神経を集中させて、この状況を乗り切る打開策を全力で模索していた。

季節は夏。彼岸の季節に咲いていた桜は散り、深緑の葉が京都の町を彩る。

東京での邂逅から4か月近くが経過した。八雲さんとの顔合わせを約束してくれた四季映姫さん。彼女からの連絡は、まだない。



## 変わりゆく価値

生きてるって素晴らしい。

今の私の心からの感想である。

絶体絶命、九死に一生からの生還を果たした時、心はこんなにも晴れやかになるのか。何気ない日常にあつて忘れがちな、生きていくということ。あれが欲しい、これが欲しいと欲を追い求めることができるのは気持ちに余裕があるからだ。生きるか死ぬかの瀬戸際では、自らの生死以外に意識を向けることなど不可能と言っている。

休日ということもあり、人がまばらな図書館の中で私は大きく息を吐いた。椅子にもたれかかる姿勢をとっていたため、反動で頭が少し下がった。

「だらしないわよ、蓮子」

メリーの呆れた声に向かい側から聞こえてくるが、生返事で返すことで対処した。

広テーブルに積み上げられた本を眺めながら、欠伸を噛み殺す。つい先程人を怒らせた者の態度ではないと言われそうだが、まあいつもメリーに怒られた後はこんな感じだ

し……。

決死の謝罪案件（2ヶ月連続n度目）の末、私の命は二人行きつけの喫茶店の看板メニュー、ストロベリー・タワーパフェとの等価交換となった。安くない出費だが、命と比べれば安いものだ。

そもそも私もメリーも入学する際に入試点数最上位で入ったため、学費を始めあらゆる面で金銭的な補助を受けている。普通に大学生活を送る分には十分余りある額をもらっているため、多少の支出は問題ない。

「そんな考えだから過ちを繰り返すのではなくて？蓮子の財布を管理したほうがいいのかしら……」

「待ってごめんなさい反省してます許して」

口に手を当て、不吉な言葉を口にするメリーを見て本日何十度目かの低頭を決行する。日常における私達の力関係が如実に現れた一コマである。

窓から差し込む日差しに目を細める。人間が活動する上で最適な温度、湿度に保たれた室内だが、余計なはずの陽の光をありがたいたいと思うのは何故だろうか。完璧を追い求め続けたはずの人が不完全さを望む……これを矛盾と捉えるか人の性と見るかは意見が分かれる所だろう。

光が小型ノートPCの画面で反射していたため、角度を調整する。メリーに頼み込んで始めた共同レポート作成だが、私の画面はほぼ白一色で統一されている。自由度が過ぎる課題のせいか、逆にどう取り掛かっていけばいいのかが決まらない。

もちろん候補はいくつか考えているのだが、どれも甲乙つけがたく一步を踏み出せないでいる。サークル活動時には暴走気味とも言える即断即決力が、何故か普段は顔を引っ込めてしまうのだ。

待ち合わせ場所をここに指定したのは、そんな状況を打破できればという願望が込められていたからだ。

### 『西京都大学ライブラリーセンター』

たかが一大学の建物が、国立図書館と肩を並べるほどの書物収蔵施設であるなど、数十年前の人が見れば驚愕するだろう。

21世紀初めには電子化の発達によって、大量の情報を手に入れられる時代となっていた。それから百年以上たった今、ネットワークの進化は既に終着点を迎えており座ったまま瞬時に求める情報を入力することが可能となった。

量と速度。かつては莫大な価値のあったそれらが、科学世紀においては路傍の石程度

の価値しなくなってしまう。むしろ京都においては国によるクリーン活動が行き届いているため、小石のほうが貴重と言えるかもしれない。

逆に大きく価値を上げたのが質である。誰でも労せず普遍的なものを入力できるようになった事で、一品物に値段が付くようになったのだ。面白いことに、優れた性能を持つ量産品より平凡な性能である一品物の方が数倍、数十倍の価値が出ることも珍しくない。

例を挙げるならばお酒が当てはまる。味が整っており身体への悪影響が少なく、二日酔いになる心配もない新酒が安価で手に入る一方、かつては主流だった旧型酒を飲もうとするなら1週間はひどい生活を送る覚悟が必要になる。全てにおいて新酒が優れているというのに、価値の逆転が起きているのだから不思議というほかない。

物は試しで一度飲んでみたことがあるが、味のクセが強い上に翌日見事に二日酔いとなり昼過ぎまでベットに籠城する羽目となった。休日だったのが不幸中の幸いだが、万が一平日に飲んでいたらと思うと今でも冷や汗が出る。

似たような物としては合成食品もそうだろう。私達の世代では、土の中で作られた作物を口にするなど「ありえない」という認識が一般的となっている。私は昔ながらの方法で育った野菜とか米とかをもっと食べてみたいんだけど……。

まあ、私一人が声を上げた所で何にもならないことは分かっているけど。天候、気温

の影響を受けずに安定した供給を保てる合成食品の出現は、文字通り革命だった。今では他国にも普及しており、すべての国で合成食品が主流となる日も遠い未来の話ではないだろう。

(・・・でも、また食べたいなあ)

脳内に浮かぶのは昨年訪れたデンデラ野。宿泊した旅館で出された夕食は、お米、味噌汁、主菜副菜全てが天然物だった。

それまで数えるほどしか口にしてなかった天然物。合成食品とは明らかに違う食感や香りによってどんどん箸が進み、気づけば皿が空になっていた。これだけのスピードで食事をしたことは記憶にない。

おいしい、とは違う。お酒と同じで、どちらかと言われれば合成食品の方が万人受けするだろう。何より値段を考えればどちらを選べばいいかは明白だ。

それでも私は躊躇する。選べと言われたら、恐らくすぐに決められない。そして、その理由も分からない。

・・・話が逸れた。このライブラーセンターが日本有数の存在となった理由としては、先程述べた『質』が関連してくる。

紙媒体から電子への転換。スマホ一つの中に何万冊もの著書を貯蔵できるように

なったことで、本自体の価格が低下した。これは決して価値が下がったという話ではない。紙媒体で販売するよりも、電子式の方が安い原価で取り扱えるようになったのだ。

著者へ払う印税を増やしても余裕で採算が取れると分かり、出版社はもちろん、作家も舵を切った。結果として紙の本は緩やかに部数を減少させていき、その数字分を電子書籍がかつさらっていった。むしろそのお手軽さから、トータルの販売部数で見れば増加傾向にある。

昔は本1冊が喫茶店のコーヒー2〜3杯分の値段だったらしい。驚きだ。今ではほぼ同額なのだから。

誰でも多数の書物をその場で購入でき、常に持ち歩ける。相対的に過度期における書店、図書館の価値は下がり、書店に至っては電子化の波に乗り遅れた店から順番に潰れていってしまった。

このまま紙媒体は淘汰されるのか・・・そんな考えが世論に蔓延する中で西京都大学は時代の逆を目指した。大金を投じてそれまでの図書館を改築し、何倍にも膨れ上がったスペースに学術書、学問書を中心として本を埋めていった。

時代遅れに何故金を使う、電子で十分だろ・・・そんな声があちこちから聞こえてもなお、大学は止まらずに購入を続けたのだ。

何十年も前から続けてきたその行為は次第に形となって表れてくる。話した通り、一

品物や数の少なくなった物はそれだけで価値のある存在となった。では、『元々の数が少なかったもの』がその対象となったらどうなるか？

先程、コーヒー杯で電子書籍が購入できるといったが、例外がある。学術書、学問書という紙媒体の時点で部数小、高価格だった本については電子化してもそれなりの値段をキープしている。

専門的な本というものは作成する期間が長くなり、買い手も限定される。複数人が協力して執筆する例もあるため、必然的に値段を高くしなければ算盤を弾くことが出来ない。通常の本の数倍、ものによっては十倍の値がついても珍しくないのだ。

大衆書物とはかく、学問書に関しては電子書籍といえども懐事情の厳しい学生としては二の足を踏まざるを得なかった。

そんな中、大量の専門書を無料で読める施設があるとなればどうなるか？課題の難易度も最高峰の西京大生徒からすれば、こんなにありがたいものはない。

以前より『質』が高かったものが、『量』を揃えて置いてある。大衆向けの国立図書館と専門向けの西京都大学ライブラリーセンター。時代に逆行したやり方で唯一無二の存在となったこの場所にて、私の行く末を決める素敵な一冊と巡り会えたらと思っ  
が・・・

どうやら現実はそんなに甘くないようだ。

若干だらけ気味の私の前に置かれている複数の書物。複数の候補から決められない中、最後のひと押しをと思いい関係がありそうなタイトルを引っ張り出してきただけだ、そこで止まってしまった。

今特に力を入れて学んでいる超ひも理論。故ホーキング博士が残した遺言、マルチヴァース。その他どれもが魅力的に映ってしまい、決めきることができない。

一旦万遍なく薦めてみようかという意識が徐々に台頭してきている。決断の先延ばしだとは理解しているが、白紙のまま無駄に時間を浪費するよりはマシだろう。

「そんな訳で全く決まらないからメリーの課題も参考にしたいのー」

「そろそろ言われると思ってたわ、そのセリフ」

助けてメリえもん！との懇願に呆れた眼差しを向けてくるメリー。私がだらけてた時もうんうんうなっていた時も、涼しい顔で小型PCに文字を打ち込んでいた。

まあメリーを呼んだのもこれが目的だし。調べ物だけなら一人でも可能なため、声を掛けた時点でメリーは私が何を求めているか察しただろう。それなのにどうして遅刻した私。待つてくれていた彼女には本当に頭が上がらない。

専攻分野が違うため丸ごと参考にはできないとしても、何かしらの発見や閃きがあれば



ばそれだけで儲けものだ。カップラーメン開発者が天麩羅からヒントを得たように、自動改札機の開発者が流水からヒントを得たように、まるつきり関連の無さそうな事象同士でも思わぬ化学反応が起きる場合がある。

願わくば、その内容が一筋の光と成らんことを。そんな軽い(?)気持ちで反対側に周り、メリーのPC画面を覗き込んだ。

私のと違ってかなりの文字が打ち込まれている。ふんふんと文字を目に捉えて文章として読んでいく。そのまま読み進めて読み進めて……。

「……………メリーごめん。タイトル見せてくれないかしら」

「はい」

のんきな声で私の要望に答えるメリー。その目はいたずら成功!という感情が宿っていた。

ただ私には、それを十分に認識するだけの余裕がなかった。文章を読んで、彼女が取り組んでいるテーマを予測してしまったからである。

軽いタッチで画面がスクロールされていく。程なく最初に戻り、そこに映し出されていたタイトルを見た。瞬きしても文字は変わらなかつた。

「……………わお……………」

なんてものを選んでくれたのか、この人は。そこには予想通りの言葉が書いてあつ

た。

『クオリアについて』

科学によってありとあらゆる世の中の事象が解明された、科学世紀。それは、『クオリア』も言及された。

2000年代終盤、科学における最大の難問と言われたこの事象に世界の頂点、科学  
学術団体は声明を出したのだ。

「クオリアは、科学において解明できないことが証明された」  
と・・・。

## クオリア

「ねえ、蓮子。太陽や空の色を説明する時にあなたならどう言うかしら？」

窓の外に視線を向けていたメリーが、明るい声で尋ねてきた。声はこちらにはつきりと届いたが、顔は私ではなく快晴の空を見つめたままの状態だ。

一段と強くなった日差しが窓を通して私達を照らす。快適に保たれた空間に降り注ぐ、熱量を持った原初の光。自分も座ったまま自然に身体の向きを変え、無意識の内に両手を広げる。

それは、はるか遠くから届く贈り物。数十億年もの間、この惑星に変わらぬ光を与え続けてくれたその存在を包み込むように、広げた腕をわずかに閉じる。

抱え込もうとしているのに、暖かな日光は逆に私を抱きしめてくる。そのまま体を預けてしまいたいと感じるのは、DNAに刻まれた本能からくるものだろうか。

エジプト神話、ギリシア神話、日本神話とあらゆる著名な神話に登場することから、大

昔から人々は太陽崇拜、太陽信仰の心があつたと読み取れる。作物は太陽が無ければ育たない。陽の光がなければ、仕事をすることすらできない。夜の不気味さ、恐ろしさ、寒さを身に持つて経験しているからこそ、人々は絶対的な輝きに縋ったのだろう。

夜、黒一色と対を成す存在。だからこそ、私はこう表現するだろう。

「太陽は燃えるように輝く赤色。空は透き通るように広がる青色、と言うわね」

直視することができずに、目を細めながら質問に答える。一般的に太陽の色は白光色と呼ばれており、世界的には白色が主流である。これには高緯度低緯度の関係や瞳の色、つまりはメラニン色素と密接に関わってくるため、『あくまで白色と答える割合が多い』とも言える。

ちなみに欧米人は明るい色の瞳が多く、太陽光の刺激をより強く受けてしまったためサングラスを着用するものが多い。メリーも私達より光に弱いのかな？と横目を使うが、彼女の双眸はじっと太陽を見つめ続けている。どうやらメリーにとって直射日光はさしたる影響がないようだ。

とはいえ長時間の視認はよろしくない。試しにサングラスを勧めてみようか、との考えが頭に浮かんだがすぐに取り下げた。メリーとサングラスの組み合わせを想像し、そのアンバランスさをまざまざと脳内で認識してしまったためだ。抑えようと思ったが、堪えきれずに微かな笑い声として漏れてしまう。

すぐに左手で口を塞いだが、どうやら空気に乗って向かい側まで届いてしまったみたいだ。窓に向いていたメリーの視線が、こちらに移動する。私の体勢を一瞥し、呆れた眼差しを向けてきた。

どうやらひと目見ただけで私の現状および内情を見抜いたみたいだ。伊達に一年以上パートナーをしてる訳ではないということか。それでこそ我が相棒、とくだらないことをほざけば今度こそメリーが帰ってしまう危険があるので、一つ咳払いをして居住まいを正す。

その変化を見て、メリーも一つため息をついて今度は机に視線を落とす。様々な種類の本を重ねている私側と違い、彼女はとあるキーワードに関連する本のみを抽出して借りてきていた。

その内の一冊に触れながら、彼女は再び口を開く。

「そうね。太陽は赤色、白色、橙色、黄色。空は青色、水色と答える人が多いわ。蓮子に限らず、日本人は無意識の内に国旗を思い浮かべるのか赤と答える割合が高いわね・・・それじゃあ、続けて質問するわ」

私の回答になんでもないような反応を返して、言葉を紡いでいく。素っ気ないとも取れるが、おおむね予想通りだ。彼女が持つ本のタイトルを見れば誰だつて分かる。先の質問、私が何色と答えるのかははつきり言って、どうでもいいことなのだ。

パラパラとページを捲る音が部屋に響く。今メリーが無造作に手にしている本も、著名な科学者らが提携して完成した貴重な一冊だ。後半に差し掛かったあたりで、ページを捲る彼女の手が止まる。

「蓮子、今あなたが言った色……私が思い浮かべた色と、『同じ』だと思う？」

ずっと私を見据えた目は、蒼色に輝いていた。彼女が片手で広げている本の背表紙には一文字一文字全てが違う色で書かれたタイトルが乗ってあった。

『クオリア〜主観的体験が伴う質感〜』と。

一般的に、数学的に証明された、という事象についてはもはや議論の余地などない。喩え悠久の時間が経とうとも反論されることがなければ、未来永劫その存在は正しいことが確定する。科学世紀において、数学的に証明されたことは常に正しいのだ。数学的証明こそ、永久不変の真理と言える。

そこで過去に、数学的証明の積み重ねによつてこの世全ての問題を解決しようとするプロジェクトが発足した。時は1900年代前半、数学会の巨匠が旗を掲げたことで始まった「ヒルベルトプログラム」は世界中からの期待と注目を受けながらスタートした。

——数学理論に一切の矛盾はなく、どんな問題でも真偽の判定が可能である。

これが証明されれば、人類は真理の扉の鍵を手に入れたこととなる。時間はかかれど一つ一つ階段を登ることで、いつかは天へたどり着けることが約束されるのだ。数学に携わる者として彼の呼びかけに応じるものも多く、一つの証明に対して破格の人数で挑んだ彼らの心は、部外者の私が想像するだけでも非常にわくわくする。

・ ・ ・ しかし、結論から言えばそれは叶わなかった。当時若手でヒルベルトプログラムの懐疑的だった数学者の一人、ゲーテルがとんでもないことをしたのだ。

数学理論は不完全であり、決して完全には成り得ないことを『数学的に証明』してしまつたのである。

ゲーテルが発表した不完全性定理と呼ばれるこの定理は二つの事象、

・ ある矛盾の無い理論体系の中に、肯定も否定もできない証明不可能な命題が、必ず存在する

・ ある理論体系に矛盾が無いとしても、その理論体系は自分自身に矛盾が無いことを、その理論体系の中で証明できない

を軸としたものである。簡潔に言えば、たとえある定理が正しかったとしてもそれを定理内では絶対に証明できないというものだ。自己言及のパラドックスとも言い換えられる。

一つの定理は、それだけでは己の中に矛盾がないことを証明できない。他の定理を使用すれば証明できるが、今度はその定理の証明のため違う定理を使用して、というエンドレス。どんな理論体系にも、パラドックスは存在する。

ゲーテルショックとまで言われた現象と共に数学界を、引いては世界中を伝わった。真理の扉に繋がる、天まで続く階段を登っていた人々はその道が途中で崩れ落ちている



ことを証明されてしまったのだ。

反証しようと躍起になった者もいたが、あがけばあがくほど不完全性定理に絡め取られ、

ゲーテルの正しさを示すだけの結果となった。世界の真理を解明するため始まったヒルベルトプログラム。その結末は非常に寂しいものとなってしまった。

「分からないことを知ろうとする。未知という状態を人は、生物は恐れるわ。一瞬の気の緩みが自身の命を脅かす自然界では、周囲の状況を知ること自身を安全を確保していたの。知恵という叡智を手にし、地球の支配者となった現在でも、人間が進化をやめようとしないう理由はそこにあるのかもね」

「生物としての本能、DNAに刻まれたコードということかしら。孵化したばかりのカッコウがいい例ね……。未知を求めた先に、20世紀、21世紀それぞれで人は限界を目の当たりにしたわ。20世紀は不完全性定理で。そして、21世紀はクオリアで、ね」

メリーが持ってきた本の中から1冊を手取る。タイトル名は『クオリアに挑戦した科学者達』。メリーが今読んでいる本より大分噛み砕いた、一般層もターゲットとした内容となっている。

素数やフェルマーの最終定理一つに人生を捧げた数学者が多数いるように、1カ国の一つの時代の研究に生涯を費やした歴史研究家がいるように、クオリアという難題に自身の全てを掛けて挑んだ数学者は多い。

この事象は、永遠に続く式というわけではない。問題自体が常人には理解できない複雑怪奇な文章であるというわけでもない。何故なら、私達人間であれば誰もが感じている事柄だからだ。

「蓮子。あなたは空の色を青色と言ったわね。その青という色は一体何故、その色で見えているのかしら。一体どんな仕組みで、どこからやってきた色なのかしら？」

「.....」

「ある周波数の光が目に入ると見える。たしかにそうね。でもその色は、黄色でも赤色でも良かったはずなの。それなのにあなたは現実として、空を青色としてみている。この色は、この質感（クオリア）は一体どこから表れた色なのかしら？」

本を閉じ、メリーは再び空に目をやる。

青色の空。私達が当たり前のように享受している色が何故、『この色』で見えるのか。色での例えはあくまで一例であるが、赤い、青い、白いという質感について説明しようとした科学者はその全てが膝をつく結果となった。

物質を追いかけてその動きの規則性を調べるやり方では、私達の意識の中で起きた青

い質感、赤い質感という起源を原理的に説明することは不可能なのである。

仮に自分が赤色を見て、その時脳で起きた化学反応を説明することは可能かもしれない。しかしそれは、まさに今、自分が感じている赤い質感の起源を説明したことにはならないのだ。

そして、この質感を他人に対して表す事もできない。

「私もこの空の色は青色というわ。でも、蓮子と私がそれぞれ感じている青い質感が同じだなんて保証はどこにもないの。私が思う赤色で蓮子は青を見ているのかもしれない。青に限りなく近い水色かもしれない」

「あの夕日、真っ赤に燃えているね。そうだね。……って会話があって、それが通じているとしても両者が同じものを感じているとは限らない。両者が同じものを見ているとは限らないの……ねえ、メリー」

「何かしら?」

「私が言うのも何だけど、クオリアを課題の軸に据えるのはちよつとおすすめしないわ。私なんかより遥かに優秀な科学者が協力しあって、それでも届かなかつた問題なのよ」

少なくとも、一学生が挑める代物ではない。そんな意味も込めての忠告だったが、メリーの顔を見て杞憂だと悟った。

分かっている、という笑みを浮かべていたからだ。

「流石に本質的などころまでやろうとは思わないわ。第一、科学に関しては専門外よ。いくら物理学が哲学の分野に突入してきたとはいえ、今からやったら成果を掴む頃にはおぼあちゃんになっっちゃってるわよ。クオリアの題材は手段であって目的ではないわ」

「手段？」

「ええ。私にも、蓮子にも大いに関係のあることよ」

そう言うときメリーはこちらを向き、おもむろに人差し指を自分の顔に向けた。いや、顔というよりは……目？

行動の意味が分からずに困惑したが、そこでメリーが一度ウインクをした。

その瞬間、彼女の言いたいことがはつきりと伝わった。何故、クオリアという問題を選んだのかということも。

「そう、現在、人間という括りでは私達だけに備わっている不思議な異能。何故私達だけに見えるのか？その謎の切り崩しとなる可能性があるの。このクオリアにはね」

## 天体観測

晴れの日が好きだ。嵩張る傘を持たなくていいし、お気に入りの服を濡らす心配もない。足取りが軽やかになって、行動範囲も広がる。何より夜に、頭上一面に広がる星空を見る事が出来る。

数え切れないほどの光。地球上に存在する砂粒の数より遥かに多いと言われている星々の輝きが、気の遠くなるような年月を辿って、私の目に届く。人類が文明を築いたのは約数千年前。その期間が須臾に感じられるほどの旅を、光は踏みしめて来た。

見渡す限りの星。この光は、幾千億年前の輝きなのだろうか。その輝きを発した恒星は、今も存在しているのだろうか。

月はまだ、頂に達していない。望遠鏡から覗き込んだその姿は、普段見るより大きく、どこか妖艶な姿に感じた。

結局の所、私はメリーの課題をパク、もとい参考するという選択肢は取らなかつた。彼女がダイナマイト級のキワモノを持ってきたという理由が大半だが、私自身の感情も原因がある。

ライブラリーセンターを出た後、来てくれたお礼（と遅刻の謝罪）を込めてメリーと一緒に近くのお店に入る。そこは学生をターゲットにしているこじんまりとした喫茶店だ。料金は少々高めだが、珈琲の味・店内の雰囲気が非常に私達好みのため頻繁に利用している。

自分がやらかすたびにメリーにはストロベリー・タワーパフェをご馳走している。正直、これで許してくれるメリーが仏様に見えてきた。そしてそんなカロリーの山を食しても一向に膨れないお腹は一体何なのだろうか。全女子が血涙を流すこと確定である。

ちなみに今年に入ってから二人で喫茶店を訪れた回数は優に10回を超える。1ヶ月に2回のペースで訪れている計算だ。……いや違うの、偶には活動の打ち合わせとかで普通に訪れることのあるの。というかそつちのほうが多いわよ。多分。

注文したモンブランをつまみながら、他愛のない会話を交わした。秘封倶楽部のこと、大学のこと、美味しいスイーツのこと……私達にとっての日常が話題の中心とな

る。

課題が終わったらまた大掛かりな活動をしたいな、というメリーの言葉に私もうなずく。近畿地方で1〜2日のサークル活動は頻繁にしているが、本腰を入れた長期となれば昨年のデンデラ野以来ご無沙汰となっている。四季さんの件は、帰省が目的だったし……。

昨日ニュースになってた、民間向けの月面ツアーの話は結構盛り上がった。太古から太陽とともに信仰の対象ともなった月。アポロ計画を経て人類と月の距離は精神的に近くなり、この度とある会社が一般人向けの月旅行計画を打ち出したのである。

……まあ、一学生に手が出るようなお値段ではなかった訳だが。大人数での旅行にすることで一人あたりの価格は抑えられるらしいが、それでも一番安いプランですら私の預金残高より二桁多い。田舎であれば土地代込みで立派な一軒家が建てられるレベルだ。

いくら興味があるといえど、元手がなければどうしようもない。

「将来お金が溜まったら、二人で行きましよう♪」

楽しそうに思いを馳せるメリーに、そうね、と相槌を打つ。メリーの目は非常にキラキラしていて、ツアーの内容について一つ一つ挙げながらこれをやってみたい、これは

出来ればこうなつてほしいとマシンガントークを展開する。

普段は大抵のことのおいて私がどんどんと引つ張るケースが多いけど、たまに子供のよなな表情を見せてくれる事がある。私以外の誰にも見せたことがない、無邪気で探究心に満ち溢れた顔。それを見るたび、ああ、メリーも私と同類なんだと感じる。

暗くなる前にお茶会はお開きとなり、家に帰つたが……なんだか気持ち落ち着かなかつた。メリーとの会話の中に、引つかかるナニカが心の隅に居着いている。

喫茶店でケーキを食べたし、夕食はいつもより軽めにしよう調理に取り掛かろうとして……その手を止めた。どうしても、モヤモヤが無視できなかつた。

お湯を溜め始めたお風呂の栓を抜き、先程付けたばかりの部屋の電気を消す。

そして、両手で大きなケースを持ち、再び家の玄関を開けた。

勝手知つたる大学までの道のり、とは反対の方向に足を向ける。今回は荷物も持つてゐるため、いつもよりスローペースだ。

途中でバスの移動をはさみ、かれこれ40分ほどで目的地に着く。『京都オートキャンプ場』という看板の脇を通り、敷地内に足を踏み入れた。



受付を手短に済ませ、芝生の上を進む。何度も利用しているので、もう慣れたものだ。なだらかな丘に面しているキャンプ場、その一番標高が高い場所でケースを降ろし、一息つく。自然に囲まれた場所とはいえ夏真っ盛り、いくら薄手の服でも汗が滲んでしまふことは避けられない。先程買ったお茶で喉を潤し、短い休憩をとってから準備に取り掛かった。

ケースの鍵を外す。去年購入した時と比べれば所々に傷が目立ち、塗装も若干剥がれている部分があった。あまり丁寧に扱っていなかったからなあと反省するが、次の出番の際にはすっかり忘れているのだから、人間の頭というものは不思議である。

蓋を開け、バラバラになっている複数の部品を組み立てる。三脚をしつかりと固定し、光学レンズを取り付けて動作を確認する。最初は説明書を読みながら四苦八苦していた頃もあったが、今では数分あれば余裕で完成する。

時間が経ち、星空の中で月が輝く時間帯となった。その空に向かって私は組み立てた……望遠鏡のレンズを向けた。

気持ちが落ち着かない時、私は星空を見上げる事が多い。今の時間と場所を確定させる私の目には、星が数多の導き手に感じることもある。

中学校の入学祝いで望遠鏡を買ってもらってから現在まで、天体観測が趣味となつて

いる。昨年買い換えたこの望遠鏡共々、長い時間を共に過ごし、夜空を一緒に観た。

今いるキャンプ場は京都府内でも人工の光が届きにくい立地をしており、知る人ぞ知る天体観測の穴場となっている。一泊しなければ料金も非常に安く、深夜になっても交通の便があるためお財布的にも安全的にも優しい。

休日という事で人がいるかと思つたが、本日は珍しく人影がいなかった。多い時は10人ほどいる時もあるため、少し拍子抜けである。何度も会つて顔見知りになつた人もいるのでどんな話をしようか思いを巡らせていたが、無駄になつたようだ。

焦点距離を微調整しながら、接眼レンズを覗く。黒い背景の中央に浮かぶ、丸い景色。能力の使用を一旦止め、純粹な星空をその目に映す。

明日まで続く晴れ模様。澄んだ空気は天体観測にうつつけだ。夜の空を色褪せた存在にする人工の光も、遮る雲もない。ありのままの姿を、私に見せてくれている。

太古の人々は、無数の星を結んで自らの理解できる事象に当てはめた。人、動物、神、物……数多くの星座が神話と融合し、壮大な物語ともなつた。

太陽の光が届かない夜の帳。月は、星は、その闇を照らした。人々は夜を恐れながらも星に思いを巡らせ、様々な形を見出した。ロマンチックで、幻想的で、広大な景色。何度観ても決して飽きることなく、私を照らしてくれる存在に心を奪われる。レンズ越しに果てしなく広がる世界を観るたび、それに比べれば私の持つ悩みなどひどくちつぽけ

な物だと再認識させられる。

「・・・・・・・・とはいっても、悩みが消えることはないんだけどね」

天体観測を初めて30分くらいが経過しただろうか。小さな声で呟き、レンズから目を離す。

そのまま後ろに身体を投げた。パフン、と芝生のクッションに受け止められ、仰向けの状態で寝転ぶ体勢になった。

望遠鏡を介さない、肉眼で見る夜空。広くなった視界を埋め尽くす数多の輝きを、そのまま享受する。

普段ならこの段階で悩みが消えているのだが、今日はどうやら面倒くさいシロモノのようだ。とはいえ、天体観測の過程で正体不明のナニカについては判明した。

「・・・・・・・・将来、か」

モヤモヤした思いを言葉にする。口に出せば軽減されると思ったが、どうやらうまくは行かなかった。

ライブラリーセンターでの、喫茶店での会話が蘇る。

私は、自身の目が特別であることを知った後もそれ以上の行動は起こさず、他人には

隠しながらも何となくで過ごしてきた。秘封倶楽部の活動が始めってから活躍の機会が増えたが、逆に言えばそれ以外の変化はない。いやまあ、進化したのは結構な変化か。

しかし、メリーは違った。自身の、私の目について解明できないかということ真剣に考えていた。哲学の分野に突入しかけているとはいえ、畑違いと言つていいクオリアに挑戦しようとしたことから、その本気度が伺える。

自分を見つめ、先を見据えるメリー。その姿を見て、不意に自分の『今後』についても考えてしまった。

先程言つておいてあれだが、私は特別な目を持つている。しかし、それ以外は至つて普通の人間だ。西京都大学の学生であることは一つの誇りだけど、自分より頭のいい人は大学内ですらたくさんいる。世界に目を向ければ、私の頭脳などそこら辺に埋もれるレベルだろう。

専攻学部、学科から就職したい企業の絞り込み、調査も行つている。でも、そこに強い意思はない。絶対にこの企業に入りたいという思いもない。将来働かなければならないから、との義務からくるものだ。正直な所、大学で学んでいる内容の中で、大学院行つてまで極めたいと感じるものもない。

世間から見れば、ただの一般大学生。そんな私でも、メリーと一緒にサークル活動中

は『特別』を感じる事ができる。現の世界に残る夢を、幻想を追い求め掴み取りたい。その気持だけは、紛れもない本心だ。どこまでだって、メリーと一緒に行ってみたい。私達は、二人で一つの秘封倶楽部なのだから。

……でも、学年が上がって忙しくなったら？就職したら？お互い家庭を持つたら？

研究に明け暮れて二人の時間が取れなくなる。就職先がお互い違う県、もしかすれば違う国となり容易に会えなくなる。人生のパートナーと出会い、今抱いている探究心が徐々に薄れていく……全てが十分にありえる未来だ。

怖い。この気持ち、今の私の大部分を占める感情が無くなっていくのが怖い。ああ、そんなこともあったわね、と思ひ出話の一つになってしまふのが怖い。将来、どんな私になってしまふのかが怖い。

「あー……もう」

勢いをつけて起き上がる。背中についた草を軽く払い、再び望遠鏡を覗き込んだ。

一段と深くなった夜空に、一筋の流れ星が見えた。その光は真つ直ぐな軌跡を残し、数秒後に消滅した。

流れ星が消える前にお願いをすれば願いが叶う。有名な言い伝えだが、その時の私は

お願いどころか、  
言い伝えそのものすら頭に浮かばなかった。

## 二人でなら

日常と非日常の境目は、あつてないようなものだ。

何気なくくしやみ一つで、パチンと鳴らした指が原因で、何もかもが変わってしまったことだつてある。

「メリーはさ、決定論つて信じる？」

バスに揺られながら交わす取り留めのない会話。夕日は既に地平線の先に隠れ、朱に染まつた空からは徐々にその色彩が失われていく。日が沈んでからでも天照の加護は私達に届くのだろうか？影法師が風景と同化していく過程を見ながら、メリーに尋ねる。

家庭のある家は丁度夕食の時間帯。こんな時に出かけようとする人はそう多くなく、

現状バスに乗る乗客は私達二人しかいない。停留所にも止まらないバスは、ただ一直線に終点に向かって轍を刻んでいく。

一口サイズのチョコを摘みながら20分ほど経っただろうか。ほとんど街から離れていき、次第に大規模な食物栽培ハウスが見えてくる。土、気候、季節に左右されずに作物を大量に作れることで一斉を風靡したシステムは、合成食品の登場によつて活躍の場を大幅に縮小することとなった。

天然物より味で劣り、合成食品には値段の面で劣るといふ中途半端な立ち位置となつてしまつたが、それでも買う人は買っている辺り愛好家は多いのだろう。

まあ私としては、活動に資金を回したのでお腹に収めるものもつぱら合成食品だ。今食べているお菓子だつて、合成食品かそうでないかで倍以上の開きがある。それ以前に、手に入れるのすら一苦労だ。コンビニでは合成食品しか置いておらず、専門店で無ければそうそう見つけられない。

値段と手間を考えた場合、活動中はまだしもありふれた日常においては手軽な方に手を伸ばしたくなる。成分的な意味でも太りにくいし。

偽物が本物を駆逐する世。利便性の前では、真偽など些細な問題なのかもしれない。

「決定論？何、蓮子。クオリアは諦めてラプラスの悪魔を題材にする気かしら？」

「いや、まあ……」



一定のペースでチョコを口に放り込みながら返ってきたメリーの返答に、少し言葉に詰まる。

先週に私からのお願いでレポートに協力してもらったのに、メリーから受け取った提案を蹴ってしまった罪悪感がある。いやしようがないではないか。軽い気持ちで取り組める題材ではない。

メリーも本気で言っている訳ではなく、どこ吹く風といった表情でチョコを味わっている。私との会話よりお菓子へ向けている意識の割合が大きいのではないかと思うほどに、一口一口おいしそうに食べていた。私も一緒に摘んでいるのだが、あちらの消費速度の方が遥かに早い。

夕食を食べていないとはいえ、よくお腹に入るものだと感心を抱きながらも会話を続ける。

「結局レポートは超ひも理論で進めてるわ。専攻分野を生かしたほうが無難にまとまりそうだからね」

「それが良いと思うわ。下手に畑違いの分野に挑戦して、間に合いませんでしたでは笑えないからね。…….…….それより」

咀嚼を終え、お茶を飲んで一息ついたメリーがこちらを向いた。じつと見つめてくる視線に、早い段階で目を逸らしてしまう。

……言葉が来ない。いつもならこちらを向いた彼女はすぐに何かを話すはずなのに。

沈黙が落ちる。10秒か、20秒か。ただただ、バスのエンジン音だけが支配する状況に耐えきれなくなり、ちらつとメリーに目を向ける。

変わらぬ表情の彼女とバツチリ目があった。バツが悪くなつて再び目を逸らしたが、どこに向ければ良いか悩んでしまい、飛んでいるハエを追うように宙をフラフラと舞つた。

(さり気なく聞いたつもりだったのに……)

メリーがこんな行動に出ることは記憶にない。そんなに私の質問や動作がおかしかったのか、焦る本心を押し留めながら自分から言葉をかけるべきか、待つべきか迷う。ああ、もう。私らしくない。

こちらの心の揺らぎを感じ取ったのかは分からないが、メリーの表情に変化が生まれた。じつと見つめている目を伏せ、ため息をついたのだ。はあく、とこちらにはつきりと聞こえるくらいの大きさで。

そして再度重なる視線。彼女の表情は先程と違い、若干呆れたような色が見て取れた。

「決定論を信じるならピックバンの時点で私達の未来も決定されてしまったのかしら

ね。神様だつてサイコロ遊びくらいはしたいんじゃないかしら？」

「それは……」

「今夜、天体観測に誘つてくれたのも心の迷いが原因？」

ニコツと笑うメリーの言葉にドキツとし、足元においていたケースに意識を向ける。

「蓮子とはよく会うち出来れば毎日会いたいしサークル活動も頻繁にしてるけど、お互いの趣味に閑しては基本ノータッチでしょ。例外は囲碁くらいで、一緒に映画を観る機会は無かつたし……。そんな中で押し気味に誘われたのだもの。蓮子と会う前から『あ、何かあつたわね』って何となく察していたわ」

あつげらかんと口にするメリー相手に返せる言葉が見当たらず、スカートをギュツと握り下を向く。

現状への不満、不透明な将来への不安。何が正解なのか、間違っているのか。何の道を歩いていけば良いのか。分からないことだらけのまま終わった天体観測は、私の心を癒やすに至らなかつた。

大学にいる時は講義に没頭すれば良かった。友人と駄弁つていればよかった。メリーと一緒にいればよかった。余計なことを考えずに済むから。

しかし、家に帰れば一人だけの時間となる。一人暮らし相応の間取りを持つ学生向け賃貸アパート。自由になつた思考は、考えまいとしている心の闇を捉えて引つ張り上げ

ようとす。無視しようとしても、隠しておこうとしても無理矢理顕在意識の領域までせり上がってくる。

振り払えればどんなに楽か。目を逸らせればどんなに楽か。

一度火がついたこのくすぶりは、容易なことでは消えない。自身の不安を火種にして長い期間燃え続けるこの炎は、未だに弱まる気配を見せない。水では消せない精神の燃焼に気を取られるあまり、メリー相手に普段どおりの接し方が出来なかつた。勘のいい彼女が気づかない道理はない。

「いつものあなたはどこに行つたのかしら・・・なんて軽口は言えないわね、その顔を見れば・・・そうね」

少し思案顔になるメリー。それもつかの間、笑顔になつた彼女ははにかみながら口を開いた。

「まずは一緒に天体観測を楽しみましょう、蓮子」

「へえ、こんな場所があったのね」

つまんでいたお菓子が無くなったタイミングで丁度良く目的地に着き、ケースを抱えてバスから降りる。

私にとっては見慣れた光景もメリーには未知の景色だったらしく、興味深げにあたりを見渡していた。確かにこの辺りは学生にとって、意識しなければ通ることすらない区域だ。

一年掛けて京都を中心に様々な場所を冒険したが、それでもまだまだ知らない場所がある。むしろ仮に一生を掛けたとしても宇宙はおろか地球の、もつと言えば日本の大半を知らないまま生を終えるだろう。

訪れるだけなら可能かもしれない。しかし、その土地での生活、風土、伝記を深い部分まで理解するには3〜4日の旅行では到底無理だ。定住して、長い年月を掛けて肌馴染み込ませる必要がある。

科学がすべてを解明した？人の知がどんなに進もうと、私の周りには分からないことだらけだ。

この世の中は、未知のものだらけだ。

(・・・そうだ、だから私は)

空を見上げる。そこには満天の星が広がっていた。無数の輝き、その一つたりともこの手には届かない。だからこそ、追い求めたい。

特別な能力を活かせるから未知を追い求めた。確かにその一面もある。だがそれ以上に、未知そのものへの探究心があったから私はここまで来たのではないか。

不安を消すためではない。もっと純粋な、もっとわがままな理由のために、私は秘封倶楽部を名乗っていたはずだ。そんなことすら、一人のときは忘れていたみたいだ。

息をつく。別段、何かが解決したわけではない。メリーと一緒にいるから、という理由かもしれない。それでも今、私の中にくすぶっていた不安はひとまず鳴りを潜めた。

ケースを握る手に力がこもる。突然の誘いに応じてくれたメリーのため、今は精一杯彼女を楽しませよう。

明日の夜まで晴れ模様。天体観測にはうってつけの日だ。

「蓮子、夏にはどのような星座が見えるのかしら？」

「ああ、それわね……」

キャンプ場の芝生を踏みしめながら、二人で星空に思いを馳せる。見慣れたはずのその光が、いつもと違った輝きに見えた。

## それは、突然の

地面の傾きを確認した後、三脚台を展開させ、しっかりと固定する。光学レンズの取り付け、動作確認、微調整……何度も何度も繰り返し、頭で考えなくても手が勝手に動いてくれる、体が覚えた動作。

その動作を、メリーが興味深げに見ている。バラバラだった部品が一つの形に組み上がっていく過程を見て、小さな感嘆の声を挟みながら私の一挙一動を目に収めている。

ミス一つなく進んでいるというのに、何となく恥ずかしい。いや、こそばゆいといったほうが良いだろうか。今までは一人で行う楽しみだったため、誰かに見られながら準備を行った記憶がない。個人だけで完結する趣味であり、第三者の介入を必要とせずに行える。注目を受けながらの組み立ては、いつもより時間がかかってしまった。

二人で星空を見上げたことはある。しかしそれは秘封倶楽部活動という主目的の副産物として生まれた事象であり、腰を据えて行ったことは一度もない。メリーを自分の趣味に巻き込みたくなかったし、私にしては珍しく、自分のペースで行いたいものだったからだ。

「メリーは望遠鏡自体、見るの初めてかしら？」

「そうね……実物を間近で見たのは今日が初めてね。ちなみにだけど、この一式でどれくらいするのかしら」

「これはそんなに高くないわ。全部合わせて4万円くらいね」

「あ、結構ガチ目なのね蓮子」

驚いたようなメリーの声が聞こえたが、天体望遠鏡は性能を求めると文字通り天井知らずとなる。4万円台はまだまだ手を出しやすい部類だ。買おうと思えば1万円あればお釣りが付きで手に入るが、目に見えて性能が違ってくる。半年やそこらで買い換える物ではないため、可能ならば最初に奮発したほうが良い。

ネジを緩め、締めを繰り返す。鏡筒を設置し接眼レンズをはめ込めばあとはもう目だけだ。ファインダーを鏡筒に取り付け、ネジで固定すれば完成である。最初の頃はここで重心バランスがひどいことになっておりもう一仕事あったのだが、もう慣れたものだ。手をはなしてもグラつかずに静止したままである。

経緯台式の望遠鏡は、鏡筒を上下左右に動かすことが出来る。最後の確認として動作確認をしたが、異常なし。微動ハンドルともども、ひっかかり・違和感を感じずに動かすことが出来た。

バスを降り、30分ほど経過しただろうか。人工光が届かないこの場所で、いよいよ



星たちの輝きが最高潮に達しようとしている。

そういうえば二週間続けての天体観測はいつぶりだろうか。記憶をたどるが、中々たり着けない。もしかすると、高校以来かもしれない。

大学に入ってからにはメリーとの冒険が本当に楽しくて楽しくて。一人で無気力に過ごしていた時間が、そつくりそのまま倶楽部活動と相成った。時間を見つけては打ち合わせ、冒険……。それに加え講義、レポートも歩幅を揃えて大量に来襲してくる。

巡り巡る日常の中では、どうしても自分だけの趣味に割ける時間は少なくなってしまう。優先順位を考えれば当然と言えるが、結果として上京する前ほどは没頭できなくなった。些細な悩み事を空に託す時間があれば、メリーと一緒に秘密を暴きたい。そんな感情が当たり前になっていった。

彼女と会うときは、勉強、レポート、オカルト……。何かしらの理由があることが大半だった。私としてもそちらが有意義なのだが、偶には今日みたいな日があつてもいいかもしれない。

(・・・よし、これでOK)

微調整を終えて、頬を伝う汗を拭う。いつもより少し時間がかかってしまったが、無事に天体望遠鏡が完成した。私の動作を見て、メリーも近寄ってくる。

「お疲れ様、蓮子。意外と早く組み立てが終わるのね。ケース内の部品を見たときは、

30分以上はかかると覚悟してたわ」

「ははは、まあ最初は苦戦してたけどね。何度もやってれば自然と身につくわよ」

至近距離から天体望遠鏡を上げ上げと見つめるメリー。構成部品に興味が湧いたみたいで、私に一度断りを入れてから軽い力で鏡筒を動かし始めた。

メリーなら無茶な動かし方はしないし、まだまだバスの最終時刻までの時間はたっぷりある。彼女が満足するまで貸してあげてもいいだろう。

空を見上げる。今宵広がるは夏の星空。一般的に天体観測は空気が済んでいる冬にするのがおすすめであり、オリオン座をはじめとする星座やシリウス、アンドロメダ星雲、スバルなどの有名な星々を観る事ができる。だからといって夏は敬遠したほうが良いかと言われればそうではなく、有名な星座はもちろんのこと、冬ほど気候に意識を割かなくても良い利点がある。

気候なんて、と思う人もいるだろうが、冬の夜風は馬鹿にできない。京都自体が盆地に囲まれた土地にあるため、「京の底冷え」との言葉が生まれるくらいには体感温度が低い。気温自体は氷点下を切ることは稀なのだが、足元から耐え難い冷気が延々と纏わり付いてくるのだ。

星空を見て心を落ち着けるつもりが、違うことに気を取られて楽しめませんでした。は何をしに来たのかわからない。去年冬、東京と同じ感覚で繰り出して地獄を見る羽目

になったことは肌身に染み付いている。

もちろん夏でも体調管理は必須だが、気温の下がる夜に行うこともあり支障は出にくい。ペットボトルのお茶が一本あれば十分に間に合うレベルである。私は夏のほうが好きかもしれない。

望遠鏡から離れ、緻密な作業で疲れた身体をうんと伸ばす。能力も望遠鏡も使用しない、生まれ持つ瞳で空を見上げる。何者も介さない状態で見る星は、明るく遠い。あんなにも小さく見えるのに、地球、太陽よりはるかに大きな星が無数に浮かんでいる。

そこにあることは分かっている。はつきりとその存在を視認できる。なのに、人類の英知を結集しても見届けることが精一杯の、無数の輝き。亡くなった人を星に見立てる文化があるが、いつでも見られるようにという想いから生まれたものだろうか。それとも、二度と手の届かない場所へ行ってしまった悲しみを謳ったのだろうか。

どの方角を見ても、果てしなく遠い光が目飛び込む。そんな中、一つだけ明らかに異なる存在を見つける。

『月』。地球の最も有名な衛星であり、最も近い星。天体観測の時も、メリーとの冒険の時も、ずっとずっと見てきた輝き。

いつ見ても心を惹かれる不思議な存在。ああ、本当に……

「……月が綺麗ね」

「そうね蓮子未永く結婚しましょう」

「いやそういう意味じゃなくてね!？」

小さく呟いたはずなのに、瞬きした直後にメリーが目の前にいた。ちよつと待つてあなた一瞬前まで天体望遠鏡に夢中だったよね？絶対聞こえない位置にいたよね？軽くホラーなんだけど。こんな時間にビビらせないでよトイレ行けなくなるじゃない。

というかメリーさん真顔やめて。本当にそつちの意味じゃないから。ね？

簡単な操作説明と注意事項を説明して、まずはメリーに自由に見てもらおうことにした。オススメの星座を実践付きで説明する方法も考えたが、受動的になつてしまうと悪い取りやめた。始まる前からあれだこれだ説明してもやる気が削がれるだけである。最初は思いのままに自分なりのやり方で楽しんでほしい。

自分が口を挟むのは後からでも遅くない。幸い、本日も私達の他に人はおらず、実質貸切状態だ。キャンプに訪れている人はまばらに見かけたが、キャンプサイトとは距離

が離れているため気にしなくてもいい。

「わあ……」

自然と発せられた感嘆の声。天体観測が始まって30分。メリーは何度目かも分からなくなつた眩きを口にする。何の飾り物もない、それでいて熱がこもつた声。彼女は今、間違いなく空に心を奪われている。

毎日顔を上げれば見ることでできる光景、それを少し注意深く見つめるだけの行為。それなのに、こんなにも心を揺さぶられるのはどうしてなのか。

「すごいわ蓮子！月の表面がはつきり見える！あれがクレーターなのかしら？意識してみれば、確かにうさぎっぽく見えるわね」

無邪気な声を上げ、望遠鏡のレンズから目を離さないメリー。ずっと欲しかったおもちやを買ってもらつた子供のよう、片時もレンズから目を離さないでいる。今のセリフから、どうやら月をみているようだ。

自分も月に目を向ける。今は地平線に消えた太陽の光を受けて白色に光る衛星。太陽にも劣らない伝記、伝説が創られてきた妖艶な姿は、雲に遮られることなくはつきりと認識できる。満月ではないのが些か惜しいが、こればかりはどうしようもない。

魅力を伝えるための計画を練っては来たが、それら全ては良い意味で無駄になりそうだ。今のメリーの姿を見て、微笑ましくなる。

自分にも、こんな時期があったのだろう。中古の天体望遠鏡を買って、星座の知識すら縁のない状態でも楽しんでた時期が。不思議なものだと思う。星の知識、望遠鏡の操作技術、その他諸々は今の方が比べ物にならないほど身につけているのに、何も知らない昔の方がワクワクが大きかった気がする。

月に向かって右手を伸ばす。今の私には届かない存在と知ってなお、掴み取る動作をする。閉じた掌には、何も入っていない。

ああ、また考えてしまう。こんなにも宇宙は広いのに、人類は未だ衛星一つしか踏破出来ていない。一時期移住計画で話題になった火星も、未だに機械での探索、調査に留まっている。

一人人類は、どれだけの時を費やせば宇宙を『知る』ことができるのだろう。宇宙の年齢を考えれば、人間が築いた知識など塵芥にも等しい、矮小なものだろう。それでも、知ってしまったからには考えてしまう。

・・・私が生きている間には、絶対にたどり着けないことも含めて。あと100年で解明など、毎日のように科学革命でも起こらなければ無理な話だ。そもそも遠い未来、宇宙の果てを知らないまま人類が滅亡する可能性の方が圧倒的に高い。

(・・・不老不死になればなあ)

辿り着けるかもしれないのに、と頭によぎって、苦笑いととも流す。それはそれで、

勝るとも劣らない難問だ。

生きてもいけない死んでもいない状態。そんなものに簡単になることが出来れば苦勞などしない。

「蓮子、『夏の大三角形』でどの星座のことかしら？」

「ああ、それはね・・・」

月を堪能したのか、メリーが新たな星を求めて質問してきた。天体観測は今日が初めて、というメリーだが夏の大三角形に関しては知っているみたいだ。なら話は早い。

一度断りを入れて望遠鏡を借りる。接眼レンズの倍率もついでに変えようと思ったが、急に見え方が変わると違和感が生まれてしまったためこのままにしておく。

元々見せたいと思っていたため、スムーズにレンズの中に捉えることが出来た。ピントを微調整して、ピンぼけを解消する。

『はくちよう座 $\alpha$ 星 デネブ』

『わし座 $\alpha$ 星 アルタイル』

『こと座 $\alpha$ 星 ベガ』

それぞれ3つの星座の星一つずつを結ぶことで完成するアルテリズムだ。夏に天体

観測を行う場合、一番の目玉といつていいものである。なにせ……

「これのベガとアルタイルが七夕の伝説、織姫と彦星なのよね」

「……よく知ってるわねメリー」

「えへへ、ちよつとだけ予習をね」

いたずらつぽい笑みを浮かべるメリー。その左手にはスマホが握られていた。

もうつ、一から解説出来ると思つたのに。

私が頬を軽く膨らましたのを見て、彼女は笑いながら謝罪する。

「ごめんごめん、ここから先は蓮子の解説付きで観たいなあ。よろしくね」

ウインク付きでのお願いをしてもらつた。正直な話、ネットに書いてあること以上の説明が出来るかどうかは不安ではあるが。あくまで趣味の範囲で楽しむエンジョイ勢だし私。

とはいえ、今日はメリーに名一杯楽しんでもらうミッションがある。自分の知識を総動員して任務に当たろう。

調整が終わつたので、再びメリーに望遠鏡を覗かせる。今、彼女の視界の中心には大きな三角形が浮かび上がっているはずだ。彼女の観察の邪魔にならない程度に、解説を始める。



## 『離れ離れにされた夫婦、織姫と彦星が1日だけ会うことを許された物語』

元々は勤勉、勤労だった二人が結婚したことで怠慢になってしまい、見かねた天帝が天の川を隔てて東西に引き離してしまふ。それによって二人は悲しみ、働かなくなつてしまつた。見かねた天帝は真面目に働くなら一年に一度だけ会うことを許可した、という内容である。

その日こそが7月7日の七夕。日本では、笹にお願い事を書いた短冊を飾る文化が生まれ、現在も続いている。

・・・本日の日付は七夕をとくに過ぎてはいるが。いや、実際に天の川を見る時期としてオススメなのは8月なわけで。風情さえ気にしなければ、今の方が見やすいことは確かである。

「でも不思議ね。なぜ昔の人は二人の間を川というもので遮つたのかしら？すぐに渡つていけそうなイメージが有るのに」

「うーん・・・勝手な想像だけど、昔は今よりもっと重い意味があつたのかもしれないわね」

「と、いうと?」

「ほら、メリー。三途の川つて彼岸と此岸の間にあるじゃない。決して触れ合うとこ

の出来ない対極の存在。川ってその2つを明確に割く意味合いがあったのかもね」

あー、と接眼レンズから目を離れたメリーが声を上げる。私の説明である程度納得できたのか、スツキリとした顔で空を見る。急に肉眼での観察に移行したことで距離感が狂ったのか、目を細めて空を見ていた。

天の川全体を見るように、目線を上下に動かしている。

あの星の川が本当にあらゆる事象を隔てているのなら、一年に一度会えるのはむしろ幸運である。

「明確に割く、か。こちら側とあちら側を覆う、境界のようなものなのかもね」

一人、独白したメリーが何気なく天の川に手を伸ばした。2つの星を割く存在を、覆い隠すように。

その瞬間、空間が割れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

声を出したのはどちらだったか。どちらともだったか。突然の出来事に変な声を上げることしか出来なかった。

見間違えるはずがない。あれは、

「あ、待って！」

叫んだときにはもう遅く、空に開かれた裂け目はあつという間に閉じてしまった。何度か瞬きした後は、先程までと変わらぬ星の輝きが空を支配している。

でも、私ははつきりと見た。あれは、境界だ。結界の裂け目だ。今まで何度も見てき

たのだから見間違えるはずがない。

見つけた。新しい冒険への道を！

嬉しくなった私はたまらず相棒に声をかけた。

「メリー見た!?今の裂け目・・・」

振り向きながら声を掛けて、メリーを視界に収める。

メリーは自身の手を見ていた。顔面蒼白になりながら、目を見開いたまま。

## 月見酒

幻想郷の東端、博麗神社。

幻想郷と外の世界を隔てる博麗大結界の境目に位置する建物であり、代々博麗の巫女が仕えている。

時刻は夜。日中であれば暇を持って余した妖怪や妖精、申し訳程度に人間の参拝客が訪れることもあるその場所は、静寂に包まれている。

外の世界にある照明などない土地。本来であれば神社から遠くにある人里を一望できるのだが、この暗さでは人間には捉えることが出来ないだろう。人間には。

神社の屋根に一つの影があつた。月明かりに照らされた金髪は暗闇の中で絢爛に輝き、身に纏う白と紫の道士服は彼女がもつ曖昧さを助長させている。太陽はとつくに落ちていくにも関わらず差している傘をくるくると回しながら、静かに空を見上げていく。

レンガで作成されたアーチ状の屋根に腰を下ろしてから、彼女はずっとその体勢のままだった。顔の向き、視線を変えることはあれど、その先にはずっと天から降り注ぐ輝

きがあつた。

彼女は、表情を変えなかつた。普段は何を考えているのか分からない笑みを浮かべ、あらゆる者から『胡散臭い』『信頼はともかく信用できない』と揶揄される幻想郷の賢者たる面影が感じられない。地位も、妖力もまとわらない状態で、一界の妖怪としてそこに存在していた。

ふと、彼女のすぐ近くに空間の裂け目ができる。情緒的な風景に似合わない、薄暗い空間が脇に生まれたにもかかわらず、平然としていた。直後、その空間に右手を差し込み、すぐに引き抜く。10秒にも満たない出来事。引き抜いた手には瓢箪と小さな盃が握られていた。

傘を置いて蓋を開け、静かに酒を注ぐ。いずれもかなり年季の入った品であり若く見える女性を持つには不釣り合いなはずなのだか、不思議とサマになっていた。

注ぎ終えた瓢箪の蓋を締め、落ちないように立て掛ける。酒は透き通つた清酒ではない。夜でも分かる程度には白く濁つた濁酒、いわゆるとぶろくと呼ばれるものだ。見た目に反してほんのり甘く、口当たりの良さが特徴のお酒である。

スツ・…と盃を持つ手を空へ伸ばす。星へ、月へ、乾杯を行うような仕草を見せ、その状態で静止する。

風が吹き、鮮やかに輝く金色の髪が大きく揺れてもその手は微動だにしなかつた。彼

女は月を見ていた。はるか遠くにある、欠け一つない満月をじつと見つめて目を細めていた。

憂いを帯びたような、何かを懐かしむような、悲しみに満ちたような……つどれにも当てはまりそうでどれも違いそうな、そんな表情だった。

5分ほどそうしていただろうか。ふう、と息を吐き手を降ろして盃を口に運ぶ。あまり量は注がれていないとぶろくをゆっくり味わうように、舌で転がす。

そのまま喉を通り過ぎた所で、彼女は僅かに目を見開く。

「あら、おいしいわね。酒呑童子が勧めるだけのことはあるわ」

容姿より幾分落ち着いた女性の声が漏れる。知人の名を口にし、もう一度瓢箪を手を持ちとぶろくを注ぐ。先程より気持ち多めに注ぎ、再び口をつける。今度はクイツと早く飲み干し、一息ついた。

静かな夜。風と共に流れてくるのはコオロギの鳴き声くらいである。

「ふふ、深夜に野外での月見酒、中々いいものがあるわ。宴会で騒ぎながら飲むのも悪かではないけれど、静かに自分のペースで飲むのもまた趣があるわね。……ねえ、そうは思わないかしら、四季映姫？」

笑いながら振り向く彼女。その先にはいつからいたのか、表情を歪めた一人の女性が立っていた。

「・・・お久しぶりです、八雲紫」

博麗神社の屋根に腰掛け、ゆったりと酒を嗜む幻想郷の賢者、その者の笑顔を見て自分のしかめっ面が3割増しで渋くなる。眉間の皺に至っては過去最高の本数を更新しているかもしれない。

いつも通りの心が読み取れないニコニコとした笑みを向けられるが、今回ばかりは面倒くささよりも怒りの方が込み上げてくる。

「久しぶりね、閻魔さん。あらやだ、しかめっ面は似合いませんこと。折角の美人が台無しですわ」

「そうですね、あなたがつい最近まで冬眠してなければ私もこんな顔になってませうかね！今何月だと思っっているのでしょうか！」

華やかな彼女の声とは対称的に、私の声はそれこそ自身の職場から這い出てきたような怨嗟の籠もったものとなった。



八雲紫は冬になると長期の睡眠、つまり冬眠に入る。結界の維持に幻想郷のパワーバランス管理等々、多忙な仕事で疲弊した体を休めるために毎年数カ月間の休養を行うのだ。それに関しては私がとやかくいう立場にはない。

しかしだ、7月まで行う冬眠はついで聞いたことがない。

3月、外の世界から帰還した私は八雲紫の式神である九尾の狐のもとを訪れた。主が起きたら私に連絡してほしいと頼み時を待ったのだが……3月いっぱい、4月、5月となつても賢者は起きなかった。

最初は異変かと思つたが、博麗の巫女が動かない所を見るにそうではない。巫女の勘に引つかからないということは、ただ単純に目を覚まさないだけということとなる。

すぐにお伝えします、と笑顔で快諾してくれた九尾が日に日に焦り、やつれていくのを見て八雲紫に対するふつふつとした怒りが募つていったのは仕方のないことであると思つてほしい。昨日、安堵しきつた表情で主の起床を伝えに来た彼女を見たときに、今度一杯奢ろうと決めたのは内緒である。

そして自身の仕事を片付け、居場所を聞いてやつてきてみたら件の人物が一人心地で酒を煽つていたのだ。怒る。私でなくともこれは怒る。

「あら？ 藍はもう私がいなくとも結界管理を任せられるほどに成長しておりますわ」  
「そういう問題ではありません！ 藍さんから聞きしたのですが昨年末、3月上旬に

は目覚めると言って冬眠された。何ちやつかり4ヶ月ちよつとオーバーしているのです!? 冬眠の長さに関してはおきませんが、部下との極めて重要な約束を破ったことについて問いただしているのです私は!」

「まあまあ、私の身にいつ、何があるのか分かりませんからね。藍にとつても良い訓練になったことでしょう」

「当事者がそれを言いますか!?!」

「しー……あまり大声を出すと霊蘭（れいら）が起きてしまいますわ」

「むっ……」

感情のままに説教を飛ばしていたが、紫の一言で我に返る。

冷静になってみれば、ここは博麗神社の境内だ。騒いでしまつては就寝中であろう巫女に迷惑がかかる可能性が十分にある。仮にも閻魔という役職についている自分が、不用意に他人に迷惑をかけるような事があつてはならない。

口を手を当て、声を抑える。その様子を見ていた紫がクスクスと笑いながらスキマに手を入れてもう一つ盃を取り出したが、もう片方の手で制して止めさせた。オフとはいえ、人の説教に來た自分が酒を口にしてはいけない。何より、心情的に藍より先に飲むことは憚られる。

あら残念、と全く残念でなさそうな口調で紫は再びスキマにしまう。そのまま自身の

盃に酒を注ぎ、おいしそうに飲む。今すぐにそのお酒を藍に渡してほしい。

「……こんな話をしにきたのではない。彼女への説教を続けたいところだが、まずは約束を果たさなければならぬ。あれから四ヶ月、随分と時間がかかってしまったがだからこそこれ以上遅らせるわけには行かない。

無意識の内に、胸元に締まった浄瑠璃の鏡に手を添える。

「八雲紫、あなたにお願いがあります」

「宇佐見蓮子、マエリベリー・ハーンの二人に会ってほしいという事ですか？」

実は外の世界で、と続けようとした言葉は彼女の一言によって遮られた。いや、違う。予想外の言葉を聞いて、自身の声が詰まったのだ。

紫は相も変わらず微笑んでいる。しかし今、その笑顔が心なしか底無し沼に引きずり込まれるような不気味さを隠しているように見えた。

屋根の上にも関わらず、左足が一步後ずさる。

待て、私は今日この日まで頼まれた約束を誰にも話さなかった。外の世界に赴いたこととは小町や庭渡も知っている。しかし、そこでの出来事はずっと心のなかに留めていた。九尾に言伝を頼んだ時も、その詳細までは発言していない。

何故、彼女は私の質問内容を知っていた？

スツと紫が立つ。手にしていた盃と瓢箪は、いつの間にかスキマの中に消えていた。

「あなたも・・・視ていたのですか？いえ、しかしあなたはその時冬眠中のはず・・・」  
「視ていたではありません。『知っていた』のです」

自身より頭一つほど高い位置から声が届く。無地の扇子を広げ、口元を隠しながらわずかに仰ぐような素振りを見せる。

「四季映姫。あなたは自身の力と浄瑠璃の鏡で『視た』のでしょうか。あの二人の行く末を。これから起こりうることを」

そこで彼女は言葉を切った。目を伏せ、私から視線をそらす。

口こそ見えなかったが、月に照らされたその表情には陰りが差していた。その事実には驚く。いつも彼女は笑っていた。日常でも、宴会でも、異変解決時でも、その全てにおいて八雲紫という存在は微笑みと共に合った。無表情、思案顔ならたまに見るが、負の感情を表にはつきりと出す事自体が珍しい。

それこそ一世紀ほど前の・・・天界関連の異変時以来だろうか。天人くずれが目論んだ暴挙に対し、私は初めて彼女の怒りを目にした。

それは幻想郷と共に有り続けた者だからこそ身に纏える憤怒。幻想郷を誰よりも愛

し続けていたからこそ発せられた激情。先の戦闘で博麗の巫女に打ち勝った天人くずれといえど、その想いの前には無力だった。

幻想郷最強の妖怪。鬼、天狗、吸血鬼を始め数多の妖怪が暮らす最後の楽園における、妖の頂点。神に匹敵するとも言われる力を十全に開放した彼女の姿は心底恐ろしく、そして神々しかった。

幻想郷の危機だからこそ見ることが出来た、八雲紫の感情。逆を言えば、よほどのことがない限りは心を見せない。

常時外さない偽りの仮面。だからこそ、僅かとはいえそこに綻びが生まれたことが驚愕だ。二人の話では昨年末、八雲紫も彼女らと顔を合わせている。時間にして1時間も満たない程度の接触らしいが、そこで何かがあったのか？100年ものポーカーフェイスを崩す何が。

宇佐見童子の子孫。紫も童子とは認識があったはずだ。彼女関連なのか。

それとも……

(……似ている、と言われればそうかもしれません)

じつと彼女の顔を見つめる。二人の内の金髪の少女、マエリベリー・ハーン。……私  
が視た行く末のトリガーを引く者。

考えて、首を振る。詮索は後でもできる。今は、その前にすることがある。

「……何故知っているのか、これ以上問うことはしません。知っているなら話が早いですからね。……改めて、紫。二人の願いを、いえ、それだけでわありません。私から二人へのさらなる干渉許可もお願いします」

「あら、四季映姫。外の世界への過度な干渉はいけないのでは？」

「同情があるのかもしれませんが……それに、もう時間がない。あの結末の日まで」  
「……」

沈黙が降りる。扇子に隠れた口元がどの様になっているのかが見えない。しかし、私の言葉を聞いてくれているのは確かだ。

自身が視た運命の結末まで、もう時がない。私基準で見ても、人間基準で見ても残された時間は多くないのだ。

私は閻魔、楽園に席を置く閻王だ。どのような存在であれ、命を終えたものを裁く役割がありそれに誇りを持っている。でも、一人のヒトとして、人生を全うしてほしい、最後は笑って生涯を終えてほしいという気持ちがある。

二人に干渉した結果、どんな変化が起きるのはまだ視えない。しかし、確実に訪れてしまう未来を変えることだけはできる。確定された悲劇を避けることだけはできる。

二人が紫と出会って会話すれば、そして私がさらに関わることであれば……しかし、そんな想いは打ち消される。

「……四季映姫、あなたの干渉案に私は反対です」

「……ッ」

予想はしていた答えが八雲紫から発せられる。

過度な干渉は避ける。幻想郷の賢者として当然の判断だ。以前の邂逅は、彼女が必要だと感じたから二人に会った。理由があつた。

逆に言えば、その理由がなければ紫を動かすことは難しい。だが、それでも……言葉が続けようとした私の口は、紫のさらなる発言によって止められた。

「四季映姫、あなたは一つ勘違いをしています」

「勘違い……ですか？」

「ええ。あなたは二人の『結末』と言いました。私にはあの出来事こそが二人の『始まり』になるのだと思っております」

思っている、という言葉には力が籠もっていた。それこそ、確信していると言うような口調だった。

そして、その言葉の内容が信じられなかった。

「始まり……馬鹿なことを言わないでください。二人の未来はそこで途切れています。それより先を見ることが出来ません。なのに何故……」

「作品がハッピーエンドたる所以は、主人公やヒロインが幸福な状態で物語が終わる

からです。バッドエンドもまたしかり。もしかすれば結ばれた二人がその後、不幸になるのかもしれない。別れた二人がその後、新しい幸せを見つかるのかもしれない。」

「・・・あなたには、あの出来事の先が視えているのですか？しかし、もう一度言わせていただきます。私の瞳には、『宇佐見蓮子』、『マエリベリー・ハーン』、両者の未来が途切れているのです」

「それはそうですね。だって・・・」

扇子を閉じた彼女は、微笑みながら星空を・・・そこに浮かぶ月を見つめた。

「あなた、『私』の未来に関しては見る事が出来ませんでしたよね？」



## Everyday lacking something

『現実とはただのまやかしだ。とてもしつこいがね』

—— アルバート・アインシュタイン

「……これが、私達が考える結界の役割です。結界は現実と幻想、夢と現を隔てているのではないか？この考察をもって、発表を終わります。」

10分程度の発表を締め、私は静かに礼をした。まばらに聞こえる拍手を聞きながら、ほつと一息をつく。短い時間とはいえ、話しっぱなしというのは思っている以上に疲れるものだ。体力はそこまででもないが、精神面が。

そばに置いてあったグレープフルーツジュースを一口含む。苦さを強調した独特の味をしっかりと味わいながら飲み込み、喉を潤す。

「宇佐見さんは結界に関して表裏を分けるような表現を使っていたけど、これって隔てられた2つの世界には関連性があるってことなのか？俺は結界に関して、現実世界と異世界を分けるようなものだと思っていたけど・・・」

「そうですね・・・。細かいところになるけど、明確に違う考えを持っています。結界の先は異世界、という考察は両者の繋がりが全く無い別の事象だと捉えています。そうではなく、2つの世界は何かしらの関係があるのでは、と」

例えばパラレルワールドのような、と説明しながらどこか冷めた目で自分を見る。

数ヶ月に一度のオカルト関連の集会。わざわざ県外から足を運ぶ人も存在する、中々深い所まで神秘に取り憑かれた者ばかりだ。

自身の体験談や考察を持ち込み和気藹々と、たまには真剣な議論や発表会を行うオフ会のようなものである。場所はいつも決まって、日本の中心地である京都。遠い所では本州以外から訪れる人もいる。

形態を変えながらも昔から受け継がれてきたオカルトへの興味、関心。妖怪から、幽霊から、結界へ。人の探究心とともに合ったそれらは、今の時代も決して消え去ることがない。

まあ、人数は決して多くないけれど。実際に会う所までは中々行かないのが現状である。議論をするだけならネットで事足りるし、こちらの方がお金もかからない。社会人だけでなく私みたいな大学生、それよりも年若い学生となると、移動費、宿泊費を捻出するだけでも一苦勞だ。

一番若い人がいる地区に集まろうという提案も出したのだけれど、等の学生ら本人が京都に強い憧れを持っており、過去全てのオフ会はこの地で行われている。

各自の都合もあり、メンバーが全員揃ったことは一度もないが、それでも熱気が減ることはない。本日も高校生から定年間近の老人まで、10数人が集まった。

発表を終えた私に質問をしてきたのは、同年代の青年と年上の女性だった。青年は結界の考察に関して、女性は幻想世界の捉え方についてだ。

今まで何度か二人の発表も聞いたことがある。どちらも、私と同じ考えに至る部分もあれば正反対の解釈をしている部分もあった。

二人だけではない。皆が違う考え、解釈を持っている。同じものを見ていても、それをどう見るか、どう感じるかは十人十色。ましてや私達は違う人間だ。違う場所、違う年代で生まれ、違う景色を見て育ってきた。

そんな人達が、好きなテーマについて本気で考察して議論をする。本気で追い求めた事象を、自らの経験に照らし合わせて自分なりの『答え』を出す。

何ヶ月も、何年もかけて育て上げたその答えは、どれもが宝石のように輝いていて美しい。その人の想いに触れる瞬間はワクワクが抑えられない。

「・・・他の質問はないみたいね。では、私の番を終わります。」

・・・そう、抑えられないはずなのだ。

自分のグラスを持って、発表席から降りる。私の発表順は真ん中あたり。次の人のために場所を空けなければならない。

発表をし終えたあと、必ず感じる高揚感。質疑応答の最中に感じる眩しさ。それが今回、全く湧いてこなかった。

自分の席に戻る足取りが、心なしか重い。頭に靄がかかったように、思考がまとまらない。

顔を上げて、自身の席に座る。

「おう、おつかれ宇佐見さん。今日もすごい発表だったな」

一息つくまもなく、隣りに座っている青年、田原さんが話しかけてきた。奈良県出身の会社員で、私より4つ年上である。

この会の中では比較的年が近く、気さくで明るい性格ということもあって顔を合わせたときに会話が弾んでいる。内容は9割9分オカルト関連ではあるが。

先程質問してきたのも田原さんだ。オカルトに対する考察に関して、微妙に私と彼のアプローチは違うところがあるため発表会の時はお互い大抵一度ずつは質問をしている。

例に漏れず、今回も質問をして、返答をした。そしていつもどおりに接してくれる。その田原さんに対して……

「うん、ありがとうございます」

につこりと笑みを浮かべ、会釈をした。……大丈夫、普段と変わりないはずだ。いつもと同じように会話ができているはずだ、と暗示をかけながら口を開く。

年に何回もない貴重な集会なのだ。わざわざ他県から足を運んでくれた皆に、不快な思いはさせたくない。自分の問題で迷惑をかけたたくない。

そんな私の笑顔を見て、彼は不意に真顔になった。

「……宇佐見さん？」

「ん、どうしました田原さん？急に真顔になって……」

「ああいや、何だろう。ちよつと疲れてるのかなつて」

言葉を選びながらの質問に、ひゅつ、と息が詰まる。

一言目の会話で、見抜かれた。その事実に関心が冷えた。

いつも通りの態度を取っていたはずだ。皆からよく言われる、無鉄砲で、元気で、誰

とても笑顔で会話をできる、普段どおりの『私』だったはずだ。

そんなに・・・ひと目で分かるほど、今の私は変なのだろうか？

「それでは、次の発表です。飯山君お願いします」

司会の声が響き、次の発表者の番になった。発表中は私語厳禁のため、誰もが口をくむ。

会話の途中だった田原さんも、それを聞いて中断した。少し気遣うような視線を向けられ、萎縮をしてしまう。

理由は分かっている。

今まで、私は集会に皆勤賞で来ていた。いや違う。『私達』はずっと参加し続けてきた。

数ヶ月溜め続けた溢れんばかりの体験談、考察、そして情熱。それを『私達』は話せる範囲でぶつけ続けてきた。

私の相棒。秘封倶楽部の片割れ。マエリベリー・ハーン。彼女が初めて、集会を休ん

だ。

真夏の天体観測から2ヶ月、私達はいつもどおりに顔を合わせている。変わることなく授業で顔を合わせ、喫茶店でおしゃべりに花を咲かせている。普段どおりの生活だ。

……あの日から一度も、秘封倶楽部としての活動をしていないことを除けば。

## 些細な、大きな違い

人に言えない秘密というものは、誰しもが抱えているものだろう。

それは内に秘めた性癖だったり、隠している仕事のミスだったり、あるいはもつとドロドロしたものだつたりと千差万別だ。

私の場合は、「人と違う体質を持つ」という言葉にすれば単純なものだった。枕詞に唯一無二の、という単語がつくことを除けばの話であるが。絶対音感、アルビノといった何千人何万人に一人の割合ではなく、文字通り私だけの体質であり異能だった。

境界を把握できる瞳を持つて生まれた私は、人とは違う景色を見てきた。いや違う。この瞳を持たない人と違う景色しか見れなくなつた。

多感な中学生時代はそのせいで鬱になりかけていた。私だけが違う景色を見ているとすれば、境界はおろかそれ以外のモノも違う形で見えてしまっているのではないか。人も、動物も、植物も、地も、海も、空も、全て私だけはこのように見えているだけなのではないか。

夕日が綺麗だね。自然に囲まれていると落ち着くね。海の色が好きだなあ。

何気ない会話でさえ、他人と『同じもの』を共有できているのか分からない。



結果として、情緒不安定なときに様々なものに縋ったことでオカルト関連と巡り会えたので無駄ではなかった。

新しい発見の連続という未知、神秘に包まれた領域。それが偶然にも他人と同じかどうかを意識する私を救った。オカルトであるなら既存の物、現象では駄目なのだ。同じであつてはいけない、違うものでなければ発見じゃない。

今までずっと後ろ向きに捉えていた異能と向き合い始めた高校時代、その頃にはすっかりオカルトマニアになっていた。相変わらず自身の眼については他人に打ち明ける事が無かったが、それは

「人に気味悪がられるかもしれない」

「人に避けられるかもしれない」

という内心的な理由は消え失せ、

「私の能力が広く認知されることで騒動が起きてしまうかもしれない」という周囲への影響を鑑みた考えとなっていた。

高校時代の思い出はほとんどがオカルト関連だったように思える。帰宅部所属とはいえ、平日学校が終わってからでは少女の足で行動できる範囲はたかが知れているため、活動は主に休日に割り当てられた。

「……こうして振り返ると、秘封倶楽部を蓮子と一緒に立ち上げるまでは一人でいることが多かった。」

「……はあ」

大学の図書館で何度目になるか分からない、小さいため息をつく。昨日課題として出されたレポートを完成させるため訪れたのだが、肝心のパソコン画面はほとんど進展のないまま時間だけが過ぎていった。

いつもなら休みなく文字を入力するために動く指が、鉛のように重い。考えをまとめようとしても、気づけば上の空となってしまう遅々として進まない。

「どんなに集中しようとしても、どんなに振り払おうとしても、頭に浮かぶのは同じ人……いや、人達だ。」

八雲紫。私と同じ……いや違う。私の異能が進化したという表現がしつくりと来る、境界を操作する力を持つ女性。

四季映姫。私と対極にあるかのような人。八雲さんと正反対で、それでいて近い雰囲気。気を纏っていた人。

共通していることは、二人共想像もできない力を持っていること、そしてどちらも人

間ではないということだ。

四季映姫さんははつきりと断言したわけではないが、あれだけの出で立ちで普通の人間だなんて言われたら私は人間という定義を書き換える事となる。

そして、人は自身の知らないもの、自身とは違うものに恐怖を抱く。かつて蓮子が言っていたとおりのことだ。夜の闇を、説明の付かない怪奇を、自らの理解の範囲を超える災害を神の怒り、妖怪の仕業と表したのは無理矢理にでも理由をつけたかったから。

パソコン画面から視線を上げる。見慣れた図書館の風景と、近くの窓から差し込む陽の光。

空に目を向けると一つだけ、遙か向こうに微かな結界の入り口が見える。とはいってもいくら手を伸ばしても届かない高所、しかも空く気配すら皆無では、ないのとほぼ同じではあるが。

気がないのを確認してから結界に向け、静かに右手を伸ばす。脳裏に浮かぶのは、あの夜の出来事。星に埋め尽くされた夜空を引き裂いた、私の異能。

何気なしにかざしたあのときとは違い、今日は自らの持つ力を意識し、結界をはつきりと視界に収めて睨みつける。

(ひらけ……)

心の中で小さくつぶやき10秒、20秒、30秒……。

しかし、いくら待っても変化は起きなかった。そのことに対して、私は歓喜も、落胆も、安堵もしなかった。あれから2ヶ月時間があつたのだ。両手で収まりきらないほど、繰り返し同じことを試している。

それこそ、結界のある場所ない場所ゴチャ混ぜにして、時間帯などの条件も変えて行ってきた。

結果はご覧の通りではあつたが。どんなシチュエーションでも、あの夜のような『見えなかった結界をこじ開ける』事象は起こらなかった。

現状として分かることは、今の私には結界に干渉する力も、操作する力も確認できなかったという事だけ。何故あの時は開けたのか、それすらも説明できていない。

そう、分からないのだ。

現在の自分に宿る異能。一時のみの覚醒で既に失われてしまったのか、まだ干渉する力があるのか。

挙げていた手を下げ、窓から視線を戻す。ペットボトルの蓋を開け、乾いた喉を緑茶で潤すが気分はスッキリとしないはまだ。

異能が失われて、従来の境界把握だけしか残っていないのであれば問題はない。いつも通りの日常が戻ってくるだけだ。

ただ方が一、干渉する力が残っていたら？まだ試していない条件があるだけで、トリガーを引いていないだけだったら？

そう、あの夜の条件を羅列していった時、確実にまだ一つ該当していないものがある。

「……蓮子」

小さく、大好きな人の、大切なパートナーの名前を呼ぶ。

私の曖昧な異能と、蓮子の絶対的な異能、なんか両極端でバランスがいいわねと笑い合っていたことを思い出す。蓮子の異能だけが進化して、自分の異能には変化がなかった理由について考察していた風景が頭をよぎる。

結界を超えること。言葉で言うのは簡単だが、実際には危険を伴う行為であることは明白だ。どこに繋がっているのか分からない向こう側へ踏み込むのだ。文字通り、一步先は死地の可能性もある。安全な場所しかないのであれば上品蓮台寺の時だって、デラ野の時だって、あんなに緊張も興奮もしない。

いつだって、隣に蓮子がいた。そう、天体観測の夜も。蓮子が傍にいる状態では、まだ一度も試していない。

あの日以降、蓮子と顔を合わせていないわけではない。喫茶店で取り留めのない会話

もした。課題に追われる蓮子のサポートもした。いつも通りの日常と言える。……秘封倶楽部の活動はおろか、関連する会話すら一言も話していないことを除けば。

当然蓮子だって気づいている。元々会話の半分ほどは秘封倶楽部関連だったのだ。それなのに、一度も触れてこない。

2ヶ月もの間、彼女に気を遣わせてもいることが情けない。触れてこないことを感謝すると同時に、前に進めない自身に嫌気が差す。

だけど、どうしても踏ん切れないのだ。それはどうしようもないほどのエゴ。今まで散々、私が見つけた綻びから危険な結界越えをしてきたというのに、細かな、それでいて大きな違いに対する葛藤。

今までは開いていた結界を私が視つけていた。だけど、もし『私が切り開いた結界』で蓮子の身に何かあったら？

自身が被害を受けるのはいい。私が原因なのだから自業自得だ。でも、蓮子に危害が加わるのは耐えられない。

今まで私の異能で結界越えをしてきたくせに何をいうのだ、と別の自分がささやきかける。それはその通りだ。開いている結界を見つけるのも、結界を開くのも結局は結界を越える行為につながる。

それでも、一歩が踏み出せない。

## アドバイス

「宇佐見さん、悩み事があるの?」

会話の途中で、急にその単語が相手から発せられた。目の前の人物・・・昨年大学で知り合った紺野さんの一言に、軽やかな私の口調が止まる。

何故?と問いかける前に相手の顔を見ると、いつもの穏やかな雰囲気をつつ込みこちらを伺うような、それでいて確信を抱いているような表情をしていた。男女問わず学内に友達、知り合いが多いというのは私の数少ない取り柄の一つだが、その弊害というべきか個人個人とはとはあまり多くの時間を共有しているとはいえない。

紺野さんとは同じ学部ということで比較的よく会う間柄ではあるが、それでも毎日というほどではない。

「なんだろう・・・いつもと違うというか、無理して笑っている気がして・・・気の所為だったらごめんさい」

ぺこりと頭を下げる彼女。4限目が終わって本日はどちらも今後、授業がない日であるため近くの喫茶店を訪れた私達。



せめて悟られないようにしようという私の『空元氣』は、席について注文した飲み物が来る前の時点で見破られた。

ああ、と思う。『まただ』と思ってしまう。

そんなに私の顔に出ているのか、という返答はしなかった。どこかしら、予感があつたからだ。

オフ会の日、私の作り笑顔を初めて見破られてからは仮面をかぶることが更に下手になったみたいだ。紺野さん以外にも色んな人と行動を共にし、他愛のない会話をした。その過程で、同じような質問をたくさん受けた。新戸さん、山城くん、三根さん……挙げだしたらキリがないほどに。

「気のせいじゃないかな」

なけなしの平静とボロボロの仮面を保ちつつ、意識しすぎない口調で返す。飲み物が届いてからは最近のファッションや流行曲についてどんどん話題を展開していったが、紺野さんは相槌を打ちながらも時折こちらを心配するような視線を向けてきた。

分からない。普段の私が、どんな感じだったのか。どんな風に笑っていたのかか思い出せない。

結局、紺野さんとの久々の駄弁りは微妙な空気のまま終わってしまった。最後まで何でもないとは否定したが、彼女の疑念を払拭することは出来なかった。別れ際の

「今日はごめんなさい．．．いつでも連絡してね」

という言葉が胸に刺さる。紺野さんの誘いで喫茶店に来たことに対する謝罪だろうか。謝らなければならぬのは、私の方だというのに。

紺野さんと別れ、一人帰路につく。体調は問題なし、健康体のはずなのに足取りが重い。空を見上げると私の心情を再現したような、どんよりとした曇り空が広がっていた。今日の天気は雨も降ると言っていた気がする。気持ち早足で歩を進めるが、気持ちが全くついてこない。

視線を落とし、街並みに目を移す。首都ながら落ち着きのある京都という土地。大通りの脇を見れば、進むだけで冒険が始まりそうな裏通りへと続く道。それを見ても、私の心にときめきは起こらなかった。

（世界って、こんなに色褪せていたっけ？）

いつもと同じはずの景色を見ながら、自問するも答えは出ない。

大学の講義や懐具合などの関係で、2ヶ月間冒険に行かない時期は過去にもあった。そもそも、高校時代以前は半年間冒険できないことなんてザラだ。それなのに、こんな気持ちになったことはなかった。

．．．．．理由なんて明白だ。

家に着き、着の身着のままの状態でベットに倒れる。思い浮かぶは大学に入学してか

らの記憶。他愛ない日常、数々の冒険、そして常に私の隣りにいた人物。

「……メリー」

誰もいないのに、誰にも聞こえないような小声で彼女の名を呼ぶ。枕を抱きしめながら、親友にして相棒である彼女の姿形を脳内に蘇らせようとした。

でも、昨日も会ったはずなのにその姿がひどくぼやけて見えた。

「……で、私に相談に来たってわけね」

コト、と眼の前にカップが置かれる。お世辞にもこまめに洗われているとは思えない汚、いや趣のあるそれには湯気を立てたコーヒーが注がれていた。

ありがとうございます、と言って静かに一口飲んだ。自分が淹れるより気持ち濃い目の液体が喉を通り過ぎる。研究室の学生からは不評らしいのだが、私は結構気に入っている。

カップを置いて顔を上げると、不敵な笑みを浮かべている女性がいた。

金色の髪を腰まで伸ばしており、今では珍しくなったメガネを掛けている。歳は30代中盤だと聞いているが、正直20代前半といわれても納得しそうな程に若く見える。現在は白衣を着ている彼女だが、もし私服を着て学生の中に紛れ込んだら、知らない人は絶対に見破れないだろう。

親しみやすい、明るい雰囲気を感じていることも実年齢より若く見える要因かもしれない。

雰囲気だけではなく、実際に気さくな方だ。来年から配属予定だとはいえ、まだ研究室の生徒ではない自分の質問、相談にも時間の許す限り乗って頂いている。学問は勿論、時には日常生活に関する些細な事も聞いてくれる。話している最中に、話の主導権が奪われてしまうことも多々あるため、会話が好きなかもしれない。

「普段はハーンちゃんも一緒だからどうしたのかと思つてたら、成程ね」

「……はい、北白河教授」

指を組み、こちらを覗き込むように見てくる彼女……北白河教授の言葉に、私は返事を返す。

この人が、あの岡崎名誉教授の一番弟子と知った時はそりやあもう驚いた。岡崎夢美という人物はそれほどの、今後人類という歴史が続く限りは教科書を始めありとあらゆる媒体で語り継がれていくだろう方なのだ。

そんな偉人（予定）から全てを受け継いだ人物が私みたいな一学生の話当真剣に聞いてくれて、時には他愛ない話で盛り上がっている。発覚当初は真面目に腰を抜かしたのも、今となつてはいい思い出である。

「うーん、やつぱいいつもより元気がないわね。相当大きな物を抱えているみたい」

「教授にもそう見えましたか？」

「ええ、それこそ部屋に入ってきた瞬間からね」

砂糖をたつぷりと入れたコーヒを美味しそうに飲む教授。彼女にも一瞬で見破られていた。岡崎教授の弟子、という肩書だけで一生食っていけるのに自身の実力で30代のうちに教授まで登りつめたその頭脳は伊達ではないということか……いや、それは関係ないか。

お互いコーヒを半分ほど飲み、一息ついたタイミングで再び教授が口を開いた。

「よし、じゃあ宇佐見ちゃんの悩みを聞かせてもらおうかな？」

その言葉にはい、と返事をして私も抱えている思いを紡ぎ始めた。

メリーとよく冒険に行っていること。

そしてある時期を境にメリーが冒険を避けるようになったこと。

悩んでいるメリーに対して、自身が何も出来ないこと。

私は出来る限りぼかして、かつ分かりやすいように話した。当然ながら教授はメリー

と私の異能については知らない。教授自身がオカルトに関して理解のある方のため冒険の内容に関しては今までもある程度話しているが、結界を幾度も超えていることや八雲さん、四季さんとの邂逅については隠している。

もしかすれば隠し事をしている事についてはとつくにバレているかもしれないが、『隠している内容は何か』までは流石に突き止められないだろう。もし分かったらエスパークか何かだ。

教授は黙って私の話を聞いてくれている。特に相談事の際は滅多に話を遮ることはせず、話し終わるまで耳を傾けてくれる。

……ここ数ヶ月の間、メリー以外の人にここまで話したことはあったかな？と感じるほどに思いの丈を紡ぐ。

大学に入って、メリーと出会って、いろいろな場所を冒険して、二人で秘密を共有しあって。その一つ一つが私にとっての大切な思い出。

(……寂しいな)

気づいたら、私の口は閉じていた。あの日、私が天体観測に誘わなければメリーの異能は進化していなかったのではないか。そうすればメリーは辛い思いをすることもなく、今この瞬間も2人で次の冒険計画を立てていたのだろうか。

気持ちが落ち込んでいる時は、思考もマイナス方向へと傾いていく。

もしかすれば、このまま秘封倶楽部の活動自体が中断する可能性もある。その場合、高校時代までのように私一人で神秘を追い求めるのか、いや、追い求めることが出来るのか。

「……………そんなの、答えは決まっている。」

「出来るはずないよっ……………」

声が震える。この二ヶ月ちよつとの間、行こうと思えば私一人でオカルト巡り、結界調査に行くことも出来た。そのための予算も、時間も、情報もあった。

でも、一度たりともそんな気持ちは起きなかった。選択肢にすら入らなかった。だってメリーが一緒じゃないから。彼女と共に歩まない冒険にどんな価値があるんだろう？

「なーんだ、答え出てるじゃない」

「え？」

気がついたら、目の前に新たに注がれたコーヒーが置かれていた。

「宇佐見ちゃん。私があなたとハーンちゃんを見てどう感じていたか分かるかしら？」

頬杖をつきながら笑顔で教授が訪ねてきた。私とメリーの事を？もしかして……

「えーと、もしかしてうるさかったとか、研究の邪魔だったとかでしようか？」

「違う違う。それだったらとくに直接言ってるわよ。そうじゃなくてね、『2人の距離がかなり近い、いや近すぎるなあ』って気持ちだったの。」

「距離が?……!!いや違いますよ私はノーマルです!」

「あら、だったらハーンちゃんのこと好きではないのかしら?」

「好きではっ……あるけどいやそれは親友というか相棒としての好きであつて恋とかの意味では、つてからかつてますよね教授!」

慌てて弁明したが、教授が途中から笑いを堪えるように口を押さえ始めたのを見てつい大声を挙げてしまった。そうだった、この人結構いい性格してたんだ。

「真面目な話、2人はお似合いだとは感じているけど……。言葉が足りなかったわね。距離っていうのは物理的な意味じゃなくて精神的な方よ。最初にあなた達を見た時点でそう思っちゃたわ。」

コーヒーを飲み干した教授がじつとこちらを見つめる。眼鏡の奥の瞳は、こちらの考えよ読むような動きをしていた。

前半部分ともかくとして、後半部分に首を傾げる。精神的な距離が近いと言われたが、それは当たり前のことだと思っていたからだ。

メリーと知り合つて二年弱。普段は親友として、冒険時は相棒として接し続けていれ



ば自然と心の距離だつて近くなる。時間をかければ自ずと精神的に寄り添うのは不思議でもなんでもない。

そう考えたが、次の言葉で目を見開いた。

「言つたでしょ、最初見た時つて。時間を掛けてじゃない、初めから距離が近いなんて余程のことがないとありえないの。仮に両一目惚れがあつたとしてもそこまではならないわ。それこそ、『お互いが抱えている秘密を共有し合えた時』とかね」

自然口調で話す教授の言葉に、私は無意識のうちに目を、異能を持つ瞳を押さえていた。

納得した。凶星だった。

生まれ持った異能。家族にも信じてくれなかつた能力。もう理解してもらえないだろうと半ば諦めていたときに出会えたのがメリーだった。

……そうか、あの瞬間から私はメリーに依存してたのかもしれない。

秘封倶楽部を結成してからは、1人での活動はなくなつた。メリーと駆け抜けるにつれて、知らないうちに依存の糸はより太く、多くなつていた。

「教授、私の秘密を知つて……」

「うん？ 本当に持つていたのね。でも内容は知らないわ。それに無理に言う必要はない。ただ、原因があるとすればやることは一つよ。とことん、彼女と話し合いなさい」

バシバシ!と多少強めに背中を叩かれる。突然の衝撃にむせてしまい、咳が出てしま  
う。

教授はそんな私を見てゴメンゴメンと笑いながら謝り、言葉をつなげる。

「宇佐見ちゃん。私ね、今回はあなたとハーンちゃんの距離がちよつと離れてしまっただけのことだと思うの。お互いがお互いを嫌いになったわけじゃない。拒絶しようとしたわけでもない。相手を想うからこそ、踏み出せない。宇佐見ちゃんはまた距離を縮めたいのよね?」

「……はい」

「ふふつ、ならハーンちゃんと話し合うことよ。相手の気持ちを鑑みたり推測したりはできても、知ることは1人では出来ないの。相手と話して、直接聞くこと。2人の関係なら、きつと出来るはずよ」

そう言ってウインクをしてくる教授に、胸が熱くなった。

全部、お見通しだった訳だ。私がメリーに尋ねられなかったのは、彼女が心配であるのと同時に、無理に聞き出そうとすることで今の親友という関係も崩れてしまうのを恐れていたから。自分でも気づかなかった、いや、目を逸していた事実を差し出してくれ  
た。

私に足りないものは勇気だった。メリーとの日常がこれ以上崩れないように踏み出

すことを躊躇っていた。

「……随分と遠回りしたけど、教授のおかげでようやくやらなければいけない事が見えた。」

「北白河教授、ありがとうございます。今から行ってきます」

「礼なんていらないわよ。行ってらっしゃい」

頭を下げ、教授の声を受けて部屋から退出する。階段を駆け下り、その勢いで建物から外に出る。

広い中庭に辿り着いたところで、ポケットからスマホを取り出した。待ち受け画面に表示されているのは、デンデラ野旅行での2ショット。

まだ1年も経っていないというのに、随分と昔のことに感じてしまった。

「……よし」

一呼吸を入れ、私はメリーに電話をかけた。

## 葛藤と覚悟

「……ようじ」

一言、自分に言い聞かせるようにして小さくつぶやく。生憎の曇り空ではあるが、降水確率はほぼ0%の本日。上空微かに垣間見える青色を見ながら、私は知らない間に力を込めていた右手を緩めた。ギュツと握り拳を作っていたせいだろうか、開いてみるとじんわりと汗が滲んでいる。

手だけではない。秋どころかも冬の影が見えている時期だというのに、心臓が落ちて着かず額から汗が落ちた。

喉が乾いたためコップに麦茶を入れ、一気に飲み干す。この行為だけでももう3度目だ。おかげで用意していたアクリルポットの中身が4分の3ほどまで減っている。最悪もう一つ冷蔵庫に入っているし、コーヒーや紅茶、緑茶の準備も済ませているので飲み物が無くなる心配は皆無ではあるのだが。

時間を確認すると、あと数分で午後2時になる頃合いだった。約束の時間まではあと30分ほどあるが、メリーは決められた時間より早めに来る事が多いため、私も既に部

屋の掃除、飲み物の用意などを終わらせていた。

いつもなら自分が時間に遅れて迷惑をかけてしまう、というパターンが多い、というより日常となっているのだが今回ばかりはそんな真似を出来るはずがない。

そう、先程ちらつと触れたが、私はメリーを待っている。あの日を境に生まれた、小さくて大きな溝。自分も、おそらくはメリーも相手を想うが余り一步が踏み出せないでいた。踏み出した結果、今まで培ってきた関係までもが壊れてしまいそうなのが怖かった。

後ろ向きで、私らしくない思考。それを助けてくれたのが北白河教授だった。助言をもらい、覚悟を決めた私がメリーに連絡したのが今週半ば。

『本音で話し合いましたよ』

と伝えた時、メリーが微かに息を飲んだのがスマホ越しに聞こえてきた。数十秒の沈黙後、時間と場所を指定してきて、急ぐように電話が切られた。

カレンダーに目を移す。今日は土曜日、お互い講義も予定もない日である。

これから私は、メリーと話し合う。それを意識した瞬間、落ち着いていた心臓がまたざわつき始めた。彼女がわざわざ土曜日を指定してきたということは、この話し合いが一日で終わらないと考えている節がある。

……私もその可能性を考慮している。秘封倶楽部が結成して、いや、出会っ

て以降初めての、本音を本気でぶつけ合う話し合い。日が暮れる前につつがなく終わるだなんてそれこそ幻想だ。

私は今日、メリーを傷つけてしまっただろう。もしかすれば、メリーの言葉が私を傷つけるかもしれない。それでも私は前に進みたい。今みたいな、遠慮しあつて冒険が出来ずに日常生活でのメリーの会話すら楽しめない関係が続けたいとは思えない。

『ポンポン』

チャイムが鳴った。相変わらず来るのが早い。

「はい。今開けるよ」

なるべく平常心を保ちつつ、私は玄関に向かった。

どんよりとした空を見上げつつ、私はいつもより小さな歩幅で道を歩く。

歩調に合わせて、トン、トン、と傘の先が地面に当たる。今日は降らないとの予報だ

けど、明日になったら幾分怪しくなるため念には念を入れての用心である。

手に持ったバックには、1泊分の着替えが入っている。秘封倶楽部活動の計画を練る際は毎回蓮子の部屋にお邪魔しているのだけど、盛り上がったときなんかは気づいたら日付が変わっている事がザラにあつたので、長引きそうな際は予め泊まる準備をするようになった。

それに、上品蓮台寺の時のように深夜の時間帯をターゲットにした冒険もあるため、備えは無いよりあつたほうがいい。

……逆を言えば、秘封倶楽部の活動以外で泊りがけという経験は無かった。

駄弁るだけならいつもの喫茶店を利用すればいいし、オカルト以外ではかぶった趣味がないためである。

一歩一歩、少しずつではあるが確実に目的地への距離が縮まっていく。それに比例するように、私の気持ちはどんどんと重くなっていく。

蓮子の家へと向かうのに、こんなに沈んだ感情になるのは始めてかもしれない。踏み出す足に泥が絡まっているかのように私を押し留めようとする。

蓮子から電話を受けたのは、数日前のことだった。

話し合いをしよう、という何気ない、それでいてはつきりとした口調での一言を聞いた時、私の心臓が跳ね上がった。

鼓動が早くなるのをなるべく意識せず、詳細な日時を取り決めて電話を切る。その瞬間、ふっ……と力が抜けてその場にへたり込んでしまった。いきなりそんな行動をとったせいで、その時一緒にいた友人を驚かせてしまったのは今でも本当に申し訳なく思っている。

電話を受けてから今日に至るまで、心には大波が立っていた。授業中も、食事中も考えるのは蓮子のこと。いやそれは割といつも通りなのだが、彼女を思い浮かべながらも心が踊らないのは今までになかった。

きつと蓮子は踏み込んでくる気だ。あの日の出来事について。私の異能について。そして、秘封倶楽部について。

止めてほしい、とは思わない。むしろこの数カ月間、よく触れないでいてくれたと感謝しているくらいだ。私達を繋ぐ最も深く、太い絆。それを私の方から数カ月間、勝手に切っていた。

授業の合間に偶然会って会話をしている時も、休日いつもの喫茶店で駄弁っているときも、蓮子の表情にははつきりと気遣いの模様が浮かんでいた。

聞こうと思えばいつでも聞ける。でも、そうすればヒビが入ってしまうかもしれない。傷つけてしまうかもしれない。そんな感情が言葉にせずとも私に伝わってきた。

ごめんなさいと謝りながら、私はその優しさに甘えた。2週間が経ち、1ヶ月が経ち、



どんどんと冒険の空白期間が伸びていく。そんな折、私の心に飛来したのは恐怖だった。

冒険にもオカルト巡りにも行かない、『秘封倶楽部活動をしない』私達は果たして親友と呼べるのか？

蓮子と居る時、私達を繋いでいたものは間違いなく秘封倶楽部活動だった。オカルト巡り、結界超え……思い浮かぶのは手を取り合い、2人で駆け抜けた冒険の日々。その一つ一つがあまりにも刺激的で、何一つ色褪せない思い出として残っている。

でも、それ以外は？

お茶会、勉強会、食事。天体観測に関してはあの一度きり。そしてその殆どに秘封倶楽部活動が絡んでいる。お茶をしながら、食事を摂りながらの計画立ては何度行った数え切れない。

そんな私達を繋ぐその糸が切れたままの場合、どうなってしまうのか。

そこまで考えに至って、ギュツと心臓を掴まれたような錯覚を覚えた。

今はまだ顔を頻繁に合わせている。しかしこれから数ヶ月、半年、1年と時が過ぎれば過ぎるほど、切り離された2人の距離は遠くなっていく。

他に共通の趣味があるわけでもない。それに蓮子は非常に明るい性格だ。私と違っていつも友人に囲まれて、輪の中心に居る。彼女の太陽のような明るさに集まってくる人は多いだろう。

私とのつながりが切れても、蓮子は……

そこまで考える度、私は思考を止めていた。私の能力が原因で蓮子を傷つけたくない。今の状態から踏み込む勇気がない。でも、今のままでは近い未来、彼女との繋がりが無くなってしまふ恐れがある。

堂々巡りとなって動けなくなった私。そこから動かしてくれたのが今回の蓮子からの電話だった。

いつも、いつも蓮子に助けられてばかりだ。蓮子無しでは生きていけないのではと考え、それこそ今更かと苦笑する。

今回の話し合いで、私達の関係がどう変わってしまうのかは分からない。それでも避けては通れない、必要なことだと頭の片隅では理解していた。

心が重い。今が壊れてしまうのが嫌だ。それでも、この想いをぶつけるしかない。

覚悟は……決めてきたつもりだ。

蓮子のアパートへ辿り着き、いつものように彼女の部屋の前まで来た。約束の時間よ

り30分ほど早い。

挙げた人差し指が、微かに震えている。その震えが止まらないまま、私はチャイムを鳴らした。